

〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編

安政五年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料(紙数九八枚)」の記載あり〕

目録

琉球ニ於テ蒸氣船御注文ニ付市來廣貫へ御直書

蒸氣軍艦代物之取調上申書(石室秘稿鈔)

参考 仙波市左衛門永賢へ賜書

琉球ニ於テ汽船購求談判ノ要略及ヒ佛人惠与品

琉球国ニ於テ蒸氣船其他買入ノ談判在番奉行高橋縫殿届書

蒸氣船買入事件市來廣貫届書

摂政三司官等へ御内用向達ノ手扣

琉球官吏蒸氣船詔文約条書

市來届書

蒸氣船御詔文御停止ノ趣島津下總・新納駿河ヨリ琉球在

番奉行へノ達書

町田主馬市來へ達書

山田壯右衛門市來へ書簡

山田・豎山私翰

江夏十郎市來へ私書

高橋縫殿届書

蒸氣船御詔文其外諸事御取熄ノ儀琉役々御届書

安政五年戊午九月二日御訃音到来及ヒ御密用停止ノ達並

ニ変約顛末

御密用ノ一切停止變約帰屢復命之事實

篤姫君將軍家定公へ御結婚ニ就テ御拝領品

今和泉郷他田村ノ池水灌溉ニ着手シ玉フ

城地移転ノ御目論見

考証 吉井友實手記

在京原田才輔内報

伊勢神宮勅使発遣詔書

神宮其他奉幣費不足

穎娃山川指宿三ヶ郷人員調

齊彬公学識アル者ヲ度外ニ措クノ弊ヲ矯正

擊劍對抗仕合ヲ催サル

石清水八幡宮勅使

鴨社勅使

二六八 琉球ニ於テ蒸氣船御注文ニ付市來廣貫ヘ

### 御直書

出帆前分テ申聞置候蒸氣船取入之儀、油断ハ無之ト存候得共、是ハ當時何ヨリモ肝要之品故、其方差遣候ハ

第一此為ニテ候間、琉人ヘ能々申諭、早ク取入相成候様取計專一ニ候、

一 船ハ軍艦ト商船ト申置候得共、先ツ初ニ軍艦之方ニ可致候、船ノ長三拾四五間程ニテ内車之方可宜ト存候、

大砲ハ二十四lb(ポンド)ヨリ三十lb位迄ヲ、法之通り拾七八挺

二 拾挺位ハ備付候方ニ可致候、

一 小銃モ近代發明ノ方乗付候様ニ申、外ニ千挺程ハ備打用(銃隊ノ通唱)ニ可致候事、

一 船之乗方ニハ、異人夫々乗付候テ師匠ニ相成候故、申付置候通ニ可致候事、

一 船代金ハ判金ニテ可相渡候間、凡之程相知候ハ、早々

武兵衛(堅山)・壯右衛門(山田)・八郎(堅山武兵衛長男)ヘ可申遣候、手当ニ差支不申候様肝要ニ候事、

一 此取入其外唐ヘ之一条、惣テ表方(藩庁)ヘ先ツ不相洩事第一ニ候、武兵衛・壯右衛門・八郎・十郎(江夏)之外ニハ不申遣、秘密ニ可致候、

一 江戸ニテ取計御届向之事ハ、直ニ申聞候通ニ致候間、

念遣ハ無之候、早々表方ヘ洩候テハ、取計仕苦ク候間心得可申事、

一 船之事ナト琉人共コバミ候ハ、キヒシクモ程能クモ可申論候、此処第一ニテ不仕損様可心掛事、

一 佛人共万一請合不申候ハ、イタラシキ伊多良敷其外人撰ニテ召列、福州迄モ差越、イギリス・フランス其外オラ

ンタ人ニテモ調文可致候、何分早ク取入ニ相成候義ヲ急キ候事ニ候、

一 琉球ニテ此事詰役々者ヘ先ツ不相洩第一ニ候、相洩候得ハ直ニ世間ニ可知候間、此処至極心得第一ニ候、

一 申付置候通り、異国人ヨリ振り付(幕府其他ノ嫌疑ヲ憚リ、外国人ヨリ押々ニ買セタルヲ云フ)候方之取計ヲ、上手ニ相談可致候事、

一 異国人ハ丁寧ニ取計、是迄之様稠敷致ニ及不申候、又

交易之事ハ長崎エモ道ヲ付置候間、分り次第ニ異国人

琉球へ参候様可為致候、運天(琉球)・大島之兩所ニ場

所見計置、交易為致可申事、

一 三司官共之善悪、船毎ニ可申遣候事、

一 座喜味之事ハ取計相達置候、駿河納新へ申付置候間、縫

殿高橋へモ直ニ申付置候、オノツカラ可承候事、

一 福州琉館取弘之義モ、早キ方ニ可為取計候事、

一 臺灣島ニ汐掛り場取設ノコトモ、前条一緒ニ相運ヒ候

事、

一 商船之事ハ、軍船ト一緒ニハ混雜可致モ難計、其事ハ

佛人共之申出可承候事、

一 船ハ来夏迄ニハ是非ニ届キ候様可致相談候、段々江戸

・大坂等之事ニ付、手当不致候テハ不相濟訳モ有之候

江戸・大坂等云々深  
速ノコトナラン

一 乗付異人之義モ、十人・或十人ハ今ヨリ三四年伝習為

致、其後ハ此方之人ニテ為相濟修行可為致ト存候事、

一 大砲玉ハ発明ノ着発計リ詔文可致候、小銃・小鳥銃モ

新敷方詔文一二挺可致候事、

一 異人へ送り用之品・反布類、壯右衛門ヨリ可遣申付置

候、

一 草木モ珍敷品取入可遣候事、

正月二十日安政五戊午

正右衛門へ四郎  
旧名

先日壯右衛門・八郎へ遣候手紙ハ、タシカニ見申候、

牛胆・ゴム木モ相届候事、

軍艦之事ハ、井上(庄太郎)・宇宿(彦右衛門)ナト吟味

申付候間、出帆前ノ通りニテ、佛人共へ猶又相談第一

ニ候、琉球手切りニ取入候儀ニ御座候間、江戸ナトニ

テ評判不致、堅固ニ仕掛、又乘リ方モ其通之事ニ候、

早々取入候得ハ何ヨリノ為メニ相成、手本ニイタシ追

々取入可相成事ニ候、能々念入第一ニ候事、

右安政五年午正月、堅山八郎ヨリ之書状内ニ被相下候事、

此外山田壯右衛門・堅山八郎・江夏十郎等ヨリ問合書等ハ

御趣意書同然故略ス、

又出帆前御沙汰書モ略ス、

〔安政四年八月二十三日〕

一 渡毎前於二ノ丸御茶屋御直御沙汰并御端書左之通、

蒸氣軍艦

長三十四五間程

一艘

スクルーフ仕掛

三百四五十馬力

大砲二十挺計

新發明ノ方

小銃百挺計乗セ付新發明

一 蒸氣商船

一艘

長三十七八間計

積荷多キ方第一

三百四五拾馬力

一 乘方師匠之事

一 運用方師匠之事

一 通弁人之事

一 測量方之事

一 唐通詞之事

一 初生出方之事

右之通御直書ニテ候事、

二六九 蒸氣軍艦代物之取調上申書(石室秘稿鈔)

蒸氣軍艦御詔文概略左ノ通り、

木製蒸氣軍艦老艘、船ノ長六十尺乃至四十四五尺、日

本尺度ニシテ凡ソ三十四五間、機関ハ螺旋仕掛、

○ 帆繩並帆其他一切ノ道具都テニタ通宛相添フ、

○ 錨六頭

○ 錨索鉄製

○ 用水貯器及ヒ兵糧方入用ノ器物類一式一ト通ヲ相添ヘ

○ 大砲式十門、内二門ハ船ノ舳艫ニ備ヘ付ケ、威ナ六十

斤ノ長砲、新式ノ方十八門ハ二十四斤砲、総テ新式ト

ス、

○ 新式小銃千挺、

○ 近代改正ノ騎馬短銃五百騎分、

○ 大砲彈丸五六百個、一門分二十個乃至三十個許リヲ限

ル、威ナ新式ノ方近代發明ノ  
着発仕掛

○ 小銃彈藥一挺ニ五百發宛、

○ 航海測量器及ヒ航海道具一切、

此代価総計蕃銀拾九万枚内外在統仏人共、  
予算ナリ、日本金仙ニ直

シ凡ソ拾八万五千兩内外ニ相当ス、是ヲ六ヶ年賦割渡

シニシテ、一ヶ年分凡ソ三万兩程ニ払渡ス賦、外ニ乘

リ渡リニ付足堅メ用ノ品物代、或ハ乗組人雇給金其外

一切ノ入費、初年ハ凡ソ式万五六千円(兩)、船代金合計五万

五六千円(兩)、雜費迄大凡ソ六万円程モ御手当、右ノ方ニ

左ノ品々佛人共ヨリ予メ申立候、

○銅地金上中下平均ノ価ニシテ、著銀壹枚ト三分三里余

琉球丁錢ニ直シテ五貫  
七百六拾文内外ニ当ル

○樟腦壹斤著銀二枚余

○日本判金

○焼物上中品

○絹反布

○絹糸

○金絵ノ屏風山水人  
物ノ絵・日本美人画

○日本傘

○日本漆塗物

○日本紙上等ノ品

○日本茶

○日本蠟

○日本書籍書名  
略ス

此品々手当スヘシトノ趣、在琉佛人共ヨリ申立候ニ付、御届ニ及ヒ、大島在勤井上方ヘモ照会仕候、

○蒸気商売船一艘並小銃製造機械詠文ハ、代価払込方等莫大ノ金高ニ及ヒ、一緒ニハ手ニ及ヒ兼、仍テ先ツ軍艦又ハ小銃等ノミ詠文致シ、商船詠文ハ差控ヘ、而シテ和蘭・佛郎西ト商法開キノ上、其手ヲ以テ買入レノ

道如何様可有之哉ノ旨上申仕候安政五年午五  
月三日上申

二七〇

参考 早川五郎兵衛仙波市左衛門永實(朱書)ヘ賜書(朱書)〔安政四年〕

早川(朱書)

五郎兵衛ハ誤也、原  
書大久保利武氏所有

一筆申入候、楮ハ出雲(鎌田正純)封書請取申候、此節返事遣候間、宜敷可取計候、

一極内々申入候、来年ヨリ大島(和蘭船參候筈(安政五年ノ部参照スヘシ)、右ニ付調文品(大小砲器ノ類)モ彼方ヘ可持越、左候ヘハイツレ品物不遣候テハ不相成候間、塗物第一好ミ候トノ事ユヘ、菓子重・タンス・文庫並硯蓋・吸物ワン・膳等(安政五年汽船買入ノ部参照スヘシ)ノマキ画ノ品取下シ度候得共、目立候テハ不宜候間、琉人被下御見合ノ処ニテ下リ、蒔画位ノ処ニテ品取入候様可致候、尤モ表向ハ近々用ヘヤヨリ掛合可申候得共、先内分申遣候間、一包(金百両ノ通唱)カ二包位ノ品見計ヒ可取入候、硯箱・刀掛様ノ品ハ不宜候間、其心得ニテ取入可申候、来二月比迄ニ当地ヘ參候様致度候、先此段申入候、拾(山崎)ノ引移ノ事、是ハ成丈ケ早ク取計可申候、拾ノ跡ヘハ黒川カ堤(堤伴五郎)ノ内

引移リ可申付候、芝庭ノ用ニテ留守勝ト聞ヘ候間、西  
向ニ候ヘハ宜敷ト此段申入候、先ハ取込早々申入候也、

〔安政四年〕  
八月廿九日

斯ノ御書中漆品御詠文ハ、則チ琉球大島ニ於テ外国人ヘ御  
渡用ノ為ナラム、廣貫渡球後冬渡琉船ヨリ種々ノ器物差送  
ラレタリ、此御書ニ対シテ御準備アリシヲ知ルヘシ、

二七一 琉球ニ於テ汽船購求談判ノ要略及ヒ佛人

惠与品

安政五年戊午二月十七日、通弁官牧志親雲上ト在留佛  
人共ヘ御密用談判ノ概略左ノ通語仏人共ニハ四ヶ年余在琉、琉  
語又ハ支那語、太抵入組ノ談話モ  
ニテ解得仕候、第一、英・米・佛ヘ書生八九名差出ノ儀、  
第二、蒸氣船一二艘買入レノ儀、第三、琉球大島ニ於  
テ交易ノ儀此日ヨリ談、  
判ヲ開ク、数日間ニ及ヒ談判仕候処、毎条  
都合克ク承托致シ候ニ付、其段同年三月十九日ヲ以テ、  
山田壯右衛門・堅山八郎ヘ相就キ御届申上候、大坂・  
兵庫開港云々ノ談判ハ、貿易一件結約ノ上細談ニ及ハ  
ントスルノ際、御凶報到来、因テ這ノ一儀ハ談判ニ至  
ラスシテ止ミタリ、尤モ貿易ヲ開クノ手順ヲ終リ、而  
シテ日本所屬ノ琉球ナル趣ヲ公然申聞ケ、其上此ノ談

話ニ涉ラサレハ、是迄日本所屬ナルハ秘蔵隠カニシ、度佳  
喇島人ト通唱ストノ申取りナリシ所以ナリ、外国人ハ  
素ヨリ、度佳喇島ト唱フルハ、日本薩摩ノ琉唱ナリト  
ハ飽迄承知セリ御趣意ニ於テハ此条ヲ肝要トセラ、將タ既ニ  
和蘭船ハ、丁巳十一月初長崎御附人ヨリ、在番奉行ヘ  
ノ書翰持来リシ故、交易一件ノ談判中ニ、通商結約ハ

長崎ニ於テ粗談話ニ及ヒ候趣ニ有之、就テ佛國トモ先  
年通信ノ約定取結ヒタル訳故、大島・琉球ニ於テ開商、  
小国ナカラ互ノ便益ヲ謀リ度トノ旨申聞ケ候処、佛人  
等怡悦ノ言詞中、以前ニハ拒絶シ今卒然開市ヲ談シ掛  
ケタルニハ、頗ル怪ミヲ入レ候様子ニテ申出ル趣ニ、  
先年来毎々交易ハ互ノ便利ナルヲ長官ヨリ相談ニ及ヒ  
タルニ、琉官ニハ承引無之、船中用ノ食料薪水ヲノミ  
買ヒ求ルヲ允シタリ、然ルニ今却テ琉球ヨリ開市ノ相  
談ハ実ニ意外ノコトナリ、素ヨリ佛朗西政府望ノ事ナ  
レハ誠ニ喜フヘキ次第ナリ、琉球政府ニ於テ深キ仔細  
アツテノコトナラン、承度旨申出候ニ付、内実ハ日本  
度佳良島人ノ内意ヲ奉シタルニ依リテ、斯ク相談ニ及  
ヘリ、素ヨリ琉球官々ト厚ク評議ニ及ヒ、開市ハ固ヲ  
富スノ基ナルノ道理ヲ会得シタルニ外ナシ、琉球ハ沖

中孤立ノ小国、其上船舶ノ製ニ拙ク、毎度風濤ノ為メニ破船シ、財宝ヲ棄ルコト夥シ、加之人命ヲ失フ又少シトセス、故ニ和蘭ト貴国ト通商シ、尋テ蒸氣船一二艘ヲ近年中買<sup>入船也</sup>レント決議セリ、其代物ハ国産ノ品、亦ハ度佳喇島人ニ就テ日本物品ヲ購求シ弘ヒ込ムノ都合ニ致度、当国ハ毎々風旱ノ災ニ遭ヒ、人民飢餓ニ迫ルコトアルカ故、交易ヲ開キ、火輪船ヲ備ヘ、清国・日本国トノ往来ヲ容易クシ、天災ノ患ヲ凌ントス、別ニ何ノ仔細アルコトナシ、日本産品ノ調達ハ、此ノ伊地良親雲上カ<sup>伊地良トハ、市来カ琉名</sup>、度佳喇島人ニ抛リテ備ルノ見込ナリ、又和蘭人ハ既ニ度佳喇島人ト談合シテ、大島・琉球ノ間ニ於テ開商取組ノ都合トナリタリ、然ルカ故琉球国ハ先年貴国ト通信ノ約ヲ結ヒ、貴客等久シク在琉親交スルニ、貴国ヲ閣テハ約定ニ対シ不信ナルカ故、先ツ貴国ト開商シ、尋テ和蘭ト開キ、而シテ漸次英米ノ兩國ニモ開カンノ順序ヲ立ントス、和蘭人ヘハ度佳喇島人ノ懇望ニヨリ、大島ニ於テ開キ、尋テ琉球ニモ及スノ順次ナリ、元来大島ハ小琉球ト唱ヘ、琉球ノ属高ニテ、土人ノ言語容貌モ同様ナリ、現今度佳喇島ノ支配ヲ受クルハ、琉球ヨリ度佳喇島ニ多クノ借穀アリ

テ、返償ノ滞リタル為メ、一時ニ度佳喇島ニ支配ヲ允シタルヨリシテ、遂ニ度佳喇島人カ万事取扱フコト、ナリ、琉球ノ支配ハ稍離レタルカ如シナト弁解センニ、佛人曰ク、素ヨリ深く怪ムヘキ事ニ非ラス、怪ンテモ無益ナリ、佛朗西ニ於テハ毎々開商ヲ望ミタリ、然レトモ拒マレテコソ今ニ開ケサルナリ、又和蘭ト開商シ、佛朗西ト開商セサルトキハ大ニ慊シトセサルナリ、天主ノ道、孔孟ノ道ニモ背ケル諷ナリ、然ルニ斯ク相談ノ趣ハ天道ニ背カサルナリ、我々ハ貿易ノ事ニ関ル身ニアラサルカ故、本国ヨリ其司官渡来ノ上細談シ取組アルヘシ、仍テ我々ニハ斯ク承ル処ノ旨ヲ、渡唐船便ヨリ清国香港領事官マテ申越シ、其司官渡来アラン事ヲ告ケ越スヘシ、不日ニ本国船渡来モ難計、其時ハ尚ホ船將ヘ直談モアルヘシ、何分ニモ琉球国ノ人々、如此胸大キクナリタルハ、国民ノ幸、天主ノ恵ナルヘシト云フ、而シテ交易場ノ談ニ及ヒ、佛人曰ク、那覇港ハ暗礁多ク船ノ出入甚危シ、運天港ニ定ムヘシ、先年提督ノ見込ニモ同所ト定メ、海ノ浅深ヲモ測リ、館舎取建ノ場所迄モ見定メ、絵図ヲモ記シタリ、和蘭人モ果シテ同所ト見定ムルナラント云フ、私共ニモ素ヨリ

開市場ハ、同所ト考定罷在シカトモ、態ト不案内ノ体ニテ曰ク、運天ハ港ハ好シト雖モ山間ノ僻地、人家少ク万事不如意ノ地ナリ、兎角那覇ニ開クニ如スト云フ、佛人共晒テ曰ク、交易ヲ開クト云フハ至テ大ナル事ナリ、第一船ノ繋リ場ヲ撰ハサレハ、何程繁華ノ地ニテモ港悪シケレハ大ナル交易ハ調ハス、繁昌ノ地ハ何レノ国モ必ス好キ港ノ近所ニアリ、外国ノ人ハ無人ノ地ニテモ開市スレハ必ス繁昌ノ地トナル、運天モ人家少ク不自由ナリトモ、外国船来リテ開市スルトキハ、直ニ人家モ繁昌シ、三四年モ経スシテ繁華ノ地トナルヘシ、決シテ心配スル事勿レト云フ、右旁ノ談話ハ、戊午二月十七日ヨリ同シ七月二十六日迄、数月間談判ノ概略ヲ記載仕候、尤モケ様ノ談話ハ、御言行ニ関カラサル訳トハ奉存候得共、其大体ニ属シタル儀ニテ、御趣意稍行ハレントスル次第ヲ、為御参考記載仕候、右旁談判ノ都度々互ノ贈答品左ノ通、

佛人共ヨリ贈与品物、左ノ通、

- 一大望遠鏡一個 天文測量ニ用ル者
- 一燒物花生一個 大形金銀其他諸色染付
- 一喇叭大小三個 大一個銅製小一個銀製

一横笛一個 銀製長二尺計

一風琴一個

一大玉鏡一個

一袂時計二個 一個金皮・一個銀皮何レモ上品ナリ

一六眼短銃一挺

一電氣機一個

一洋書二冊 日本地理書

一片仮名ニテ記シタル旧約全書・新約全書二部

一キナソート二瓶

一洋酒二箱 一箱シャンパン一箱葡萄酒

一大形ノ「オーゴル」一個

外ニ洋書数十部

右品々応接ノ節贈与仕候ニ付、時々山田・豎山ヘ相付差上候、右返謝ノ為メ此方ヨリ、漆塗器・絹反布・日本書籍等数品恵与仕リ、其旨モ都度々御届申上候、

二七二 琉球国ニ於テ蒸氣船其他買入ノ談判、在

番奉行高橋縫殿届書

佛蘭西国ヨリ蒸氣船一二艘極密ノ取計ニテ御買入被遊度



御内慮被為 在、琉人相對ノ取組ニ致シ、外々へ屹ト不相聞様手厚ク遂吟味、逗留ノ佛人共へ熟談イタシ、然シテ彼方ヨリ琉球迄乘來ラセ、夫ヲ琉人へ振り付ケ、押々ニ為買入候様ノ向ニ取計、代金ノ儀ハ五六ヶ年賦ニ割リ渡候都合ニ極密ニ相談致シ、是非共近年中其相談相調候様可取計トノ趣、分テ被仰付越委細奉承知候、就テハ早速ヨリ市來正右衛門へ其談申付、手厚ク評議仕、佛人共へ相談為致候、尤不容易重大ノ事柄ニ御座候間、正右衛門一手ニ取扱、外話役等へハ一切不相洩候儀ニ御座候、勿論琉人相對シ取組ニ付テハ、何レ撰政・三司官其外異国掛琉役三四人へハ極内々申付、尤此以前ノ如ク故障不申立様取計不仕候テハ、弁判致兼候儀ニ御座候間、被仰付越候御書面ニ基キ、手扣ノ達書取仕建、去ル三日撰政・三司官其外異国掛役々恩河親方・牧志親雲上招呼ヒ、

御内慮ノ趣申達、手扣書相渡、即座ニ御受為申出候、御請書モ同日三司官自筆ヲ以為差出候、不容易重大ノ御用筋ノ事故、尋常ノ達シ振リニテハ、又々去ル卯年ノ通り御断等申出候様ニテハ、

御内慮不相貫ハ勿論、於私共適々承知仕候詮モ無之、

尤琉人ニハ乞來不牧事柄故、此節ハ手堅ク取計、右通即座ニ御請書迄為申出候次第ニ御座候、当国ノ風俗ハ先規古格ヲノミ相守リ、世ノ變遷ヲ不弁、因循ノ弊風勝ニ御座候間、右通押へ付候取計仕候儀ニ御座候、右役ノ内ニ恩河親方・牧志親雲上ノ兩人ハ、外国ノ事情モ (マ) 弁へ、無異儀

御趣意循奉ノ段申出候、左候テ其後市來・弁牧志ノ兩人、佛人共へ及熟談候処、素ヨリ以前ヨリ彼ヨリ申勸候義ニモ有之、当秋迄ニハ佛ノ本国船渡來可致候間、其船便ヨリ佛国政府へ申越候カ、又ハ渡唐船便ヨリ上海廣東ノ佛国領事官へ申越候様可致、來年秋又ハ來々春比迄ニ、調達ノ取計可致旨共承諾致候段、市來并牧志ヨリ申出候、委細ノ儀ハ市來ヨリ御届可申上候、尤琉人共へ相達候手扣書写一通、相添差上申候、以上、

午七月五日

在番奉行

高橋縫殿

名越彦太夫殿

豎山武兵衛殿

二七三 蒸氣船買入事件、市來廣貫届書

三十間余ノ蒸氣軍艦一二艘、

右ハ当国在留之佛蘭西人共へ極密ニ致頼談、御買入被成度年来之

御内慮被為在、今般取扱向之儀、在番奉行高橋縫殿並私へ被仰付越趣奉承知候、就テ刻(明)ヨリ高橋申談シ、御故障不相成候様、琉人相對ノ取組ニテ、彼等乘来リ押々ニ為買入候場合ノ取計、佛人共へ及熟談、近年中ニハ是非御手ニ入り候様乍恐微力ヲ尺度奉存候、尤御内達之通外聞ニ不及様取扱可仕候、因テ今般被相渡候御書面ニ基キ頼談可仕候、猶委細ノ義ハ追々御届可申上候、此段御請如此御座候、以上、

午七月三日

市來正右衛門

名越彦太夫殿

山田壯右衛門殿

豎山八郎殿

二七四 撰政三司官等へ御内用向達ノ手扣

佛蘭西国ヨリ蒸氣船一二艘、極密ノ取計ニテ御買入相成度年来ノ御内慮ニ候、就テハ琉人相對ノ取組ニテ、

彼等乘リ来、夫ヲ琉人へ押々為買入候向々、佛人共へ致熟談、代金ノ儀ハ、五六ヶ年程ニ割渡候向ニ及相談、幾重ニモ手厚ク吟味ヲ尽シ可取計トノ趣被仰付越候、委細ノ儀ハ市來正右衛門へ被仰付越候ニ付、自然同人ヨリ可申達候、尤撰政・三司官并恩河親方・牧志親雲上へ、厚キ御内慮ノ旨篤ト申達、此以前通奉組候様ノ儀共決シテ無之様手堅ク申付、是非共近年中ニ御手ニ入り候様可取計旨被仰付候条、無申迄事ナカラ、時態ノ變遷又ハ弘ク海外ノ事情モ弁別被致、固陋因循ノ義共不被申(マ)様有之度、此段各方御承知、国王へモ被申上、御請書可差出候事、

午七月三日

在番奉行

高橋縫殿

御内用掛

御広鋪番頭御庭奉行兼務

御徒目付勤

市來正右衛門

右ノ書面并口達ヲ以、撰政大里王子、三司官池城親方・譜久山親方・小録親方、物奉行異国掛恩河親方・異国掛牧志親雲上在番奉行所へ呼出シ、市來列座高橋ヨリ相達シ、即日御請書可差出旨相達候処、承知ノ上大里並池城即刻朱里へ罷歸リ、国王へ申出、無異儀承知致、同日晩方御請書被差出候事、  
琉球官吏御受書左之如シ、

琉役御請書

佛蘭西国ヨリ蒸氣船一二艘、極密之取計ニテ御買入被遊度年来之

御内慮被為在、就テハ琉球相對之取組ニテ、彼方ヨリ乘リ来リ、夫ヲ琉球へ振り付ケ、押々ニ為買入候様之遂熟談、代金ノ儀ハ五六ヶ年程ニ割リ渡候向ニ可取計、尤幾重ニモ手厚ク吟味ヲ尽シ、極密ニ可取扱トノ趣、猶委細之儀ハ市來正右衛門殿へ被仰付越、我々并恩河親方・牧志親雲上へ、御趣意ノ程篤ト為相舍、此以前ノ通奉組候様ノ儀共屹ト無之様手堅ク申付、是非近年中相運候様可取計トノ趣、御別紙御取添細々御達ノ趣、我々并恩河親方・牧

志親雲上委細承知仕、則國王へモ申聞候処、御趣意通相舍弥無異儀御請仕、宜敷取扱可仕旨申付候間、此段我々共ヨリ御請書差上申候、以上、

午七月三日

小録親方

譜久山親方

池城親方

大里王子

在番御奉行

高橋縫殿殿

御内用掛御徒目付勤

市來正右衛門殿

右通小録親方自筆ヲ以申出候、落手致シ御届書ニ取添差出候事、

二七五 琉球官吏蒸氣船詔文約条書

琉球国総理大臣尚景保・布政大夫馬克承等為利涉安生事查、弊国僻居海隅彈丸之小邦物産無幾、殊有三十六島皆以隔洋故專海航搬運諸物或有往来于度佳喇島、則造舟堅固而須要利涉也、怎奈本地山林狭少林木甚少、

且至製釘鉄類原は無産、漸購買于渡佳喇島以備弁用、是故随意不能造舟、適至所造舟甚屬粗鹵、因此值有大風、則破船矣、思量僅於六七年間破損及八九艘之多、每值其時損失財宝不勝數、而況人命乎、夫人命者以為國之至宝、以該至宝死之非命誠堪悲嘆、因此國益至困苦、是及因國典未備故也、蓋堅舟利涉則屬仁恤之根本查至貴國与敝國者、近来既定和約、明立章程、友睦相交、乃是患難相救之友國也、伏希

貴客等察敝國苦情、深垂憐于友國軫祥

貴國

大憲大人把該一火輪船官艦一艘、逐早俾寄通敝國得用至

該師直須公平支交如此、則利涉安生國典稍備也、拳國

永垂鴻恩于不朽須至累者矣、並請

逕安伏祈

丙鑾不一

咸豐八年七月二十六日

琉球国中山府 總理大臣尚量保  
布政大夫馬克承等 同拜

此書ニ附スルニ左ノ添文ヲ以テス、

約条書添文

蒸氣軍艦一艘 長日本尺ニテ凡三十三間ヨリ三十五六間迄、

一木製ニシテ水軍実用ニ適候方、

一三本柱又ハ二本柱ニテモ作法通り、

一船之進行、西洋ノ時計ニテ一時ニ日本里数四五里ヲ

走候モノ、

一航海運用ノ諸道具一切相備リ候モノ、

一航海中飲食用之器物等一切備付、

一大砲二十丁程乗セ付、

但二十四封度・十八封度位之モノ、

一航海方ノ教師三四人、

一蒸氣器関取扱候人三四人、

一鍛冶職二三人、

一大砲方之教師三四人、

一天文測量方一兩人、

一製船方心得候人三四人、

一繪図取り方心得候人一兩人、

外ニ

一近代発明ノ軍用小銃二千丁、

一近代発明ノ短鉄砲二百丁、

- 一 世界航海図三四通り、
  - 一 蒸氣製造書新シキモノ、
  - 一 船製書新シキモノ、
- 右外先日來問答書通り、

条約書添翰

先達テ極密ヲ以被 仰付越候蒸氣軍艦一二艘、在留佛蘭西人共ヘ注文イタシ候様トノ趣ニ付、琉官共ヘ相達候成行ハ御届申上候通ニテ、其後市來正右衛門並牧志親雲上ヘ取扱為致、琉人共ニモ此度ハ何モ故障申立候義更ニ無之、御都合向宜敷段々申立候趣モ有之、誠ニ幸ノ至御座候、

一 佛人共ヘ頼談ニ付テハ重大之事柄ニ御座候間、市來並牧志ノ兩人渠等信用第一ノ事候ニ付、牧志事ハ多年外國用向取扱候訳ヲ以テ、今回度支官ヘ昇進為至候旨ヲ以可申取、市來事モ異國掛度支官兼勤ニ昇進致候旨佛人ヘ申聞置候、

一 此頼談ニ付テハ、於琉球稀ナル重大ノ事件ニ御座候間、親陸之交ヲ為シ、代金年賦払等ノ懇談致候義ニ付、其心得ヲ以互ニ往来音信贈答等之義、無疑念可取計旨申

付置候、尤市來ヘ予テ御預リ被仰付置候反布・塗物器等モ、臨機見計ヲ以恵トイタシ候様可為仕候、右ノミニテ不足ニ可及ハ必定御座候間、今般市來ヨリ取調御渡品可相伺候間、近々御下渡シ相成度、委細ハ市來ヨリ申上候様可致候間、宜敷御取計相願候、

一 去廿二日市來・牧志佛館ヘ差越、蒸氣船買入度トノ趣大頭申込候処、佛人共至テ怡悅致、ケ様開ケ行事ハ実ニ喜ハシク存ルトノ趣ニテ、当日ハ先ツ概略ノ旨咄イタシ、然シテ康熙字典一部恵トイタシ、四方山ノ雑話ニ及ヒ候処、酒ノ振舞等ニテ懇々タル次第ニ候ヨシ、因テ他日又一向ニ買入度トノ相談ニ及フヘクトテ、引キ取り候由、

一 去ル廿五日兩人佛館ヘ差越、蒸氣軍艦二艘ヲ此涯買入度旨、手扣書ヲ以、順席ヲ立及頼談候由、其段數刻ニ及候、手扣書ハ市來ヨリ御届申上ルニテ可有之候、然カシテ調文ノ趣承諾イタシ、何事モ都合宜敷、其段ハ市來ヨリ御届通ニ御座候、勿論支那其外米英之兩國等ヘ、斯ク頼談之成行屹ト不相洩様取計ノ儀、分テ手厚ク及談話候由、就中支那國ハ從來冊封ヲ請ケ候國柄ニ候ヘハ、如斯重大之事件ハ及届候上ナラテハ、中山王

一己ノ取計ハ不都合ニ相成候事故、此度ハ陰密ニイタシ度事共モ及談合置候由、

一蒸氣船ハ成丈ケ早ク乗届ケ、其上航毎術伝書ノ手数モ容易ノ事ニアルマシク、来秋比ニハ乗来リ候都合ニ及相談候処、佛人共ノ申候ハ、来秋比迄ニハ無覺束、来々春支那ノ三月比マテニ乗届候都合ナルヘシトモ為申由、委細ハ市來ヨリ申上ルニ可有御座候、

一蒸氣船ハ先ツ差向キ一艘ヲ買入、航毎術等取馴レ候上年々相増シ候様、分テ懇々申聞候由ニ付、彼等申分ニマカセ、先ツ来々年ノ処ハ、三十間余ノ蒸氣軍艦乗来候約束ニ及置候、然シ是非二艘一緒ニ乘リ来不申候テハ不叶

御趣意ニ被為在候ハ何分被仰遣度、猶又為及相談候様可仕候、

一蒸氣船一艘分ノ代金ハ、乗セ付ケノ大小砲彈藥等之代ヲ外ニシテ、凡蕃銀ニテ二十二三万枚位ニ候ハント申出候、然シハ確ト差究タル処ハ追テ本国ヨリ可申来旨申<sup>(マ)</sup>ヨシ、蕃銀一枚ハ琉球ノ十錢ニシテ、凡一貫二百四十文程ニ及ヒ申候、是ヲ金ニシテ凡二十二万兩程ニ相及候賦ニ御座候、

一乗セ付ケ大小砲ハ、二十四封度・十八封度ノ二式、凡二十丁程モ備付候様申聞サセ候処、佛人共申ニハ、是ハ彼国海軍方ノ作法可有之候間、其通ニマカセ候方可宜旨申出候由、

一航海運用方伝習ニ付、教師モ一課式三人程ツ、可列渡旨モ申聞候処承知致候由、

一船之足堅ノ為ニハ、成丈ケ土俵石砂ノ類積入、其外見計ヲ以小銃或ハ要用ノ器械ヲ持越、無用ノ弄物ハ不持渡様可致、小銃ハ歩兵用ノモノ二千丁程ハ、近代新式ノモノ可持渡旨申聞候由、

一蒸氣船代物候ハ品モノヲ以可相渡、如何ナル品可然哉ノ趣相尋候処、専ラ金銀ノ地カネ・銅、或ハ樟腦・塗物日本紙・絹糸諸反布類可宜、然シ是以日本国ヨリ望出候ニ付、差究テハ難申トノ趣申出候由、

右応接之太略ニ御座候、詳細ニ市來ヨリ御届申上候賦御座候、尤当九・十月比ニハ彼本国船渡来可致候間、猶其節ハ在留佛人共ト乗頭等へ、及細談候様可仕候、且調文約定書一通、琉球官々ノ名目ヲ以相渡置候写一通相添此段御届申上候、以上、

午八月九日

在番奉行

高橋縫殿

自順通丸

名越彦太夫殿

二七六 市來届書

先達テ極御内用ヲ以被仰付越候在留佛人共へ及懇談蒸氣軍艦一二艘御調文ノ儀、委細拜承仕、万端高橋縫殿申談、琉役共へ申達候趣へ、大聖丸ヨリ御届申上候、疾ニ御承達相成候事ト奉存候、其後猶又琉役々等へ厚ク吟味ヲ尽シ、御故障不相成様応接致シ、別紙談判問答書通ニ候座候、尤來春ハ是非当国迄乘リ來リ候様、勿論清国其他歐州各国へハ、秘密ノ取計ニテ可致趣共、堅ク頼談ニ及置候、後ニハ秘密ニモ相成マシク候得共、三四年ノ間モ秘事致置候ハ、日本御政体モ必ス相變リ不差支場合ニモ可相成ト、其段ヲ以近年ハ外聞ニ不及様、タトヒ他聞ニ響候共、琉球一手ノ取計故御故障罷成ル訳ニモ有之間敷、昨年渡海前御直ニ拜承仕候御趣意ニ基キ及談判候間、左様御承知可被成下候、誠ニ去ル卯年彼ノ本国船乗頭ヨリ琉官々々、蒸氣船可取入旨、

或ハ武備ヲ蔽ニ致シ獨立國ノ政体ニ可致、然ル時ハ彼國ヨリ保護イタシ、中山王ノ名ヲ世界ニ可顯拜申聞ケタル次第モ有之、因テ今般調文ノ蒸氣軍艦ハ、其刻申出タル一二件ヲ採用スルノ訳ニ相当リ、加之昨年渡海前御下ケ渡ノ御書付ニ從、兵戰モ琉球ノ儀ハ御一手ニ御委任、御存分ニ御取計可被為在トノ趣モ有之候ニ付、今般ノ儀ハ中山王手限りノ取計為致候様取扱可仕候、乍併可成丈ケハ多聞ニ不及様取計可仕候、就テ別紙写ノ通調文ノ条約書、及ヒ蒸氣船ノ尺度・乗セ付ノ品類、又ハ代金割リ渡等ノ手續、又ハ伝習方教師列渡リ方等ノ手順等、談判書通ニ御座候、一蒸氣船代物ノ儀ハ巨万ノ金高ニテ、實ニ不容易御事ニ候、当地琉藏方へ在合之蓄銀三万余枚程有之由、右ハ先年來米・佛・英人等ヨリ、館舎造建之代金亦ハ日用品物買入之代ニ請置候由ニテ、無用ニ藏方へ格護致置、藏方ニハ迷惑ニモ相成居候ニテ、当秋唐渡船ヨリ福州へ差遣シ、仕払用ニ可致トノ評議ノ段承得候ニ付、在番奉行申談先ツ差扣サセ、蒸氣船代金御差足ニモ可罷成哉ト存候間、其通ニテ御都合宜敷候ハ、琉藏方へハ夫丈ケノ御品又ハ現錢被下戻、右蓄銀ハ格護被仰付可

然哉ト奉存候、何分御内意被仰渡度奉存候、

一 蒸氣船代金払渡方ノ儀、六ヶ年賦ノ処ニ相談致候成行ハ、別紙談判書通ニテ、此一件ハ在留佛人共ニモ差究メ難受合、併シナカラ引請ケ是非ニ世話可致、殊ニ琉球政府ノ約定ニ候間、商人相對ノ事トハ相替リ、殊ニ不開ノ國ヲ開キ候訳故、随分不調相談ニハ有之マシクト申出候、就テハ一ヶ年分ノ御払高凡四万兩内外ニテ、右外ニ大小砲類ノ代金モ、何程トハ確ト不相分候得共、是以三四万兩ニハ可相及候、旁一ヶ年分ノ御払高五万兩計リノ御予備ニ相成リ可然ヤト奉存候、猶近々佛人共ヘ及談話、取約シテ御届可申上候、

一 佛人共ニハ日本判金ヲ望罷在候、依テ御払分之内判金御渡シ相成候ハ、船間積荷ノ面動モ相減シ、御弁利ニ可相成ヤ、慶長判一枚ハ、米國ノ銀錢六枚程ト相当ニテ相請取候、是ニハ御利益モ不少候ニ付、此段モ為御參考申上候、

一 追々々談判又ハ本国船渡来ニ付テハ、自然入用ニモ可及候間、其都度々産物方御在合ノ内ヨリ、在番奉行ヨリ達次第相払候様、在番奉行ヨリ極内々産物方掛御役々ヘ被達置候間、猶又後便ヨリ可然御用弁別宜敷様御

達越可被下候、

一 別紙談判問答書一通、及ヒ蒸氣船代物取調書一通相添差上申候、

右調文談判済ノ御届旁如此御座候、猶不行届廉ハ、至急以飛舟被仰越被下候ハ、本国船渡来内ニ候ヘハ、相談替ノ儀モ可相調ヤト奉存候、何分

御前様御都合向宜敷御取計奉願候、以上、

午八月九日

市來正右衛門

順通丸ヨリ

名越彦太夫殿

山田壯右衛門殿

堅山八郎殿

二七七 蒸氣船御詔文御停止ノ趣島津下總・新納

駿河ヨリ琉球在番奉行ヘノ達書

佛朗西國ヨリ蒸氣船極御内々ニテ御買入被遊度、就テハ琉人相對ノ取組ニ致シ、彼方ヨリ乘来ラセ、夫ヲ琉球ヘ振り付ケ是非ニ買入候様取計、代金ノ儀ハ五六ヶ年計リニ割并シ相渡候向ニ佛人ヘ熟計致、幾重ニモ手



厚吟味ヲ尽シ、極陰密ニ取計候様被仰付、猶委細ノ儀ハ市來正右衛門へ被仰付置候ニ付、摂政・三司官へ篤ト申含、是非致調達候様可取計旨被 仰付、其段ハ當春名越彦太夫ヨリ為申越由ニテ、 御内慮ノ趣摂政・三司官等へ篤ト申含候処、御請申出候ニ付、猶又評議ヲ約シテ、市來正右衛門並牧志親雲上差遣、逗留佛人へ面会、右蒸氣船詠文ノ儀得ト申込、左候テ逗留佛人共入用之名目ヲ以本國へ申越、來秋迄之間ニハ乘リ渡リ呉候様細々及相談候処、船仕舞等ノ手数モ有之候ニ付、若延引致候ハ、來々申二三月迄ニハ屹ト乗渡候取計、当秋佛國船渡來不致候ハ、渡唐船便ヨリ書状ヲ以、香港・廣東迄申越相談濟ノ趣共、御手許へノ御届書御側役ヨリ申出候、然ル処先達テ飛船ヲ以申遣候通、太守様御不例ノ処御養生不被叶、七月廿日被遊御逝去、何共絶言語奉恐入次第ニ候、就テハ御在世中ニ候へハ、深キ 思食之詛被為在候得共、只今ニ相成リ誠ニ以不容易重大之詛柄ニテ、公辺へモ彼是運兼候儀モ有之候ニ付、此節ニ至リテハ、断り切り不相成候テハ不相 (成カ) 今更違變ノ義、於其元難渋ノ詛トハ致深察候得共、摂政・三司官篤ト吟味、別

紙ノ趣又ハ外ニ無余義断筋ノ趣向モ有之候ハ、彼是宜敷評議ヲ話シ、(マ)々無難ニ聞濟候様、無手抜可被取計候、右ニ付テハ近々摩文仁親方婦國ニ付、委細口達申含別紙手扣書相渡候間、着船ノ上ハ同人ヨリモ承届ケ都合能可被取計候、尚御側役ヨリ委細申越ヘク飛船取仕建、此段極内用ヲ以申越候、以上、

但断筋申入ルニ付テハ、品物等ニテモ不遣候テハ相濟間敷候ニ付、別紙通之品々、御側役ヨリ為差越候条可被其意候、(得ルカ)

午八月

新納駿河  
(左カ)  
島津右衛門

高橋縫殿敷

二七八 町田主馬市來へ達書

御方事其許極密御内用向之儀品々被仰付置、殊ニ蒸氣船御買入之儀ニ付テハ追々承知ニ相成候通、

太守様被遊 御逝去、御大變之御仕合ニテ、御当節中ニ御手之及候丈ケハ無之、御家老衆初別テ御心配ノ事ニ候、就テ其許ノ事情ハ勿論、御内用筋之儀不相分事

ノミニ候間、御方義此節差遣候飛舟ヨリ一往早々被罷  
帰、委細ノ儀共可被申出候、左候ハ御用向 御直達ノ  
趣モ可相分候間、先般表通申渡ニモ相成リ被為致承知  
管候へ共、猶又此段申越候様致承知、此段申越候、以  
上、

午八月廿六日

町田主馬久

市來正右衛門殿

右町田ハ當時當番頭御側役兼勤ナリ、齊彬公御代御側役ニ  
転シ、忠義公ニ至リ同職ニアリ、後御家老ニ榮進ス、

這ノ大事件御停止、當時ノ事實ヲ明治十九年二月親ク久  
光公ニ質問セシニ、御對話ニ、其事ハ齊彬公御逝去一ト  
七日許後ト覚ユ、町田主馬子方郎ニ来リ申スニ、洵ニ御  
一大事コソ到来仕候トテ、則チ高橋ト其方カ名ヲ以テ、  
箇様ノ事昨日山田壯右衛門・豎山八郎兩人ヨリ申出、同  
人等モ如何セムト当惑致シ候、同役中（御側役中）ニモ同  
様ニテ、御家老中へ御取扱ノ儀伺出候処大ニ驚キ、如何  
致シテ可宜敷哉、更ニ見込モ相付不申、御在世ナレハ定

テ深キ思食ノ御事トハ奉存候得共、我々ニ於テハ何トモ  
取計ノ見込相付キ不申、殊ニ異国ニ対シテノ事柄ニ候得  
ハ一同不案内、且ツ公辺ニ対セラレ御内外ノ御多端ニ候  
得ハ、此上ハ御尊慮奉伺ノ外無之ト御家老中申談、奉伺  
ルトノコトナリシ故、我等ニ於テモ初メテ承リタル事ニ  
テ、書面之趣（御届書ヲ云フ）一大事件ナレハ、即時ニ見  
込モ付兼タル故、何分一大事ナレハ、遠カラス宰相様  
御下着ノコト故奉伺候外ハ有之間敷、篤ト其内御家老中  
評議モ被致、御下リヲ待タレ候方可然ト返詞致シ、我等  
モ外国ノコトハ不案内ナレハ大ニ心配致シタリ、然ルニ  
其翌々日カト覚ユ、登城致候処、御家老新納駿河、御側  
役豎山武兵衛・名越彦太夫・町田主馬・山田壯右衛門、  
其外御家老座書役一兩人別間ニ出テ、如何可致哉ト一  
同当惑シタル様子ニテ、拙者ノ考ヲ聞キタヒト云ナガラ、  
拙者ニモ不案内ノコト故未タ考モ付カスト云タ処ニ、新  
納カ云フニハ、御尤ノ御事ニテ我々モ御同然、何ノ見込  
モ付兼ネ候得ハ、宰相様<sup>全</sup>御下リノ上奉伺外ハ無御座候  
得共、何分異国人相對ノコトニテ、殊ニ琉球ニハ英・佛  
人モ滞在、御難題ノ御コトニモ有之候ニ付、此上ニ御難  
題打重リ候へハ何レモ御国難ハ差見得、其上京都ノ御難

題 (齊彬公へ賜リタル御警衛等ノ密宸翰ニ対シタルコト柄ナラ

山田壯右衛門

ム)モ有之、公義へノ御聞へモ不輕御事候ニ付、宰相様

堅山八郎

御下国モ未タ間日モ被為在候ニ付、其内異国人共ノ方手

琉球在勤

廻リ早ク相成リ候モ難計候ニ付、此儀丈ハ片時モ早ク御

市來正右衛門殿

取止メニ相成候方万事ニ付可宜、ト吟味仕候トノ趣ナリ

二八〇 山田・堅山私翰

シ、故ニ拙者ニモ不案内故、当時御逝去間涯ノコトニテ、

差急キ前文略ス、然ハ別紙ヲ以御問合申上越候通

何ノ分別モ無之折柄ニテ、御家老・御側役ナトノ吟味最

太守様御事御大變ノ御仕合ニ付、実ニ当地ハ暗倉ト相

ニ考、如何ニモ其通リノ事故、早ク取止メ候方可然ト返

成リ、一統悲嘆言語難尽御察可被下候、其許御用向ノ

答致シタリ、夫レヨリシテ飛船差立ノコト、ナリシトノ

儀モ中々御当節御手ニ可被届丈ニ無之、一々重大之御

二七九 山田壯右衛門市來へ書簡

其許逗留佛朗西人へ蒸氣船御買入之儀、其外御用向追

依テ蒸氣船御取入之儀モ御取止ニ御決定相成リ、其段

々御届書相達、時々達 御聽書付類モ奉差上候処

ハ御家老衆並御側役ヨリモ御承知ニ可相成、我々ヨリ

御満悦被為遊候、然処御承知通之御時節ニ相成リ、御

互ニ残念之至御座候へトモ、時節無致方候間、近比御

手許へ之御届書等、都テ御側役ヨリ御家老衆へ差出候

心配ナカラ御国家之御為、御後難不相成様、御断切リ

処、何レ御方一往被致帰国、御直達ノ趣共不被申出

被成候義奉折、尤追々御届越シ御書面へ、時々御

候テハ、事情分リ兼候儀有之候間、此旨申越候様致承

手許へ差上候処、別テ御満足被思召上、斯迄立派ニ可

知、早々御問合申越候、以上、

相運トハオモヒノ外ナリトノ 御沙汰被為 在候事モ

午八月廿五日

有之、蒸氣船約定書之届ヲ余程ニ御待兼ニテ、毎度琉

球ヨリノ左右ハ無キカト

御沙汰モ被為 在、又ハ交易一件ニ付テハ、此事成就之上ハ内外ノ心配モ見込通りニ可行立杯ト、御大變ノ前迄モ毎々承知仕候、夫程迄厚キ 思召ノ儀モ今日ニ相成リ、何トモ残念ノ至奉存候、多年御骨折ノ御華園、又ハ集成館等モ夫形リニテ、今程御初メノ御模様ニモ無之、誠ニ残多事ノミ何トモ言語ニ難述、何分ニモ此上ハ御互ニ

尊靈ニ奉対、時勢相当ノ御取計與々モ奉折上候、細事ハ御上国ノ上ト委事マテ如斯御座候、高橋家ヲ初貴所様ノ御心配中奉察候、五六年中ニハ蒸氣船五六艘ハ御備付ノ 御趣意ニ被為在、此度ヲ御手初ニテ、追々品々御手弘ノ御用向モ、折々御内話奉伺候義モ有之、貴所様ノ御手涯御褒メニ相成候、其旨ハ私共江夏氏等被相伺居候、和蘭人御召寄ノ義モ、大坂・兵庫・下ノ關辺ニ相掛候御事ハ、殊更ニ御憂慮被遊候訳ニテ、御承知ノ次第モ実ニ不容易御事ト奉察候、此事丈ケニテモ御趣意行キ立度山々奉存、何分一日モ早ク御帰国ノ上、夫々被仰立ノ処仰願仕候、何モ御直話ノ斯如<sup>マ</sup>ノ秋ニ御座候、頓首、

八月廿五日

山田壯右衛門

市來正右衛門殿

豎山八郎

二八一 江夏十郎市來へ私書

然ハ何ハ扱置ヒテ

太守様御大變ノ成行ハ、清水(源兵衛)・磯永(喜之介)ノ両所ヨリ委細被申上越筈、拙者ヨリハ略ス、就テ三ヶ国ハ真暗黒ナルノミナラス、日本国中ノ大不幸、何トモ言語ニ難尽、其許御用向ノ儀、追々山田・豎山辺又ハ下拙ヨリモ時々書類差上候処別テ 御満悦、貴公ノ御都合向殊更ニテ、此内佛人ト談判ノ覚書モ差上候処、長編故下拙へ読メトノ 御事ニテ読申候処、是ハ出来タリ、安心セリト繰返ノ

御沙汰被為 在、琉人ノ意ヲ以談判能クイタシタリト、誠ニ貴公ニオヒテ御冥加ト、磯永・清水氏等へ及内話置候、又和蘭人御召寄相成リ、其節御密策ノ云々モ井上ヨリ及談判候、全ク其許ニテノ都合ト御内策ニ候、磯永事モ書生ノ名目ニテ、來春其元へ被遣候場ニ、中原(猶介)ニモ同様可被仰付、既ニ内々及掛合候(江戸

留学中)、当秋中ニハ帰国可致ト申事ニ候処、悉ク水泡ト相成リ、実ニ天命如何ントモスル事能ハス、御華園又ハ集成館等モ、御大變当日ヨリ占メ切りタル但今ニ何分ノ御沙汰モ無之、察スルニ永ク閉鎖ニ可相成、誠ニ遺憾之至、宇宿(彦右衛門)・磯永・清水・郡山(市介)杯血涙声ヲ吞居候、下拙ニハ嫌疑ヲ請候次第有之候、謹慎憂嘆ニ沈ミ罷在申候、此事実ハ磯永等ヨリ申上ルニ可有之候、下拙ニモ夫程ニ嫌疑ヲ請候様ノ不心術モノニハ無之、必ス他日明白ナル事ニ可有之候、古ヨリケ様之例ハ尠カラサルモノニ候、何分ニモ此世態御相統様へ忠節ヲ尽シ、御先代様ノ

尊靈ヲ奉安度ノミ、其許ノ御用向モ至重至大ノ御事ニテ、御誠心ヲ被為込候御事ナルハ無論、天下国家ノ御大計ナリシニ、凡庸吏輩ノ為ニ待<sup>マ</sup>ヘキ事ニ非ラサルヘシ、可憂可嘆ノ至、世ノ勢モ日ニ月ニ切迫ニオヨヒ候ユエ、兎角近年中ニ無事ニハアルマシク、御先代様ニハ世勢ノ御憂慮一方ナラサリシハ、飽迄モ御承知被成候通、夫故御手当向御心急キニ被為在、夫故貴公へノ御用向ハ、実ニ天下之安危ニ関スル一大事件ニテ候、下拙ニモ長崎ニテ御処置振拜承、尽力中(勝安房守へ関

係ノ事実)ニ御大變残念之至、又御不例之前之日迄天保山ニオヒテ、暑熱ヲモ不被為厭調練御出張被遊候、夫ヨリ御煩ト申事ニ候、誠ニ為国家御斃レトモ可奉申、其許御用向ハ別テ御案ミ被思召上、夜分御咄ノ折ニモ、市來カ左右ハ無ヒカト毎々被仰候、噫呼如何セン、御達通一往早々御帰国被成、充分ニ御建言有之度、他日時至ルヲ待ニ外無之、恐々頓首、

午八月十五日

江夏十郎

市來正右衛門様

二八二 高橋縫殿届書

蒸氣船御買入其外極密御用向ノ義、追々御届申上越候通、専市來正右衛門取扱被仰付、琉役々へモ評議ニ及、就中牧志親雲上へ通弁為致、御内慮通佛人共へ談合致シ、当国迄乗届ケ方或ハ船代金年賦払渡等、夫ノミナラス年々渡来信交ノ取組、又ハ書生被差出方等ノ儀共モ大略相運ヒ、既ニ当春以来時々御届申上置候、然ル処

太守様御逝去被遊候ニ付、御当節柄御手ノ可被届義ニ無之、殊ニ被對公辺重キ御故障ノ訳モ被為在候ニ

付、右取組ノ儀其外一切違変可仕旨、被仰渡趣致承知候、尤八月廿五日付ノ御問合、去ル二日島次飛舟ニテ相違、何トモ当惑ノ至言語ヲ絶候仕合、其上御内用向違変可致トノ趣実ニ痛心至極、就テハ御当節柄御手ニ可被届義ニ無之ハ顯然、何レ断リ切リ不相成候テハ、不相叶義トハ万々恐察致候ヘトモ、当春以来此御用向ニ無他事相働候義ニテ、大略

御趣意通相運ヒ、中ニモ市來事ハ引請必至ニ相勤、都合能相運ヒ、佛人共ニハ堅固ノ約定相結ヒ候ニ付、今更違変ニ付テハ、差立タル廉無之候テハ承服ハ決シテ致スマシク、元來狡黠ナル夷人共故、尋常ノ事柄ニテハ承引ハ無覺束、却テ後患ヲ引起スモ難計ト、琉役々共召集種々評議ニ及候テ、漸ク其辞端ヲ設ケ、市來事馬術稽古ノ折去ル三日落馬イタシ、重傷ヲ請ケ無間モ死去致シ、就テハ第一船代金手当之義引請居、俄ニ死去致候ニ付テハ、如何ナル手順ヲ以慶徳喇島人<sup>(德慶喇島)</sup>へ談合ニ及候哉モ不相分、極内ノ事故慶徳喇島<sup>(德慶喇島)</sup>へ粗忽ニ尋問モ難致、是ヨリシテ難題引起候半モ難計、第一ナル船代金ノ手当如斯之次第ニテハ、蒸氣船買入方ノ儀猶予致度、其外書生ヲ西洋へ出シ候義モ、手当金之調達此

涯難叶、或ハ交易向之義、其他追々及談判置候事件一往猶予イタシ、市來ニ可代人物ヲ得候迄ハ見合度旨トモ、憂嘆之姿ヲ顯シ、牧志・恩河ノ兩人ヨリ及懇談候処、佛人共三人ナカラ市來カ死去之段驚嘆ニ及ヒ、其始末又ハ負傷ノ次第ヲ詳ニ尋問イタシ、時刻ヲ遷サ、ルニオヒテハ死ニハ至ラザルベシト、大ニ悲嘆ノ様子ニ御座候由、何分琉球國ノ不幸幾万国民ノ不幸、天未タ琉球國民ニ幸福ヲ与ヘサルベシ、我々ハ日本語ノ良師ヲ得タリトテ存、当春以来學問モ一涯相進タルハ、全ク先生カ教授ノ厚キニ依リテナリ、今年モ此人ノ教示ヲ受ル時ハ、本国ニオヒテノ大名譽トオモヒシニ、誠ニ不幸ナリト申、蒸氣船其外件々ハ佛人共即座ノ返詞不致、別座ニ三人ナカラ入り、稍暫時ク及談合候向ニテ後出来リテ申ニハ、船代金調達方ニ付テハ尤ノ事柄ナレトモ、琉球國ノ為ニハ一日モ早ク蒸氣船ヲ備へ、武備ヲ為シ、独立ノ國ト相成リ、弘ク世界ノ交リニモ一国ノ力ヲ以テスルノ基ナル蒸氣船ノ事ナレハ、代金調達道ハ我々ニオヒテ世話可致ト、種々<sup>マ</sup>感情ノ旨申出候へ共、兩官吏ハ初ヨリノ口上ヲ守リ相断候処、漸ク承服イタシ、約定書取返方ニ付テ又苦情申立候へ共、

品々及嘆談違変金差出方ノ義申濟候ヨシ、然シ此書面

ヲ一往本国へ差遣シ、琉人ニハ如此開ケ立候ト云証拠

ニセントモ申立候ヨシ、是ヲ以申凌相渡置候調文ノ約

定書取返シ、私其方へ其俣出頭イタシ、談判ノ成行逐

一ニ申出候間、私ハ勿論市來ニモ安心候、右通去ル二

日御凶報相達候ヨリ、昼夜寢食モ安ンセス、心配手足

ノ置処モ無之程ノ事候処、初テ安眠致候次第ニ御座候、

市來ハ素ヨリ死去ノ申取リニ付テハ、同人カ趣意ニ出

候事ニテ、其段ハ別紙ヲ以内議種々ニ残リ候趣御届申

上候、就テハ此後格別御国難相成候程ノ儀ハ、決テ有

之間敷哉ニ被存候、然共猶又琉官共へモ心ヲ用ヒ候様

分テ申達置候、旁右御承知可被成下候、因テ市來事ハ

一往上国為致、右等之御届向可申上候間、御聞取可被

下候、御国船參リ合モ無之候間、飛舟差立上国為致候、

此段御届申上候、以上、

但佛人ヨリ取返シ約定書、其外御密用相運候書類ハ

市來相携候間、自然差上ルニ可有之候、

午九月十七日

島津下總殿

高橋縫殿

新納駿河殿

二八三 蒸氣船御詔文其外諸事御取煩ノ儀琉役々

御届書

去ル十四日蒸氣船御買入等ノ儀相断リ、約定書取返方

トシテ、三司官池城親方・布施<sup>改カ</sup>大夫野村親方・度支官

恩河親方・通弁官牧志親雲上佛人館へ差越シ、寒暖時

候ヲ述終テ、伊地良親雲上事去ル三日酒ヲ吞候上、馬

術稽古ノ為諸所乘廻リノ砌落馬イタシ、重疵ヲ受ケ無

程死去致候段委シク申聞、佛人共驚嘆イタシ、嗚呼此

人ハ聡明博識謙厚ノ人物ニテ、琉球国ノ一人ニテ国家

富強ノ大旨ヲ懷キ、中山王ノ手足ニ同シキ人ナリ、我

々ニハ和漢之教授ヲ請ケ、当春以来彼人ノ教ヲ受ルニ

至リテヨリ大ニ相進ミ、志ヲ立ル事ト案ンテ修行致候

処、実ニ不幸之至リナリ、又中山王ニハ往々此人之見

込通ニ政事ヲ為ス時ハ、一国ノ独立モ年ナラスシテ相

頭レ、御幸之事ナルヘキニ、此人死シタルハ、中山王

ノ為ニ可嘆之次第ナリ杯ト様々嘆キ申候、然シテ蒸氣

船買入方ノ儀、伊地良親雲上死去致候ニ付テハ、万物

不如意之小邦、過分ノ代金手沙汰ニ難及、右伊地良カ

中ニ立テ慶徳喇島人<sup>(德喇島カ)</sup>へ及談合置候趣有之候処、死去ニ

付テハ其事第一差支ニ相成リ、外ニ弁達ノ道乍残念無之、其外壯年ノモノヲ貴国へ差出方ノ義共モ、用途調達之道無之候間、此涯猶予致度候、先ニ寄りテ伊地良如キ人ヲ得候上ハ、依頼可致候旨ヲ以細々及相談候処、佛人共ニモ意外ニ存候向ニテ即答不致、聽テ三人ナカラ別座ニ入り、暫時御配<sup>マ</sup>及談合候テ後出テ来リ申出ル趣ニ、蒸氣船代金手当ノ儀ハ、差当リ弁達難致候ハ、我々各及中山国之為世話モ可致、書生ヲ佛蘭西国へ遣候義モ、琉球国開ケノ第一ニテ候間、成ル丈世話可致ト頻ニ相勸候へ共、私共ニハ申張リ程能ク申凌、一往猶予ニ評決シテ参リタル旨申入候へ共、彼等ガ申処ハ、琉球国ノ幸福ノ基ニテ候旨每往申出、様々申口説キ相断リ、渡置候蒸氣船詠文ノ書付類一切相請取候談判ノ成行ハ、中々筆紙ニ述尽難ク御座候間、委細市來正右衛門殿へ申入置候間、御聞取被下候様仕度、此段御届申上候、以上、

午九月七日<sup>(十時カ)</sup>

小録親方

譜久山親方

池城親方

大里王子

島津下總様

新納駿河様

二八四 安政五年戊午九月二日御討音到来及ヒ御

密用停止ノ達並ニ変約顛末

安政五年戊午九月二日ノ朝、飛船那覇港ニ到着(飛船ハ艦舟二艘トスル例規ニシテ、坊泊又ハ鹿籠浦等ヨリ仕役ス)、御逝去ノ御凶報ニ接シ、在勤ノ吏員一同痛嘆悲愁極リタルハ無論、加之御密用ノ件々総テ停止スヘシトノ趣、御家老島津下總・新納駿河又ハ御側役名越彦太夫等ヨリ、在番奉行高橋縫殿へ達シ越シ、廣貫へハ名越彦太夫及ヒ山田壯右衛門・堅山八郎等ヨリ、蒸氣船買入ヲ初メ交易御開キ、或ハ書生洋航、或ハ機械類御詠文等ノ一切、当節勿々御手ノ可被為届丈ケニ無之、尤モ御直達拝承ノ御用向故、我々共ニモ尊慮ノ程相分リ兼候ニ付、蒸氣船一件等違変致シ候上一往帰国、拝承ノ御用向言上可致トノ趣共申越シ候、就テ是迄聊カ心力ヲ尽シタル件々水泡ニ帰シ、憂患痛苦茲ニ谷リ、実ニ奈何ントモ為ス事能ハス、



高様一同痛辛極リ、摂政・三司官其他琉吏這ノコトニ関シタル輩ヲ召集シ、交約ノ手続ヲ評議セムト、九月四日在番奉行官宅へ集会シ、高橋達ノ趣演述シ、蒸氣船買入レノ一儀ハ、既ニ約定ニ及ヒタル末ナレハ、今更交約ハ尤モ至難、其他交易取組ノコトハ未タ約定ノ場ニ至ラス、和蘭人トノ取組ハ、長崎ニ於テ井上・相良等ノ談判ニ罹リ、琉球ニテハ施行上ニ関スル事ナレハ左迄心配ハナク、其外書生洋行停止ノ談判ハ格別難カラサルモ、蒸氣船詔文ノ一事ハ約定済ノ事故、交約ノ談判ハ果シテ紛議ヲ起スハ必定、然シ事茲ニ至リ、唯一ツノ幸トモ謂フヘキハ、約定書未本国ニ差送ラサルノ一点ナリ、若シ差送リタル上ノ今日ナルトキハ、又一層ノ至難ナリト雖モ、之ノミ不幸中ノ幸トモ云フヘシ、然レトモ本国船今日渡来モ難計、万一渡来セハ渠等ハ直ニ差送ヤ疑ナシ、然ルトキハ臍ヲ嚙ムトモ挽回スルコト能ハサルヘシ、故ニ如何様ニカ口呆ヲ設ケ、片時モ速ニ謝絶スヘシ、然リト雖モ其口実ノ奈何ンニ依リテ、命令ニ関スル無論ナルカ故、各意見腹藏ナク申述シト申達セシニ、<sup>(ハ腕カ)</sup>琉官々モ当惑シ、即席何ノ思考モナク、一往内議ニ及ヒ申出スヘシト退散シ、高橋及廣貫ハ百方勘考ニ亘ルヘシト一同引取りタリ、何

分ニモ懸念ナルハ、在留佛人共本国船渡来ヲ俟チ居タル故、若シ今日ニモ渡来セハ一層ノ難事ナル必定ナレハ、速ニ交約セサレハ御達旨ニモ御国難相成ル云々ノ趣、実以テ輕カラサルコトナルカ故、片時モ早ク交約ノ談判ニ取掛ルヘシト高橋ト議シ、其次日摂政・三司官ヲ初メ前日ノ官々残ラス召集シ、商議之如何ヲ問ヒシニ、摂政伊江王子曰ク、篤ト評議ニ及シニ、交易取組ハ全ク中山王ニ於テ取結フノ場合ニ非ラス、長崎ニ於テ和蘭人ト談判シ、琉球大島ニテ執行ノミノ誤ナリ、在留佛人へハ都合ヲ以テ御開市ノ筋ナレハ、別ニ談判ニ及ハス、書生差遣ハ口上ノ約束ナレハ、猶予ノ相談ニテ事足ルヘシ、蒸氣船買入ハ既ニ約定書モ渡シタル上ノ事故、此一事誠ニ困難ナリ、然ルニ  
太守様(齊彬公)御逝去、今後御手ノ届カル、丈ケニアラス、御国難ニモ関係ストノ趣、御家老中ノ御心配尤ノ事ナレトモ、元来此ノ約定ハ御名目ハ全ク出サス、中山王手限りノ取計ヒニテ、通信ノ約ヲ結ヒタル佛朗西国トノ取組ニテ、船届キタル上、中山王ヨリ献上トカ売上ケトカノ名ヲ以テ申取ラハ、公義へ対セラレ御難題ニハナルマシク、代金払ノ御都合宜シク御取計ヒアラハ何ノ故

障カアラム、御先代様厚キ 思召甚タ残念ニ存スル旨、殊ニ佛人共ニハ変約ノ談判ヨリシテ、以来何彼ト疑惑ヲ生スルノ基、却テ難題ノ端ナラム、此俟ニシテ蒸氣船届キタラハ、年来深キ

尊慮モ貫クヘント申述セリ、高橋及廣貫モ同感ナルノミナラス、時勢必要ノ品ナレハ変約ハ敢テ好マスト雖モ、又退テ御国許ノ御内情ヲ遙察スルニ、難默止詔合モアルヘシ、故ニ達書ニモ断然停止且ツ御国難難計云々ノ文字モアリ、就テ高橋及ヒ廣貫ニ於テハ、此時御達書ノ趣遵奉セサルヲ得ス、加之今日只今ニモ佛船渡来セハ臆ヲ噬ムトモ益ナシ、片時モ速ク変約シ、約定書引キ戻スニ外ナシト琉官ニ説解スト雖モ、琉官吏ハ反復前議ヲ取り、或ハ謝絶ノ辞柄ナク太抵ノ辞弁ニテハ、佛人共承託スマシト結局ノ議纏マラス、異議紛紜タリ、廣貫ハ国情察スル旨アリテ謝絶ニ外ナシト決シ、変約ノ辞柄種々苦考ニ涉リ、兎角謝ノ道ハ不肖一身ヲ潔クスルニ外ナシト決心シ、一ト先ツ琉官吏ノ意見ヲ聞キ、其上愚考ヲ述ヘム、殊ニ牧志親雲上ト兩人担当シテ談判シ、加之廣貫ハ元來度佳喇島(外國人ニ對シ鹿兒島ヲ指シテ云フ)ノ屬島大島人ニシテ、幼年ヨリ度佳喇島ニ於テ学問修行シタリト渠等

ニ申聞ケ、蒸氣船代物調達ハ、琉球政府ノ委任ヲ受ケタル旨モ談話ニ及ヒシコトナレハ、變約ノ辞柄ハ、廣貫死亡代物調達ノ道杜絶、其他航海引受ノ人ナキ趣ヲ以テ一時中止ノ談判ニ及ヒ、約定書引戻スニ若クハナカラムト、琉官吏ニ説論セシモ異論交々起レリ、高橋カ説ニ、一身ヲ潔クスルハ感服ノ至、素ヨリ臣タル者ノ当然トハ云ヒナカラ、此ノ処分ニテ一往ノ断リハ調フヘント雖モ、是迄談判ニ及ヒタル事柄モ寡カラス、一身ヲ潔クスルノミニテハ後患ヲ断ツ訳ニハ至ルマシク、存在シテ後難ヲ禦クコソ肝要ナラメト、交々ノ論説起リ纏リタル説無し、牧志親雲上ハ、琉人ノ内ニモ可ナリ勇断アル人物ニテ、席ヲ進ンテ曰ク、這ノ談判ニ就テハ兩人カ担当シタル訳、其上佛船今日渡来モ難計、此様区々ナル議論ニ消光シ、佛国船渡来約定書差送ルトキハ、御国難一層シ、頗ル艱難ニ立到ルヘシ、謝絶ノ辞廣貫カ説ニ若ハナシ、就テハ一同一身ヲ潔クシ、御国難ヲ排シ、御先代様(齊彬公)ノ尊靈ヲ安シ奉ルヘシ、微賤ノ身、御高恩ヲ蒙リ重官ノ列ニ昇進シタル報酬ニ、廣貫ト偕ニ一身ヲ潔クスヘント切言ス、茲ニ於テ一座默然可否ヲ謂フモノナシ、廣貫ハ一身ヲ潔クスルノ一説ニ止リ、牧志ト後日ノ患難論ニモ転

シタリ、然ルニ豊見城按子・池城親方言ヲ俱ニシテ曰ク、兎角謝絶ノ運ヒ速ナラサレハ、佛国船渡来今日モ計リ難シ、之レ甚タ恐ル処ナリ、仍テ謝絶ノ辞ハ廣貫死去ノ趣ヲ以テ、船代物等調達ノ道無キニ因リ一往中止ノ趣、牧志ヨリ懇ニ談判シ、約定書取戻シノ策ヲ以テ談判試ミタラハ、佛人共ノ論旨モ分ルヘシ、若シモ承諾セス難題申掛ケ、實際手筋尽キ果タルトキニ當テ、兩人ナカラ一身ヲ潔クシテ何ノ遅キコトカアラン、先ツ廣貫一人死去セシトノ辞柄ヲ以テ、談判シ試ムルヲ可トスヘシト謂フ、高橋其他琉官等一同這ノ説ヲ賛成シ、而シテ廣貫カ死亡ハ、落馬重傷ヲ受ケテ死シタリト唱ヘシムルニ決シタリ、然シテ其次日<sup>九月十日</sup>、三司官池城親方・布政太夫野村親方・度司官恩河親方・通弁官牧志親雲上一同佛館ヘ行キ、前議ノ如ク一往中止ノ旨縷述シ、或ハ書生洋航等ノ事件モ俱ニ中止セサレハ、其費用調達ノ道断絶云々等詳述セシニ、佛人共ハ意外ノ事故答弁モ速ナラス、別室ニ入りテ稍暫時クシテ復席シテ曰ク、蒸氣船代物調達ノ道無シトノ趣ニ付テハ、輕カラサルコトナレハ、一往中止ハ其通ニ承諾スヘシ、然レトモ右談判ノ筆記或ハ約定書モ受取リタル事ナレハ、其写本國政府ニ通知シ重テ買入レノ都

合モアルヘシ、或ハ先年来提督ヨリ船買入又ハ交易ノ相談ニ及ヒタル次第モアリ、琉球國斯迄開ケタル証拠ニ差送ムト、其論又數刻ニ及ヒ、漸ク彼是陳弁シ、遂ニ渡シ置キタル約定書類悉皆取戻シタリ、其談判ノ次第ハ甚タ冗長ナルカ故茲ニ略ス<sup>當日ノ談判ハ頗ル至難、</sup>而シテ琉館員等<sup>及ヒタリ</sup>高橋役宅ヘ出頭、談判ノ始末具ニ申出、取戻シタル約定書類等モ提出シタリ、一同大ニ安心シ、廣貫・牧志ニハ蘇生ノ思ヲナセリ、因テ廣貫ハ帰國ノ準備ニ着手シタリ、実ニ因難ノ至極トハ此時ナリキ、幸ニ佛人共論難ニモ及ハス、且ツ佛国船モ渡来セス<sup>道ノ談判</sup>變約了シタルハ<sup>異議ナク</sup>濟ミタルハ<sup>九月十四日ナリ、同十八日仏船果シテ渡来、僅ニ四五日間ナリキ、若シ變約ノ談判遅引セハ、一層ノ困難ナルハ無論、危カリシ事ナキ、</sup>偏ニ先公尊靈ノ御冥助ニ外ナシト、琉官及ヒ高橋等愁歎遺憾ノ中ニ一安意ヲ唱ヘタリ<sup>變約談判(變約ノ請文)高橋又ハ琉官御届書、ノ始末(及ヒ届書)縫殿寫為參考副申ス</sup>

## 二八五 御密用ノ一切停止變約帰麗復命之事實

安政五年戊午九月十四日、在琉佛朗西人共ハ御密命ノ蒸氣軍艦及ヒ大小砲等其他買入ノ事件、並英・米・佛三国ヘ書生差遣等ノ事共變約琉官員等ト談判ニ及ヒ、約定書類悉皆取戻シタル始末ノ概略ハ前条ノ如シ、然シテ廣貫

ハ御達ノ通り、右願末御届等ノ為メ帰麿、高橋及ヒ琉官ヨリノ御届書等携帶、同年十月八日飛舟〔り船カ〕ヲ那覇港出帆、

風順悪シク徳ノ島(山湊)・大島(大島ハ宇檢・大和浜・名瀬等ノ諸港)・七島(七島ハ中ノ島・口之島ニ廿日余碇泊セリ)

等諸所ニ寄港、風順ヲ俟チ殆ント七十余日ニシテ、翌年己未正月七日山川港へ着帆、同八日帰麿、即日御家老新

納駿河へ就テ、変約ノ始末及ヒ約定書、又ハ在琉佛人共本国へ照会ノ為メ記シ置キタル横文ノ書類等、悉皆取揃

提出セシニ、直様達御聴(齊興公)スヘクト受領セリ、而シテ翌九日新納宅へ

出頭スヘントノコトナリシカ、変約滞リナキ旨宰相様(齊興公)當時玉里邸ニ在テ政務ヲ介助シ玉ヘリ御聴ニ

達、御安慮云々ノ趣御賞詞拝承セリ、之ヲ齊彬公特命一大事件ノ結局トス、噫呼、

二八六 篤姫君將軍家定公へ御結婚ニ就テ御拝領

〔包紙ウハ書カ〕  
七拾七番

御拝領之御鞍鏡御既御格謹被仰付候旨、御家老衆より御馬預江之御添書志通 白木拾番箱

右安政五年午六月廿五日、駿河殿より上村休之進江被成御渡、白木御文書拾番箱江納置候事

書附写

品

一海有之御鞍一口

但

伊勢駿河守貞雅作

一菊地蒔絵繪李目梨地扇面散之内ニ略二十四孝蒔絵

一浅黄絹拾服紗包

一外家箱桐白木萌黄絹真田緒付鴉目黒之銅座四部一色付

一両咲之御鏡一掛

但

右同作

一塗蒔絵右同断、

一浅黄絹拾袋入、

一外家箱右同断、

御鞍鏡

一辻山城極折紙二通、

但

外家箱桐白木崩黄絹真田緒付鴉目黒之銅座四部一  
色付、

右は

御台様(天璋院殿)御入

城御婚姻迄も被為整候為御礼、御伝来之御腰物被遊御

献上候処、

御満悦被

思召上、御時服并御鞍轡被遊

御拝領候付、御鞍轡之儀は御既御讓御道具江被入置、

御格護被仰付候条、到後年紛敷無之様可記置者也、仍

如件、

安政五年午六月廿五日

伊織久成樺山

駿河久仰新納

登久包島津

伯耆久福島津

左衛門久徴島津

御馬預

御馬預へ宛タルハ、馬具ナルヲ以テ御既ノ宝蔵ニ保存セシ  
ムルカ為ナリ、

〔東京大学史料編纂所所蔵文書にて校訂、  
他に鹿児島県史料旧記雜録追録八所収、〕

二八七 今和泉郷池田村ノ池水灌漑ニ着手シ玉フ

顯娃・指宿ノ両郷ハ田地用水ニ乏シキ場所ナルカ故、今  
和泉郷池田村ノ池水ヲ灌漑スルトキハ、許多ノ水田開ケ  
ルノミナラス、数ヶ村民飲用モ便利ナルヘシトハ、積年  
土人ノ冀望スル処ナレトモ、池ノ水神崇リヲナスト唱へ  
望ヲ達スルコト能ハサリシカ、安政五年ノ春指宿二月田  
御湯治ニ被為越候節、池水灌漑用水ニ充ツヘキ旨命セラ  
レシニ、郡奉行猿渡彦左衛門ヨリ水神ノ崇アリトノ説ヲ  
言上ス、公仰ニ、水神何ソ民益ヲ妨クヘキ、神ハ人民ニ  
幸ヲ与フルヲ好ミ玉フモノニテ、人民其恩恵ヲ謝スルニ  
ハ、礼ヲ厚クシ祭祀ヲ怠ラサルニアリ、如此ノ説ハ妖言  
ト云フモノナリ、妖言ニ惑ハサレ人益ヲ起サ、ルハ愚ト  
謂フヘシ、宜シク民益ヲ起スノ趣ヲ告ケ、速ニ着手スヘ  
シトノ御言ナリシト、夫ヨリ人々喜ンテ灌漑ニ着手セ  
リト、然ルニ其工事半途ニシテ 薨去中絶セシヲ、大山  
綱良遺志ヲ継述シ、其功ヲ終リ、両郷共ニ今ハ水利ノ弁  
ヲ得タリ、実ニ 御英断ト云フヘシ(農政引例書參看)

## 二八八 城地移転ノ御目論見

安政五年ノ夏和蘭人鹿兒島へ参港ノ節、親シク拜謁ヲ允サレ、而シテ石川確太郎・宇宿彦右衛門・磯永喜之介等ヲ以テ、海岸守備ノ事共質問命セラレ、神瀬ニ砲台築造ノ事ヨリシテ「ハントウエーン」ナルモノ、言上ニ、憚ナカラ御城地ハ西洋ノ例ヲ以テ云へハ、海岸ノ一砦堡トモ云へシ、万一海陸トノ戦トナリ海上ヨリ大砲ヲ飛ストキハ、一二彈丸ノ為メ直ニ壞燼シ、御居住ハナリ難カラシ、其時ニ至リ国主馳セテ遁ル、位ナルトキハ、兵氣モ從テ挫ケ、御維持ニ御苦ハ論ヲ俟タサルナリ、又敵艦ヲ襲ヒ来ラハ幾十日ノ久シキモ碇泊シ、互ニ砲彈ノ争トナルヤモ知ルヘカラス、然ルトキハ内国ノ政務御閣モナルマシク、戦ヲ開キタル上ハ内治ノ怠ナキヲ專要トセサルハ、遂ニ内乱レテ全勝ヲ取ルコト能ハサルモノナリ、茲ヲ以テ国王ハ城中ニ在リテ内外ノ政務ヲ取り、元帥ハ外ニ出テ、戦術ニ奔走スルヲ肝要トス、又国王已ムヲ得ス戦地ニ臨マハ、内治宰相ハ城中ニ在リテ国王ノ妻女ヲ保護シ、或ハ内政ヲ執ルヲ要ス、故ニ城地ハ海岸ヲ離レ、砲彈ノ達セサル地ヲ撰フモノナリ、海岸ヲ隔ルコト少ク

モ十五里和蘭ノ里數ナリ、日本里數ニシテ凡五里半許リ、否ラサレハ砲彈達ス、依テ神瀬・櫻島等ニ大砦堡建設セラルトキハ、其憂少シト雖モ、成ルヘクハ御城地ヲ移サル、ヲ宜シト存スル旨言上セリト、其言石川等尚ホ質問シテ上申セシニ、如何ニモ尤ノコトナリ、我モ兼テ遷城ノ事ヲ思ハサルニアラサルトモ、日本ノ癍乱世ニハ内政ハ打棄置クモノ、様心得、或ハ城地ノ結構ヲ先スレハ、臆シテ身構スト謂フヘシ、然レトモ外夷トノ戦、弓槍ノ器変シテ大小砲ノ戦トナリタルカ故、追々其辺ノ事ニモ手ヲ下スヘシ、先ツ神瀬・櫻島等ノ砲台ヨリシテ、後ニ城地モ移スコト、スヘシ、國分・蒲生ノ両所ハ治乱共ニ便利ノ地ト思ヘリ、海岸ノ堅メ調ヒタル上ハ、屋敷構ニテモ宜シ、城ノ構ヘモ堅固ナル上ハナケレトモ、人氣一致スレハ何程ノ構ヘヨリモ堅固ナルハ和漢洋同然ナリ、大坂ノ名城モ遂ニ落城ノ例モアリ、又古ノ城地ハ弓槍或ハ小銃ニ備タリ、今ハ何百斤ノ大砲トナリタレハ、神瀬等ニハ砲台ヲ築キ、陸ニハ二三里ノ外ニ胸壁ヲ築テ外郭トシテ守防事足ルナラム、國分・蒲生ノ間ナレハ、大砲ノ患アルヘカラスナト、宣ヒシト、然シテ後數日ニシテ磯永喜之助・石川確太郎へ、國分・蒲生ノ両所古城跡海岸ヨリノ距離ヲ測量シ、地利

ヲモ測リ製図スヘシト命セラレ、浦生ハ地形狭ク且ツ運送不弁ナレハ、國分ノ方宜シカルヘシ、然レトモ都合ヲ以テ直ニ見分スヘシトノ御言ナリシト、而シテ櫻島ト花倉明神岬ノ辺ハ、其距離僅ニ二十町内外ナルカ故、此ノ両所或ハ櫻島瀬戸ニモ砲台ヲ築キ、或ハ重富・帖佐・加治木等ノ海岸ニ大小ノ砲台ヲ設クルトキハ、海岸ノ守備完全ナリトノ御見込ナリシト(此図磯永秘藏セシカ同人死後如何ナリシヤ、○文久三年七月英國ト戦後、國分郷ニ城地移転ハ此ノ御遺志ニ基因セリト云)

二八九 考証 吉井友實手記(本書旧米澤藩土宮島

誠一郎所有)

戊午夏六月友實大坂ニ在リ、西郷隆盛江戸ヨリ薩摩ニ帰ルトテ友實ヲ訪ヒ語テ曰(吉井大坂ノ蔵屋敷ノ長屋ニ在リ、窓外吉井ヲ呼フ者アリ、窓ヲ開ケハ西郷舟ニテ窓下ニアリ、今江戸ヨリ帰ル処ナリ云々、夫ヨリ長屋ニ来リ、對話ス、一橋家ヲ西城ニ立ルノ儀ニ付、春嶽殿ヨリ齊彬殿ヘノ返翰ヲ以テ、又江戸ニ赴クトテ大坂ニ着セリ、一日友實同伴シテ、大坂城代土屋侯ノ公用人大久保要ヲ訪、此時始テ烈公始メ有志ノ諸侯禁錮セラレタリト聞ク、隆盛虜城ヲ発セント

(松平慶永)

(貞崎上浦藩主)

(徳川齊昭)

スルノ日、齊彬殿密ニ隆盛ニ語テ謂テ曰、事成ラサレハ

他ニ一策アリ、自ラ闕ニ詣テ為ス所アラン、汝モ亦臨機

入京スヘシ他日久光殿遺志ヲ継述セラレシ、蓋シ效ニ根スルナルヘシ、爰ニ於テ隆盛東行

ヲ止メ京師ニ入ル、友實モ亦上京セリ、実ニ七月十三日

ナリ、伏見ニ着シ文珠某ノ家ニ止宿ス、爰ニテ伊地知正

治ニ会ス(伊地知關東ノ動靜ヲ察シテ、機ニ先テ西上ス)、是

亦江戸ヨリ京師ニ入ルモノナリ、翌十四日梁川星巖ノ三

樹ノ寓居(三本木街)ヲ訪、頼三樹三郎又長州ノ人一人来

ス後ニ開ケハ長人ハ、大栗源太郎ナリ、星巖曰ク、兼テ關東ニ間諜ヲ出シ置キ

シニ、不日井闕老上京、

主上ヲ要シテ彦根ニ移シ奉ルノ確報アリ、

主上素ヨリ東遷ヲ不被為好、因テ西国ニ遷幸可被為在歟、

又吉野ヘ御避可被遊乎、吾輩爰ニ会シ評議ノ上、猶春日

讚州ヘモ謀ル積ナリ、此際君等ノ上京大ニ力ヲ得タリト、

実ニ切迫ノ勢面色ニ顯ル、而シテ星巖ノ凜乎タル、大ニ

所感アリシニ隆盛答テ曰、然ラハ吾輩モ滯京シテ応分ノ

力ヲ尽サン、其夜伏見ニ歸リ、隆盛終夜一封ヲ認メ齊彬

殿ニ贈ル此旨ハ京師追切云々、故ニ東行ヲ止メ滯京スト、此、十六日書慶城ニ到、齊彬公已ニ逝去セラレタリシ後ナリ

日再ヒ上京、錦小路上ル柳馬場健屋(薩人ノ定宿ナリ)ニ止宿、井伊ノ上京ヲ待ツ、此時隆盛歌アリ曰、

東風吹かは花や散さん橘の香をは袂に包みしものを

然ルニ如何ノ都合ナリシヤ、井伊ノ上京モナク後幕義兵シテ間部ノ上京トナリシ、追々日下部伊三次・勝野豊作水戸ノ人等上京ニ非ルカ

セリ、然ルニ九日初旬頼・梅田縛ニ就キ、月照ハ大坂ニ

逃ル、是ヨリ先友實ハ京坂ノ間ニ往来セリ、正治独り隆

盛等ノ京師ヲ去ルノ後チ、猶京師ヲ去ルニ不忍、独京・

伏見ノ間ニ潜伏シテ時勢ヲ窺ト雖モ、探索益敵ニシテ終

ニ大坂ニ来リ、友實ト共ニ大坂ニ在リシ所、猶モ兩人ヲ

探スコト急ニシテ、邸(大坂留守居)ヨリ帰国スヘキ旨命

セラレ、相共ニ大坂ヲ発シテ筑前博多ニ到リ、工藤、北

條等ニ面会シ、月照ノ安否ヲ問ヒシニ、今朝薩摩ヘ向ケ

出発セリト云フ、一兩日博多ニ滞留シテ辛フシテ鹿兒島

ニ帰着セリ、月照ハ後レテ着セラレタリ、是レ関門ニテ

云々アリシ故ノ事ナリ、正治小倉ニ着シケル時ノ歌ニ

今日までは顧みてけり玉敷の都につゝく大和しま根を

是ニテモ前ニ不忍去ノ情アリシヲ可見以上吉井手書

右ハ明治十三年二月二十九日、吉井三峰ヲ尋ヌルニ、

此頃小川某ノ(豊後岡藩ノ小川一飯カ)月照ノ事ヲ取調ヘ呉候様頼ニテ、右

ノ一編ヲ綴レリ云々、仍テ抄写、

養浩堂主人宮島誠一郎

茲ニ記ス所ノ吉井友實カ宮島ニ示シタル書旨ハ、燈台下閣

シトノ諺ノ如ク、本藩人ニ伝聞セシハ甚タ寡シ、其寡キ所

以ハ當時一大機密ナル言ヲ俟ス、之ヲ窺ヒタルハ久光公ト

西郷隆盛ノ外決シテナカリシナラム、若シ漏泄シテ、幕府

ノ探聞ニ触タラムニハ一大事ナルカ故、密ニ密ヲ加ヘタル

ナラム、西郷カ密示シタルハ、岩下方平・大久保利通・吉

井友實ノ二三名ニ過キサリシト、岩下ハ其時西郷カ密告ヲ

聞ヒテ意外ノ御英断ニ驚キタリト(廣實親シク聞ク、他藩

ニハ福岡・佐賀ノ二公ニ止リシナラム、二藩ノ臣下ニ之ヲ

示サレタルモ必ス二三近臣ニ止リシナラム)

公安政四乙巳(丁)四月御下國、御着城間モナク二丸郭内ノ演武

場ニ於テ発火操練ヲ開カレ、御射ヲ御臨場進退駈引ヲモ指

揮セラレ、或ハ行軍演習、或ハ砲台ニ於テハ遠撃射擲等、

御病辱ニ就キ玉フマテ勉メ努メ玉ヒシハ、悉ナ人知ルカ如

シ、斯ク非常ノ御挙動ハ、當時怪ムモノナキニアラサリキ、

然レトモ全ク外夷ニ備ヘラレシト思ヒシコトナリキ、然ル

ニ後本書ノ如ク、大ニ為スコトアラムノ御決心アリシニ因

レルヲ知ルニ至レリ、後日開ク所ニ依レハ、精兵三千程ヲ

(頭注ニ宸翰甲第ノ母參看、久通宮日記又ハ近衛家日記及宸翰雜書參看一

前中後ニ従ヘ玉ヒ、此年八月中旬ヲ以テ琉球國使ヲ引率セ

ラレ、出府ノ名ヲ假リ、途次京・伏・坂ニ於テ勅命ヲ申シ



下シ、天下ノ人心ヲ一定シ、幕政ヲ改革セラレ、尊王ノ大

義ヲ發揚セラレムニアリシト云フ、当時極盛至治、斯ク英

断シ玉ヒシハ、憂国ノ御至誠ニ出タル者ナリ、惜ヒ哉、天

年ヲ籍サス、中道ニシテ薨セラレシハ、国家ノ不幸ト謂フ

ヘシ、畏クモ

陛下計報ヲ聞セ玉ヒ、朕カ不幸天下ノ事去リト宣シトナム  
(近衛忠熙公親シク窺ヒ玉ヒシト云フ)

二九〇 在京原田才輔内報

轉法輪殿(三條實萬)ヨリ初度之上書(安政五年戊午

四月)

○この文書は、本文第六二号文書と同文重複により略す。よつて末部の市來四郎の注記部分のみ掲げる。

斯書ニ聯帶ノ青蓮院宮及ヒ近衛忠熙公御秘書参照シテ、当  
時朝廷ノ形勢明亮ナリ、第 卷參看、

二九一 伊勢神宮勅使發遣詔書(在京原田才輔報告)

〔頭註〕(宸翰申第 号參看)  
安政五年六月十七日

伊勢勅使發遣

勅使發途之日、洛中洛外之寺院鐘声ヲ禁シ、道程  
之寺院是又同様之上、寺院之門ナト葭莩ヒ致候ヨ

シ、

勅使 德大寺殿

天皇 我 詔旨 止 掛畏 岐 伊勢 乃 度舍 乃 五十鈴 乃 河上 乃 下都

磐根 尔 大宮柱 広敷立 天 高天原 尔 千木高知 天 称辞定奉 留

天照坐皇太神 乃 広前 尔 恐美 恐美 申賜 止 波入 申久、頻年 蛮夷 等

皇国 乎 覬覦 乃 心罷 須、殊 尔 今 亜墨利加国 魁首 止 為 兵 和  
親 乎 乞 比 互市 乎 求 牟 事情、驕傲 尔 志

皇威 乎 輕侮 利 国沢 乎 奪取 牟 止、動 礼者 毛 須 軍艦 乎 來 乃 勢在  
利、故 尔 率土不穩 須 誠 尔 国家 乃 大患 奈、夫我 大倭 日高  
見之 国 波

皇大神 乃 依賜 留 食国 尔 志

天日嗣 乃 高御座 波 天地 乃 在 牟 限 利 動 古 無 久

皇威 波 青雲 乃 窮美 不 至 古 無 久、故 尔 古來 蛮夷 等

神州 止 畏敬 倍 尔 然 留 今 如 是 在 禍 乎 受 留 波

朕薄德 尔 依 氏 奈 利、昼 止 無 久 夜 止 無 久 寤 天 愛 比 寐 天 懼 賜  
留 然 礼 止

皇大神 乃 擁護 乃 誓 明 尔

神威畏 波 計 礼 何 底 止 如 是 在 食国 乃 汚穢 乎

御覽 志 天 洗 清 米 賜 波 奴 在 牟、故 尔 慎 臣

祖宗乃道乎道止志〔深ク勵力〕

寂慮乎凝志神明乃冥助乎祈申賜止波牟念行須、故是以吉日良辰乎

正二位行權大納言藤原朝臣公純王・正五位下道春王中臣・正三位神祇大副兼伊勢權守大中臣

朝臣教忠等乎差使底、忌部從五位上齋部宿禰能弘加弱肩尔太極取懸臣

内外乃宫尔礼代乃御幣尔金銀乃御幣乎相副臣持齋利令

捧持臣奉出給布中尔

内宫波御劍御弓御矢御鉞尔左右乃御馬各一疋乎牽副天

進給布、

外宫波御劍御弓御矢御鉞尔左乃御馬一疋乎牽副天進給布

荒祭官尔金銀乃獅子形各一頭進給布、掛畏岐

皇大神此状乎平久安久聞食臣擁護乃誓乎懲留古無久

神威乎顯賜比科戸乃風乃天乃八重雲乎吹掃布如久早久

災孽乎万里乃外尔攘比、永久汚穢乎四海乃表尔滌賜比

人民乎志心志乎同布、忠誠乎尺志国体乎損止布古無志米

夷賊乎志天

神威乎儻美

皇德尔服天志兵革乎起須古無志米賜比

天皇朝廷乎

宝位無動久常磐堅磐尔夜守日守尔護幸倍奉賜比弥

宝祚延長武運悠久尔一天清平万民安穩尔護幸給止倍恐美

恐毛申賜止波久申、

安政五年六月十七日

二九二 石清水八幡宮勅使 中山殿

〔石清水臨時奉幣宣命〕

天皇我詔旨止掛畏岐石清水尔御座勢

八幡大菩薩乃広前尔恐美恐毛申賜止波久申久、頻年蛮夷

等

皇国乎覬覦乃心罷須、殊尔今垂墨利加国魁首止為臣和

親乎乞比互市乎求牟事情驕傲尔志

皇威乎輕侮利国沢乎奪取須止、動毛須軍艦乎米乃須勢在

利、故尔率土不穩須誠尔国家乃大患奈、曾毛々々

大菩薩波

威德武久敵志坐々臣諸蛮乎平久安久知食須

朕宝位乎嗣氏与

大菩薩乃

威德乎遠長尔武久敵久為奉止牟念行須今如是在禍乎受

留

朕薄德尔依氏奈良昼止無久夜止無久窟天憂比寐天懼賜計比

留、然留波

大菩薩波鎮尔

皇祚乎護止良尔貞觀元年尔王城乃側男山尔鎮座乃、既

貞觀乃度弘安乃度毛夷類征伐乃

威德乎顯賜比千歲乃今尔大御光乃燿輝乃須明志故尔、

今慎氏

祖宗乃道乎道止志深久

叡慮乎凝志神明乃冥明乎祈申賜波乎念行須、故是以吉

日良辰乎挾定氏正二位行權大納言藤原朝臣忠能乎差使

氏、礼代乃御幣尔幣帛御馬一疋乎相副氏令捧持氏奉出

給、此状乎平久安久聞食氏垂迹乃

神託尔違古須無久擁護乃

靈誓乎愆留古無久

神威乎顯賜比科戸乃風乃天乃八重雲乎吹掃布事乃如久

早久災孽乎万里乃外尔攘比永久汚穢乎四海乃表尔濼賜

比人民乎志心志乎同志布忠誠乎尽志国体乎損布古無志加良

夷賊乎志神威乎儼美

皇德尔服志天兵革乎起須古無加良賜比氏

天皇朝廷乎

宝位無動久常警整尔夜守日守尔護幸倍奉賜比弥

宝祚延長武運悠久尔一天清平万民安穩尔護幸給止倍恐美

恐美申賜波久申、

安政五年六月廿三日

二九三 鴨社 勅使 正親町三條殿

〔賀茂面社臨時奉幣宣命〕

天皇我詔旨止掛長岐賀茂乃

皇大神乃広前尔恐美恐美申賜波久申久頻年蛮夷等

皇国乎覬覦乃心爾須殊尔今重墨利加国魁首止為氏和親

乎乞比互市乎求尔事情驕傲尔志

皇威乎輕侮利国沢乎奪取尔須動毛須軍艦乎求乃須勢在利

故尔率土不穩須誠尔国家乃大患尔夫我大倭日高見之國

波 皇大神乃依賜倍留尔食国志

天日嗣乃高御座波天地乃在尔限利動古無久

皇威波青雲乃窮美乃不至止無久故尔古来蛮夷等

神州止畏敬倍然留尔今如此在禍乎受留波

朕薄徳<sup>尔</sup> 依<sup>氏</sup>奈良 昼<sup>止</sup>無<sup>久</sup> 夜<sup>止</sup>無<sup>久</sup> 寤<sup>天</sup>憂<sup>比</sup> 寐<sup>天</sup>懼<sup>賜</sup>  
留<sup>比</sup>計、然<sup>礼</sup>止<sup>毛</sup>

皇大神乃擁護乃誓明<sup>尔</sup>

神威畏<sup>計</sup>礼 何<sup>止</sup>如是在食国乃汚穢<sup>乎</sup> 御覽<sup>志</sup>洗<sup>比</sup> 清<sup>米</sup>賜

波<sup>奴</sup>在<sup>牟</sup>、故<sup>尔</sup>慎<sup>氏</sup>

祖宗乃道<sup>乎</sup> 道<sup>止</sup>志 深<sup>久</sup>

叙慮<sup>乎</sup>凝<sup>志</sup>

神明乃冥助<sup>乎</sup> 祈申賜<sup>波牟</sup> 念行<sup>須</sup> 故是以吉日良辰<sup>乎</sup> 拈定

正二位行権中納言藤原朝臣實愛<sup>乎</sup> 差使<sup>氏</sup> 礼代<sup>乃</sup> 御幣

尔幣帛御馬一疋<sup>乎</sup> 相副<sup>氏</sup> 令捧出給<sup>布</sup>、此状<sup>乎</sup> 平<sup>久</sup> 安<sup>久</sup>

聞食<sup>氏</sup> 擁護乃誓<sup>乎</sup> 愆<sup>留</sup>古<sup>無</sup>久

神威<sup>乎</sup> 顯賜<sup>比</sup> 科戸乃風<sup>乃</sup> 天乃八重雲<sup>乎</sup> 吹掃<sup>布</sup> 事乃如<sup>久</sup>

早<sup>久</sup> 災孽<sup>乎</sup> 万里乃外<sup>尔</sup> 攘<sup>比</sup> 永<sup>久</sup> 汚穢<sup>乎</sup> 四海乃表<sup>尔</sup> 滌賜

比<sup>人民</sup>乎志 心志<sup>乎</sup> 同<sup>布</sup> 忠誠<sup>乎</sup> 尽<sup>志</sup> 国体<sup>乎</sup> 損<sup>布</sup>古<sup>無</sup>加良、

夷賊<sup>乎</sup>天<sup>志</sup>

神威<sup>乎</sup>儼<sup>美</sup>

皇徳<sup>尔</sup> 服<sup>天</sup>志 兵革<sup>乎</sup> 起<sup>須</sup>古<sup>無</sup>加良 賜<sup>比</sup>

天皇朝廷<sup>乎</sup>

宝位無動<sup>久</sup> 常磐堅磐<sup>尔</sup> 夜守日守<sup>尔</sup> 護幸<sup>倍</sup> 奉賜<sup>天</sup>比<sup>弥</sup>

宝祚延長武運悠久<sup>尔</sup> 一天清平万民安穩<sup>尔</sup> 護幸給<sup>止</sup>倍<sup>恐</sup> 美

恐<sup>美</sup> 申賜<sup>波久</sup> 申

安政五年六月廿三日

以上、各近衛家所藏宸翰及ヒ秘書ト題スル書類中ニ参照シ  
テ、其事実ヲ証スヘシ、

二九四 神宮其他奉幣費不足（原田才輔内報）

一 今度ノ御入用、自關東之御入用（充行ノ義）ニテハ引足

兼<sup>（候カ）</sup>ニ付、自御文庫三百金余徳大寺へ被下候由（當時幕吏ノ所為如此）

一 廿二日神宮奉幣之式、廿五日朝勅使已下帰洛、同昼後撰家始參賀之儀有之、

一 恐入候義ハ

（頭目）<sup>（候中）</sup> 丹參賀  
主上御昼夜御安睡不被遊、御齒痛等ニテ御惱セラレ賜フト云々、

一 徳大寺殿伊勢ニテヲカラス宮へ（小鳥宮）御參詣、網ヲ引セラレ候処、四尺余之龜ヲ得申候由ニテ、神酒ヲ賜

リ御放ニ相成候由、

一 上賀茂ニテ勅使 宣命ニ相成候へハ、東ヨリ鶴二羽飛来リ、右御唱中（祭詞朗誦ヲ云ナラム）ハ、御社ノ上ヲ舞候テ、右相濟西之方へ飛去候由、

一 下賀茂神前階上ニ鳩一羽遊居候ヨシ、  
一 八幡同時ニ只一雷鳴申候ヨシ、

一 浦人右同三千七拾四人  
内

二九五 穎娃・山川・指宿三ヶ郷人員調 (安政五

拾五歳ヨリ六拾歳迄千八百七拾九人  
拾五歳以下男五百拾三人

年ノ調、指宿御温泉中)

右同女五百五拾式人

一 郷土惣人数男女千八百壹人

一 町人右同六拾人

内

内

拾五歳ヨリ六拾歳迄千貳百人

拾五歳ヨリ六拾歳迄貳拾式人

拾五歳以下男貳百貳拾人

拾五歳以下男貳拾壹人

右同女貳百五拾五人

右同女拾七人

一 開闢神社々家百四人

惣合老万三千三百拾六人

内

指宿・山川・穎娃三ヶ郷上下  
合人数貳万八千三百三拾六人

拾五歳ヨリ六拾歳迄六拾九人

拾五歳以下男九人

一 惣高頭九千七百六石八斗九升七合四勺六才

右同女拾式人

右之内

一 百姓惣人数男女八千貳百六拾七人

高千四百三拾八石九斗六合九勺貳才

内

内 郷土高

拾五歳ヨリ六拾歳迄五千三百八拾三人

田高五百貳拾四石三升七合九勺

拾五歳以下男千貳百貳拾四人

畠高九百拾四石八斗六升九合貳才

右同女千三百八人

高七千八百貳拾五石貳斗壹合九勺

内 御蔵入高

田高貳千五百七拾壹石壹斗四升四合四勺五才

畠高五千貳百五拾四石五升七合四勺五才

高拾貳石三斗壹升壹合四勺三才

内

田高百三拾五石八斗七升壹合五勺六才

畠高百六拾五石五斗七升六合八勺壹才

畠高百貳拾九石貳升八合八勺四才

郷土并寺院・水手塩屋足輕屋敷

一乘馬六拾貳疋

一仕牛馬三千九百七拾疋

内

駒四百五拾壹疋

駄(女馬ノ通唱)千六百八拾壹疋

男牛三百六拾貳疋

女牛千四百七拾六疋

一船數百八艘

内

三枚帆貳拾貳艘

貳枚帆八拾六艘

一大砲貳挺

内

五百目野戰筒壹挺(新洋式野戰重砲)

七百錢野戰筒壹挺(全上)

一鉄砲貳百九拾三挺(火繩銃)

内

貳百三拾六挺 四匁以上

五百七挺 四匁以下

一鎗貳拾貳本

一鎧貳拾壹領

一陣笠百三拾壹

一半首百五拾七

一御格護塩硝四百七拾七斤(新製)

内

九拾斤

川尻御台場御格護

百三拾貳斤

石垣御台場御格護

貳百五拾五斤

地頭飯屋御格護

一穎娃娃地頭飯屋ヨリ

一開闢神宮迄

壹里九町四拾間(三十六丁一里以下皆全シ)

一川尻古川尻御台場迄 貳里三拾町

一 川尻浦迄	式里七町三拾壹間	但川尻海岸ヨリ沖午未ノ方竹島宛	
一 川尻御藏迄	式里四町貳拾間	一三拾間目	貳尋壹尺
一 川尻古川尻山川境迄	式里三拾貳町	一壹町目	三尋貳尺
一 山川境目迄	壹里三拾町	一五町目	貳拾六尋
一 山川麓迄	四里程	一拾町目	七拾九尋
一 今和泉境迄	壹里六合程	一貳拾町目	百拾八尋壹尺
一 脇遠見番迄	壹里三拾町	一三拾町目	百四拾尋
一 脇浦迄	壹里六町	脇鹽屋下ヨリ沖未申ノ方黒島宛	
一 長崎浦迄	貳拾三町	一三拾間目	四尺
一 馬渡浦迄	壹里八町	一壹町目	壹尋二尺
一 石垣浦迄	壹里貳拾八町	一五町目	五尋貳尺
一 石垣御台場迄	壹里貳拾八町	一拾町目	拾八尋
一 石垣御藏迄	壹里貳拾八町	一貳拾町目	五拾五尋貳尺
一 水成川迄	壹里壹町	一三拾町目	六拾八尋貳尺
一 水成川遠見番所迄	式里八町	麓ノ下海岸ヨリ沖未ノ方黒島宛	
一 大川浦迄	式里貳拾四町	一三拾間目	壹尋四尺
一 知覽門之浦境目迄	式里貳拾五町	一壹町目	貳尋
一 喜入境目迄	三里	一五町目	七尋貳尺
一 知覽境目迄	三里	一拾町目	拾四尋
一 穎娃海岸浅深		一貳拾町目	貳拾五尋貳尺

一三拾町目 三拾九尋

一牧之内村牛馬廻尻海岸ヨリ沖末ノ方黒島宛

一三拾間目 老尋貳尺

一老町目 三尋貳尺

一五町目 七尋貳尺

一拾町目 拾老尋貳尺

一貳拾町目 貳拾尋貳尺

一三拾町目 四拾三尋貳尺

石垣御台場下海岸ヨリ沖午ノ方硫黄島宛

一三拾間目 老尋貳尺

一老町目 老尋四尺

一五町目 七尋貳尺

一拾町目 拾尋四尺

一三拾町目 四拾五尋

一願娃惣廻拾七里七町五拾八間

一東西流五里拾三町四拾九間

一南北横貳里五拾五間

山川・指宿二郷ノ惣廻リ欠ク、蓋誤失ナラン、  
以上記ス所ハ当時調査シタル一部分ニシテ、封内全部ノ調

査ハ、引例軍事農政經濟ノ部ニ詳ナリ、

二九六 齊彬公学識アル者ヲ度外ニ措クノ弊ヲ矯

正

○この文書は、本文第一〇二号文書と同文重複により略す。

二九七 撃剣對抗仕合ヲ催サル

○この文書は、本文第一〇五号文書と同文重複により略す。

二九八 近衛家和歌掛日記鈔 自嘉永六年  
至安政五年

嘉永六癸丑年

正月

二日

一去廿九日御到来、禁中月次御会十二月分写、例之通有

栖川宮江御伝達之事、

九日

一来廿四日 禁中御会始御題被触、 松契春

当時已刻迄御詠進之事

奉行

〔後克〕  
坊城左大弁宰相殿

十二日



一若御所様江右同断被触、

奉行

坊城左大弁宰相殿

一御家月次御題堂上方へ被遣、御門弟御方ハ、

御前ヨリ遣サル、尤一通廻覽ニ相成、御門弟ニ無之方

ハ、一通宛御用部屋へ出ス、

廣橋殿 水無瀬中納言殿 町尻殿 竹屋殿 勘ヶ由

小路殿 豊岡三位殿 日野西殿 綾小路三位殿 裏

松殿 日野殿 櫛笥殿 北小路殿 堤殿 北小路殿

柳原殿

外ニ壬生〔不明〕務、是又御用部屋和歌掛書状ニテ被遣、

其余地下輩旧年ヨリ序之節追々遣サル、

一一條様 有栖川宮 廣幡殿 无上學院様 眞心院様

嘉枝宮様 靈鑑寺宮様同上 峰君様 薩摩殿 中條中

務大輔殿 貞心院様同女中

右御前へ差上、

於秀方 嶋泉院 得降院 御花島 松田伊豫守

右奥向へ相渡ス、

廿八日

一薩州納戸役新納四郎右衛門和歌御入門願參上、原田才

輔同伴申上候処、御許容被成下、晦日午後御入門被仰付、誓状形相渡ス、

但此比依御違例中、御題ハ御全快之上可被下旨被仰

下、 邦正面会

廿九日

一新納四郎右衛門御入門ニ付參上、誓紙差出ス、正教受

取之、吸物・酒被下諸大夫面会、御太刀・馬代銀一枚

献上、当年御題書渡置、

五月

廿日

薩州

一 山田壯右衛門

右伏見通行ニ付伺御機嫌參 殿、掛リ之者面会、且旧

冬ヨリ伺有之候詠草御点济今日返シ被下、并奥向ヨリ

御菓子被下候事、

六月

二日

一金 百疋

御床弘恐悦申上候ニ付献上之、

十月

篠原伊右衛門

十日

薩州

新納四郎右衛門

右歌道御入門後初テ御対面被仰付候ニ付參 殿、於大書院御対面、御口祝被下、

御次掛リ之者面会、御題被下、誓状堅詠草之形被下候筈之処、山田壯右衛門へ被下候通り承知之由、別段不被下、

十二月

十四日

清水成就院隱居忍向

〔安政元年〕  
嘉永七甲寅年

七月

十七日

薩州物奉行

山本孫兵衛

代原田才輔

十五日

清水

成就院忍向

右歌道御入門相願候処、御領掌ニ相成候ニ付參 殿、於御次御側和歌掛面会、御題被下并誓状堅詠草等之形相渡ス、難有旨御礼申上、早速国元へ下シ候趣也、  
廿三日

松平虎壽丸殿抱守

中山次左衛門

代原田才輔

右歌道御入門相願候処、御領掌相成候ニ付參 殿、於

右今日歌道御入門ニ付參殿、使者之間へ通シ掛リ之者出会、誓状堅詠草等受取言上、御添削相濟、於大書院御対面、御口祝被下、復席之上堅詠草諸大夫ヨリ被返、吸物・酒被下候事、明年御月次御題被下、  
右ニ付御菓子代金貳百匹献上、

安政二乙卯歲

三月

八日

一 飛鳥井殿ヨリ御詠草御返上之事、

但若御所様御詠草ハ不帰、依テ後日序之節可申出候

様御沙汰也、

一 清水成就院当任信海歌道御入門之義、過日原田才輔ヲ

以相願候処、内々御聞濟ニ相成、表向願出候様御沙汰

ニ付、其旨原田江申達候事、

九日

一 清水成就院歌道御入門相願參上、掛出會御題相渡、来

十一日巳刻參上之旨申述、

十一日

清水寺

成就院当任信海

右歌道御入門ニ付參殿、使者之間へ通シ掛之者出會、

誓状堅詠草等相受取及言上、御添削相濟、於大書院御

對面御口祝被下、復席之上堅詠草諸大夫ヨリ被返下、

吸物・酒被下、御月次御題被下、

右ニ付御菓子代金貳百匹献上、

廿九日

一 烏丸中納言殿へ 右府殿御所勞ニ付

御引籠ニ相成候間、 禁中御法衆并御当座其外臨時御

用和歌御門弟詠草御点之義御頼被仰遣、御使諸大夫中

御承知之旨御返答被申上、

久我大納言殿

徳大寺大納言殿

萬里小路中納言殿

三條中納言殿

持明院中納言殿

按察前中納言殿

前平中納言殿

左大弁宰相殿

八條三位殿

堀川三位殿

宮内卿殿

三條中將殿

千種侍從殿

前左少弁殿

萬里小路侍從殿

右名前書卷通<sup>奉書四ツ折</sup>紙上包<sup>ニ</sup>烏丸殿へ廻ス、

右拾五ヶ所江御口状 禁中和歌御詠藻御点之義、依

御所勞御引籠ニ相成候ニ付、烏丸中納言殿へ御頼ニ

相成候間、此段被 仰入候事、

但御口状書持參、納言ハ取次方相勤、余ハ青土中

相勤、

五月

廿六日

薩州

稻富轉

代原田才輔

右歌道御入門之義相願候処、被許候ニ付參 殿、於御

次御側和歌掛面会、被許候旨申達御題被下、并誓状豎

詠草等之形相渡ス、御入門日限之義ハ遠方故不仰下、

誓紙豎詠草等来着次第申上候様、其上日限被仰下候趣

申達ス、難有候由御礼申上、早々国表へ通達仕候旨申

上ル、

七月

廿七日

薩州

稻富轉

代原田才輔

右歌道御入門ニ付參 殿、御次通シ掛リ者出会、誓状

豎詠草献上物等受取言上、御点相濟返被下、於全所吸

物・酒被下、献上物挨拶相応申帰ス、当年御題通達有

之様頼置、

御太刀・馬代金 三百匹

別段御着代金 三百匹 献上

九月

十八日

一聖護院末鹿兒嶋伊豫坊大僧都歌道御入門之義、過日原

田才輔ヲ以內願有之処、今日表向願出候様御沙汰ニ付、

何日ニテモ勝手ニ願出候様、原田江向申遣ス、

廿四日

薩州伊豫坊大僧都

篤昌

右歌道御入門ニ付參 殿、於使者之間掛リ出会、誓状

並豎詠草請取、掛リ諸大夫へ渡ス、言上御点相濟、於

大書院御対面御口祝被下、御精進、復席之上吸物・酒

被下、精進、相畢テ豎詠草諸大夫中面会ニテ被返、

但誓文内書損有之候ニ付、今日之処ハ内々含置、明

日書改差上候趣也、題書一通相渡ス、

右ニ付御太刀・馬代金三百疋献上也、

安政三丙辰歲

四月

十三日

一薩摩守殿 詠草被伺、 伊集院太郎右衛門持參、明日

登使者附添參殿之節御返ニ相成候様御返答、

十四日

一薩摩守殿 詠草、伊集院太郎參殿〔右衛門脱カ〕ニ付御返シ相成候

事、

十一月

朔日

薩州家中

赤井直之進

右歌道御入門之義願參殿、被許御題被下、来三日巳刻

參殿可致旨被仰出、誓状并豎詠草之形等被遣、

三日

薩州

赤井直之進

右歌道御入門ニ付參殿、於大書院御对面、御口祝被下、

相濟、諸大夫ヲ以詠草被返下、畢御祝酒被下、万端例

之通、御着代金貳百疋献上、

十二月

十七日

一金貳百疋

一同百疋ツ、

稻富轉

山本孫兵衛

存龍院

右寒中獻上、

廿日

一清水成就院詠草伺、直ニ御返シニ相成、

安政五戊午年

正月

四日

兩御所様江

一来十八日禁中御会始御題被触、当日巳刻迄ニ御詠進之

事縁竹弁春

但シ

若御所様へハ御封中ニテ奉行ヨリ被出候由ニテ參り候事

御奉行 日野右衛門督殿

来廿一日

一内侍所御法楽御題御封中ニテ被触、

御奉行

中山大納言殿

三月

十五日

一薩州山本孫兵衛三四月分御月次詠草伺、則御点相濟返

書書記方江出ス、

廿七日

一伊集院太郎右衛門詠草伺、直様御返シ、

廿八日

一伊集院太郎右衛門・赤井直之進懷紙差上ル、

七月

十七日

一薩州土師庄十郎參殿、同国持寶院日憧壽明歌道御入門

之義願度旨申述、猶此方ヨリ 御返答被仰下趣申達ス、

十八日

一持寶院歌道御入門之義、明十九日勝手ニ本人可願出候

様、土師庄十郎江書面ニテ申達ス、

十九日

知積院末

薩州持寶院日憧壽明

同伴

土師庄十郎

右歌道御入門相願參殿、於使者之間掛リ者出會言上、

御入門被許候ニ付御題被下、來廿一日巳刻參殿候様被

仰下、誓狀豎詠草等形相渡ス、

廿一日

一御昆布代 貳百疋献上

薩州

持寶院法印壽明

右歌道御入門ニ付參殿、於使者之間懸リ者出會、誓狀

豎詠草等請取言上、於大書院御対面、御口祝被下、諸

大夫ヲ以詠草被返下、吸物・酒御月次御題等被下、万

端如例、

但シ臨期御庭拜見相願被許、

〔表紙〕

# 齊彬公史料

市來四郎編  
安政五年

## 目錄

- 幕府英国ヨリ汽船ヲ贖フ
- 洋医術ヲ允ス
- 諸国人別改
- 各封城土戸口調査
- 参考 土州侯三條家へ密書
- 米艦処分諸大名惣登城
- 勅答及ヒ御問条ヲ諸侯ニ示ス
- 齊彬公福井侯ニ与ル御書翰

- 同日再度之御書翰
- 中山正親町外五卿建言
- 水野土佐守養君尽力ノ概況
- 外国処分勅諭
- 外国処分ノ勅旨
- 阿伝奏堀田正睦ニ外夷処分ノ叡旨ヲ達ス
- 川路左衛門尉岩瀬肥後守上京
- 堀田正睦上京
- 松平久之丞木村圖書ヲ長崎ニ遣ス
- 物産繁殖ノ令
- 府内米価高直各藩ニ廻米ヲ令ス
- 米国使節再ヒ出府
- 函館奉行へ達書
- 和蘭甲比丹出府
- 幕府貸付金口入世話人ノ弊ヲ匡ス
- 哲丸公嫡子成ノ達書
- 高嶋喜兵衛辭職
- 和蘭甲比丹拜謁式及ヒ献品
- 琉球人へ銀貨付与ノ達文
- 米国軍艦近日渡来ノ旨布告

尾水二侯及ヒ溜間詰諸侯ヲ登營セシメ勅答書ヲ示ス

上文ニ対シ近衛左大臣口達ノ覺

水戸中納言ヘ勅詔書

中山忠能公墨夷処分上申

正親町三條實愛上書

八條隆祐上書

中院通富上書

橋本實麗上書

野宮定功上書

二九九 幕府英国ヨリ汽船ヲ贖フ

午七月十七日為御詰日松平織部正様・土井能登守様被

成御出仕候処、(寛治、老中、掛川藩志)太田備後守様御渡被成候由ニテ、大御

目付池田播摩守様被成御達候御覚書写寄通、被及御通

達候旨ニテ、能登守様衆ヨリ御用廻状ヲ以テ来ル、

太田備後守殿御渡候御覚書写

御詰衆

覺

近々英吉利ヨリ猷貢ノ蒸気船御請取相成候ニ付、品

川御台場並ニ彼国船々ニテ空砲打放候筈ニ候事、

右之趣、向々へ可被達置候事、

七月(十六日)

三〇〇 洋術ヲ允ス

午七月七日、大岡兵庫頭様・井上河内守様被成御出仕

候処、久世大和守様御渡候由御書付写寄通、脇坂中務

大輔様御渡候由ニテ、山口丹波守様御達被成候、右書

付写河内守様ヨリ御用廻状ヲ以テ来ル、

久世大和守殿御渡、

大目付へ

和蘭医術之儀、先年被 仰出之趣モ有之候へ共、当

時広ク万国之所長ヲ御採用被遊候折柄ニ付、御医師

中モ有志ノ者ハ、和蘭医術兼学致シ候共不苦候、

七月

右之通御医師中へ相逢候間、為心得向々へ可被達候、

三〇一 諸国人別改

午年三月九日為御詰日大岡兵庫頭様・板倉内膳正様被

成御出仕候処、遠山隼人正様被成御達候御書付写寄通、

内膳正様衆ヨリ御用廻状ヲ以テ来ル、



御詰衆

遠山隼人正

当午年諸國人別改之儀ニ付、〔頼賢、大目付〕土岐丹波守ヨリ先達テ

御達申置候処、此度拙者掛リ被<sub>レ</sub>仰付候間、都テ先

達テ御達申候通、御心得拙者方へ可被遣候、以上、

三月

三〇二 各外城土戸口調査午七月

諸郷土家部式万七千四百三十八戸

内

高持跡付(戸主死亡相続人未定ノ通唱)

千貳百九拾一

無高跡付(家祿無所有者ノ通唱)

貳千貳百四十七

合跡付三千五百三十八

右御軍賦取シラへ家部数御城下戸口ハ、別途御手元御用、

安政五年六月廿一日上申ス

三〇三 参考 土州侯三條家へ密書 昨夢紀事抄

四月七日土佐殿ヨリ三條家ニ被遣候御密書写シ相廻ル、〔山内盛信〕

如左、

墨夷一条再三

〔返船カ〕御答実ニ

皇国安危ノ所係ニ御座候、先便ニ奉申上候通、何分只

今我ヨリ事ヲ破候様ニ御座候テハ、所謂無謀ト申モノ

ニテ、此五六年前初テ渡来ノ時ハ、打払勿論ニ候ヘトモ、

方今ハ決シテ左様ニ無之不可討ノ勢ニ御座候、第一

京師御警衛如何ニモ御手薄、万一兵端相開候時ハ、彼

必咽喉ノ処へ輪集可致、咽喉ト申候へハ

京師ニ近キ浪華ト江戸此両処ニ限り申候、其時ハ如何

御処置被為在候哉、夫迎モ可討ノ時ニ御座候ハ子細無

之奉存候、何分前文之通、方今ハ決テ不可討ノ時ト奉

存候、一体戦ハ曲直第一ニテ、縦令主戦ニテモ曲有之

方ハ尤危ク奉存候、諸侯ノ内ニモ暴論仕候者ハ、打払

ナト、喋々申立候者モ有之歟、是ハ書生同様ノ論ニテ、

戦争ニ及候後ノ策ハト推ス時ハ茫乎不得答、如此ハ国

家ノ大事ニ取候テハ無謀ニ御座候、且海内過半不可討

ノ勢ト危疑仕候、兵ヲ以テ無謀ノ戦ヲ仕候ハ果卵ヨリ

モ危ク奉存候、自昔一時ノ積激ニヨリ事ヲ誤候例和漢

不少、此度迎モ摺紳ノ御方九十余輩連署ニテ御上書等

有之、何分人氣不靜趣恐怖ノ至、右等ハ勿論国忠ヲ被  
存候テノ事ニモ御座候半、乍併幾重ニモ御思慮被為在  
度奉存候、ケ様ニ申上候ヘハ、イツ迄モ洋夷ニ屈膝ト  
思召候ト奉存候、僕ナトノ同志決テ左様ニ無之、唯時  
ノ不可然ヲ恐レ申候、因テ献策仕度事モ御座候故、後  
便早々奉申上候、岩瀬昨日着、從是三家初建白被命候  
事ト奉存候、

首夏五日

大君ノ国安カレトオモフヨリヤスカラスモノハ百コ  
、ロ哉、

### 三〇四 米艦処分諸大名惣登場

(頭出)各藩へ意見上申ラ命ス、○昨勢紀事参照  
將軍家ハ四月廿五日ヲ以テ在府ノ諸侯ヲ登營セシメ、御  
黒書院ニ於テ一同ヘ達セラレタル趣ニハ、

三〇四の一

亞米利加使節申立候趣ニ付テハ、是迄申聞候通容易ナ  
ラサル儀ニテ、一統ノ存寄モ承リ評議致シ、開港交易  
今時形勢不得止事京都ヘ相伺候処、深被為惱

叡慮今一応熟議可致旨ニ有之候、於自分は迄以権道定  
候儀ニテ、専ラ武備ヲ整ヒ全勝願候儀ニ有之、然ル処  
叡慮モ御勇断有之、自分ニ於テ不肖ナカラ 祖宗ノ業

ヲ継キ、征夷ノ職ヲ猥シ、一日モ彼等ノ侮ヲ受候テハ  
天下ヘ対シ不相濟、且勝敗ハ度外ノ事ニテ、彼是懸念  
不致及断絶候儀ニ決心致シ候、左候ヘハ参リ居候使節  
ヘ申渡、且次第ニ依リ、文永年中蒙古ヲ誅候先議ニ任  
セ重罪ニ為行可申、然ル上ハ今日ヨリ兵革ノ世ト相心  
得、自分モ薪ニ伏シ胆ヲ嘗候事議ニ有之、銘々尽心中  
共ニ

皇国ヲ守護可被致、且今日ニモ夷賊トモ推參候ハ、  
神国ノ武威ヲ外国ヘ輝シ候処專一ニ可有之、右ニ付テ  
ハ天下ノ為ニテ、銘々存寄アラハ前ニ於テ(將軍ヘ直接)  
無残所可申出候、

夫ヨリ御老中ハ三ヶ条ノ 勅問ヲ示シテ、左ノ如ク達シ  
タリ、

三〇四の二

先年神奈川並ニ下田ニ於テ取結ヒ候アメリカカ条約ノ趣  
ハ、具ニ

京都ヘ被仰進候ヘトモ、此儀ハ不容易御変革ニ付、存  
(度脱カ)  
(被遊脱カ)  
寄ヲモ御尋ネ、衆議御参考ノ上ニ、条約為御取替ノ方  
ニ御決定、別段以御使  
叡慮御伺ニ相成候処、別紙ノ通

勅答被仰付候、素ヨリ戦争ノ

叡慮ハ不被<sup>(為脱カ)</sup>在候趣ニハ候ヘトモ、方今万国形勢一変ノ

折柄、処置<sup>(御脱カ)</sup>ノ次第ニ寄候テハ忽仇讎ノ姿ニ相成リ、御

全国ノ大事ニ及ヒ国家ノ御為不相成、可奉休

宸襟期モ被為在間敷候間、先般

京都へ被仰立候外御取扱無之ト思召候、且今度衆議被

聞召トノ儀ハ、既ニ昨年来各存寄御尋ノ上ノ儀ニ候ヘ

トモ、  
勅諭ノ趣モ有之候間、猶篤<sup>(致脱カ)</sup>ト勘弁各存慮ノ趣早々可被

申立候事、

(大日本古文書(幕末外国關係文書)にて校訂)

三〇五 勅答及ヒ御問条ヲ諸侯ニ示ス

四月廿五日京師ノ

勅答并ニ問目ヲ諸侯ニ示ス、初堀田ノ還ルヤ加州(松平

加賀守)謀テ

勅答ヲ秘セント欲ス、堀田備中キカス、遂ニ之ヲ示スニ

決ス(世或ハ井伊之ヲ示スニ決スト云フモノハ非ナリ)

〇この文書は、本文第三〇四号文書の二と同文重複により略す。

次ニハルリスト談判ノ趣ヲ頒示ス、是ニ於テ諸大名其意

見ヲ上ル、

此時水野筑後守ノ論ニ曰、我ヨリイカ様ニ和ヲ求メ親

ヲ好ムトモ、先方ニテ不義不法ヲ仕懸不得已ニ於テハ

不戦シテハ叶フマシク、彼腥夷ノ尻ヲナメテ和ヲ極メ、

親ヲ尽シ誠実ヲ本トシ、道理ヲ推テ心身ノアラン限り

論弁イタシ候ヘハ、条約調印ノ期ヲ延候ハ不及申、条

約<sup>(約カ)</sup>中ノ事モ随分引直シノト、クマシキニモ無之、シカ

ルニ幕府ニテ英断、勅諭ニ関セスノ論モ有之、亞人ハ

京地ノ模様ヲキ、大ニ当惑ノ体ニテ蘭人旅宿へ罷越

候由、其後蘭人ヨリ亞人ノ仮条約ハ引直シ方モ出来可

申、元ヨリ亞人ノ本心ハ、必カクト申スニハ有マシク

ト被察、モシ我ニ命セラレハト申居候由、先只今ニテ

ハ断然ト勅旨ヲ諸侯ニ尋ネラレ肝要ニ可有之トアリ、

是当時幕府有司中傑出者ノ論旨ヲ見ルニ足レリ、

此時ニアタリテハ堀田ノ權ハ稍ウスク、加州井伊ヲ負テ

事ヲ決ス、一橋ノ擁立ヲ謀ル者土岐<sup>(頼宣)</sup>・鶴殿<sup>(長親)</sup>・岩瀬<sup>(忠茂)</sup>等ヲ名

ツケテ廢立党トナシ、不忠ニシテ人臣ノ義ヲシラサル者

トナス、

土岐丹州此日或人ニカタリテ、時勢モシハシノ間ニカ

クモ交ルモノカ、備中殿モ此頃ハ面色モナキ迄ニ相成、  
伊賀殿殊ニ横柄ヲフルハレ、余輩ヲハ廢立ヲハカル不  
忠者ト辱シメラル、事口惜次第ナリ、一橋公ヲ西城へ  
ト申ス事ハ、慎席(家慶)ノ早ク心付レテ其御内意ニア  
リシヲ、本郷丹州カ御時節アルベキ事デ、只今仰出サ  
レテハ不宜ヤト申シ事ハ、余モ正シク伺知タル事ナ  
リ、橋公賢明ナレハ旁天下ノ為ニ忠ヲ尽シテ申上タル  
ヲ、却テ不忠者ノ様ニトリナサル、ハ如何ソヤ云々、  
アナ無念ヤトテ男泣キニナカレタリトソ、

海防掛リノ論又行ワレス、備中独リ一橋擁立ノ議ヲ取ル  
ノミ、孤立無援ノ勢ナリ、然レトモ將軍ハ備中ノ論ヲキ、  
テ、天下ノ御為トアレハ異存ナシトイハレタリト云、五  
月二日老中連署書ヲハルリスニ与フ、

○この文書は、本文第一八八号文書中の安政五年五月二日付幕府  
老中連署書翰と同文重複により略す。

六日ハルリスヲ堀田邸ニ召ス、將軍ノ大統領ニ答ル書ヲ  
ハルリスニ授ク七日ハルリス、下田ニ帰ル、此日大原三位大坂ニ微行シ、  
大坂城代土屋采女正ノ用人大久保要ヲ見テ国事ヲ論ス、  
(眞直、土浦藩主)  
要論シテ京ニ帰ラシム、事露ル、特旨其罪ヲ問ハス、七日

大目付土岐丹波守ハ大番頭ニ転シ、川路左衛門尉ハ西丸  
留守居ニ徙ル、皆廢立党ヲ以テ井伊ノ為ニ疎外セラル、  
也、堀田ノ權益々屈ス、此日將軍井伊ヲ召シテ紀州ヲ養  
テ西城トセン事ヲ托ス、且堀田ヲ退ケシム、是奥向ノ意  
ニ出ル也四月二十六日井伊、始テ將軍ニ謁ス、時ニ諸大名ノ意見ヲ上ル者多シ  
(徳川慶喜、名古屋藩主)  
其尾州侯ノ書ニ曰ク、

墨夷条約ノ義ニ付御懇ノ台命ヲ蒙リ謹テ奉拝承候、且  
勅答御書取ヲ初メ具サニ拝見被仰付、尚篤ト勸弁、存  
慮ノ趣早々申上候様御尋ニ御座候ヘトモ、追々建白致  
置候義、此上存慮可申上様モ無御座候、乍去於公辺  
深ク御心配之折柄、親藩之不肖寤寐難安ハ素ヨリノ儀  
ニ付、猶又致熟処候処、今般(是カ、母カ)  
勅諭ノ趣ハ乍恐至要ノ事ト奉存候、左候ヘハ右ノ御主  
意ニ御基ツキ被遊、  
(重カ、御脱カ)

朝廷御尊崇公武御合体相成候ハ、天下ノ人心一和イ  
タシ、永世御安全  
皇国御保護ノ筋カト奉存候、此旨宜シク被達上聞候様  
存候、以上、

五月朔日

尾張中納言

(大日本古文書纂末外國關係文書にて校訂)

三〇六 齊彬公福井侯ニ与ル御書翰

仲春廿日ノ尊書、季春指宿旅亭へ相達謹テ拜見仕候、先以愈御清榮奉賀寿候、扱ハ度々閣老へモ御出ニテ御建白ノ由、扱々御誠忠奉感心候、極密被仰下候儀委細致拝承候、別紙申上候通ノ訳ニテ尊慮ノ如ク近臣ト後宮(當中大奥ノ通唱)不好故悪様ニ申上候趣、台慮モ同断ノ事ト奉存候間、此上ハ手強ク諸大名ヨリ申立候カ、又ハ嚴重ノ

勅旨無之候テハ何分無覚束奉存候、上閣(上田侯松平伊賀守)申分ノ通ニ相成候へハ至極ニ候へトモ、後宮ノ御様子ニテハ甚掛念ニ存候間、御手拔無之様奉祈候、本壽院様ノ処ニ、天下ノ安危ニ掛リ候段御恐怖御座候様被仰上可然事ト奉存候、

一本郷御守要(御守殿トモ唱フ)ハ、随分御英断有之候様子(御脱カ)御座候間、以御手寄被仰入可然ト奉存候、番頭(御守殿付ノ番頭)鈴木庄五郎ト申者随分忠志ニ候間、其手筋ニテモ可然ト奉存候、御勘考ノ為ニ申上置候(鈴木ハ加州家御守殿付ノ幕吏ナリシト云)

一仙臺(伊達家)ノ事龍土(伊達宗城公)へ御相談可然ト奉存候、

一水老公ノ評判ノ事実ニ可怪事、誰カ色々申人有之ト存候、シカシ旧冬川路(左衛門尉)・岩瀬(肥後守)等参上ノ節ノ御処置等モ余リ過候様ニ奉存候、夫故色々雑説有之ト存候間、以後右様ノ儀無之様奉存候事、

一且水藩御調ノ処、鶴民(鶴殿民部少輔)申候如キ事ニハ無之候間、兩通後宮へ差出候ヨシ御尤ニ奉存候、小子ニモ只々モ左様ノ御心底ハ無之旨、能々本壽院様へモ御咄御座候様申上候、且鶴民ノ事如何ノ人物ト被思召候哉、此人小子ハ天氣見ノ心底ト存申候、岡了允(醫師岡了允院)ノ親類ニ御座候、能々御勘考專一ト奉存候、

一尾州御答書被下候、如命御差急不被成御様子ニ被存候間、御参府ノ上貴君龍土ヨリ嚴重ニ被仰談可然、先年ノ事ニ御恐レト存候へトモ、此節ハ阿闍(阿部正弘)程ノ力量ノ閣老ハ無之上一体ニ弱ミ付候間、御掛念無之被仰上可然上奉存候、先日貴客旁愚存不殘申上候、御考ノ為ニ相成候ハ、大慶奉存候、

一京ニテ只今ニ相成候テ、無謀之打払(無謀ノ攘夷、公ノ御定論是ナリ)被仰出候テハ、猶更後年御恥辱可相増、此事甚掛念奉存候、何卒無事ニ堀田ノ帰府御座候カント

奉存候、

〔別紙認置候処貴書相達候間不取敢申上候、〕乱筆具々御仁免希申候、恐惶謹言、

四月三日

齊彬

天下柱石越前明公閣下

猶々、当地余程暖気七十五六度ニ相成申候、入湯（指宿二月田御湯治ヲ云）余程相応仕、持病モ忘レ候程ニ相成大慶仕候、

公ニモ時気御自愛專一奉祈候、以上、

〔昨券紀事日本史繪協會編にて校正〕

三〇七 同日再度ノ御書翰

拜呈仕候、愈御安康奉恐寿候、然ハ其後御不沙汰恐入奉存候、其御地如何御消光相成候哉伺度奉存候、扱例ノ西城ノ一条（將軍継嗣）御模様、如何ニ候哉伺度奉存候、此間別紙之趣被仰下局ヨリモ申来候間、極内々御心得ニ申上候、此上ハ今一段手強ニ被仰立候カ、又ハ仙臺始同志ノ方不殘申立候カ、又ハ以權道志印（奥御右筆志賀金八郎）へ取入彼者ヨリ能申上込ミ候カ、三ノ内ト奉存候間具々御勘考專一奉存候、別紙（當中局ノ文、後葉ニ記ス参照）難申上事ニ奉存トモ、天下ノ御一大事

ニ候間、内々写シ取り候テ差上候、

一水老公ヲ反逆ノ様被 思召候儀、御側向之内不忠ノ佞物（結城虎壽等ノ輩）有之ト奉存候間、夫等モ能々御勘考專一ニ奉存候、本印（本壽院）へハ此節猶又加様々々ト申上置候、以後様子相知候ハ、又々可申上候、当年

貴君阿州（阿波公）共ニ御発駕（御帰国ヲ云）ニ候哉、此段モ相伺申候、

一伝聞ノ趣ニテハ巫奴ノ事

逆鱗ノ段恐入候（宸翰参看）事ト奉存候、乍然當時見留無之無謀ノ御処置被為在候テハ、益

皇国ノ御恥辱可相増ト愚考仕候、様子拜承仕度奉存候、

一去ル十五日（三月）領分山川ト申処へ、蒸氣船日本丸（

後觀光丸ト唱）乗組勝麟太郎始百十人程乗組蘭人船將始十八人ニテ参候間、翌日罷

越シ致見物候、蒸氣ノ仕掛ハ誠ニ見事ニテ、承候ヨリ

宜敷奉存候、十六・十七ト城下へ参リ、十八日又々山川へ参リ、十九日五ツ時長崎へ向キ致出帆候、山川ヨ

リ城下迄十三里ノ海上ヲ、一時半（今ノ三時間）ニテ参

リ申候、珍敷見物仕候、城下ニテモ蘭人見候者多ク種

々ニ評判致候、小子ニハ指宿湯治中ユヘ山川ニテ見物

仕候、台場等ノ論種々承候、随分考ニ相成候事モ多ク

御座候、ストームマンネ役者ハ不殘日本人ニテ出来候、帆前ノ事未タ十分ニ出来兼候ト勝ヨリ承リ申候、下關ヨリ山川迄一昼一夜ニテ参リ申候、

一妹(土州ニ嫁スル知鏡院殿)ヨリ申越候ニハ、土佐守(容堂公)余程手強ク種々申立候ヨシ(前記参照)、トテモ被行兼候事申候テモ詮無キ事ニ奉存候、何卒御心添可被下候、

一江都ニアケント差置候事ト邪教寺二ヶ条ハ、何卒相止度事御賢考御座候ハ、御建白可然奉存候、

先ハ久々御不音申上候旁要用ノ分奉申上候、春以来色々国政モ取込ミ大御不沙汰申上、何トモ恐入奉存候、恐惶謹言、

四月三日

齊彬

越前賢公閣下

猶々、御自愛專一奉存候、以上、  
ライフル筒漸々出来仕候、以上、

ライフル銃出来云々、曩ニ幕府秘蔵ノ銃木型ヲ得ラレ、集成館ニ於テ模造セラレタリ、御道中御備用五十挺製造セラレタルヲ云フ、

○山川港ニ於テ御乗入云々、第 卷ニ詳記ス、参照スベシ、

三〇八 中山・正親町外五卿建言  
三月七日

一夷賊申立ノ一件誠以

神国ノ重大ノ変異ニ付、愚昧ノ者トモ恐入候ヘトモ先日両度書取ヲ以テ申上候、右追々御評定ノ事ト存候ヘトモ、実以テ昼夜憂苦寢食候間亦々令言上候、

一天照皇大神宮以来赫々タル

神国、当代ニテ蛮夷ノ国ト伍ヲ為シ候テハ

神国ノ汚穢御瑕瑾、被奉対

皇祖何共恐懼歎息ノ至ニテ、近来連々天災偏ニ

神慮ニ不被為叶ト奉存候、

一堂々タル

皇国ヲシテ蛮夷ノ猛威ニ驚嚇シ、彼ノ驕傲不礼ヲ捨置、申条ニ随從シ礼待奔走ニ暇ナシ、天下万世ニ恥辱ヲ遺シ、万王一系ノ

神国ヲ一漁落一販叢ニ斉シク心得候征夷家ノ処置、如何成狂妄徒ヲノ商量ニ候哉、今度

叡慮伺ノ為面々上京ニ付候御沙汰ノ趣ニモ不応、一切意味難解、都御同意ノ趣ヲ以テ列国ノ大名以下万民ヲ

押候積ニ候哉ト被存候ヘトモ、真実御同意〔被脱カ〕不為在儀ハ何レモ不貫徹、却テ關東ノ為メ衆心破候基哉ト不審致候、

一墨夷一使者〔スラ脱カ〕応接強情〔更カ〕不容易ノ由、尚又心苦仕候、子細ハ此上諸蛮追々来集シ、表〔ハ脱カ〕ニ互市利潤〔ラカ〕ノ説、実ハ所欲ヲ取極、拒メハ大砲軍艦ヲ以テ恐嚇セシムルノ夷情、素ヨリ日本ヲ并吞シ國人ヲ籠絡ノ結構ニテ、追々姦謀遠慮〔ニ脱カ〕ヲ以テ夷族処々ニ散居シ、好言利欲ヲ以テ吾國人ヲ誘ヒ懐ケ、彼方ノ教法ニ從ハシメ能ク人氣ヲ察シ、地利要害ヲ知、方〔タ脱カ〕ニ策居〔巢窟カ〕ヲ構置、終ニハ難許難題ヲ設ケ兵端ヲ開キ

皇國ヲ押領スル時ニ至リ何ヲ以テ敵対ス可キヤ、縦ヒ兵端不開トモ右ノ通ニテハ、所謂不奪不蹙ノ夷情、広大ノ猛威ヲ張リ随意ニ

皇國ヲ脅制スル時ハ、不戦シテ降参ノ場ニ至ル可シ、神國ニ生レ匹夫ト雖トモ口惜次第ニ無之哉、況ヤ從來大祿ヲ領スル諸藩至誠ノ赤心承リ度事ニ候、且右ノ場合ニ及候節ハ他ノ地ニ乘輿〔乘輿ヲ向レノ地ニ大〕ヲ奉安候哉、大樹公以下致条約候輩ハ何レノ地ニ遁レ被得安居候心得候哉、關東ヲ始シメ諸大名ノ見込詳ニ被聞取候上、御返書ノ御沙

次御肝要ニ存上候、

右ハ毎々恐入候ヘトモ為國家候間、不顧忌諱言上仕候、

〔三月七日〕

中山 大納言忠能

正親町三條中納言實愛

正親町中納言實徳

八條 宰相隆裕〔也〕

中院宰相中将通富

橋本宰相中将實麗

野々宮宰相中将定功〔行カ〕

〔大日本古文書再纂末外國關係文書にて校訂〕

### 三〇九 水野土佐守養君尽力ノ概況

三月二十四日

西城ノ事、急使ヲ以テ關東ニ達スヘキヲ命ス、時ニ水野土佐ノ意ヲ以テ長野義言等周旋、紀州ヲ立ルノ論頻リ〔九条尚忠〕起ル、関白殿下又之ニ惑フ、矯勅年長英傑人聖等ノ字ヲ

除ク、曰、

急務多端之時節、養君御治定西丸御守護政務御扶助ニ相成候ハ、御ニギヤカニテ御宜被思召候、今日幸之儀可申入旨関白殿被命候事、



三二〇 外国処分勅諭

問目数条アリ、

万世長久之良策之事、

諸夷取計方後患無之様可取計事、

墨夷申立ハ御国体ニ拘リ候間、以叡慮之趣御国威相立

候様被遊度思召候事、

下田条約之外難被成御許容、諸藩屏防禦之計略被聞召

度候事、

三二一 外国処分ノ勅旨

三月二十五日

又命アリ、

墨夷申立候仮条約之趣迎モ難被成御許容、如何様ニモ

取鎮メ申断リ、其上ニモ承服不仕無礼不敬之所為モ候

ハ、無是非次第、可及戰爭義ト被思召候事、

三二二 両伝奏堀田正睦ニ外夷処分ノ叡旨ヲ達ス

三月二十六日

伝奏又堀田ノ旅館ニ往キ、左ノ命ヲ伝フ、

去ル二十二日書取之趣及言上候、(如脱カ)今度之条約迎モ御許

容難被遊思召候、衆議中自然事端指繼候節ハ、先件之

御趣意ヲ含精々取鎮断判之上、彼ヨリ可及異変候節ハ

無是非儀ト被思召候間、右叡慮之旨相立候様頼思召候

間、宜御指舎御取計可有之事、

衆議言上之上叡慮猶於難被決義ハ、伊勢神宮神慮可被

伺定義ニ可有之ト之事、

(大日本古史書(卷末外国關係文書)にて校正)

三二三 川路左衛門尉・岩瀬肥後守上京

正月九日

御勘定奉行

川路左衛門尉

御目付

岩瀬肥後守

右備中守京都へ為 御使被遣候ニ付、差添可被遣候間

可致用意旨、於新部屋前溜伊賀守申渡候、遠藤但馬守

侍座

奥御右筆組頭

原 彌十郎

両番格

奥御右筆

立田錄助

二月五日

右断所為御用京都へ可被遣候間、可致用意、旨於奧相濟、

伊賀守殿御渡、

御目付へ

三二四 堀田正睦上京

松平久之丞

(正月)  
同月十日

木村圖書 江

(堀田正睦)  
備中守殿御渡、明後十二日触、

大目付へ

備中守儀、今度京都へ為 御使被差遣候処、御用柄且  
急速出立之事故、簡易質素ヲ主ト致シ、諸事格外ニ省  
略致シ候間、道中筋其外ニ於テモ、是迄老中通行之節  
取扱振之先格ニ不拘、万端格外手輕ニ取計、休泊相成  
候場所其外道橋等ニ至迄一切取繕ニ不及、馳走ケ間敷  
儀ハ猶更無用ニ致シ、宿駅其外都テ平日之通相心得、  
諸事無益之手数不相懸候様取計可申候、  
右之通、通行道筋へ敲敷可被申付候、  
右之通、道中奉行・御勘定奉行へ相達候間、東海道筋  
々領分知行有之面々へ可被達候、

(十日)  
正月

三一五 松平久之丞・木村圖書ヲ長崎ニ遣ス

長崎表之儀、外国貿易御取開其外追々御改革ノ折柄ニ  
ハ候へトモ、当時伝習為御用木村圖書在勤(後芥舟、当  
時御目付職ヲ以テ)罷在候ニ付、立合御用之方モ圖書へ  
兼勤被仰付、松平久之丞代リノ者不被差遣候間、久之  
丞儀ハ不及交替、御用向引送帰府ノ積可被相心得候、  
尤支配向ノ儀ハ代リノ者可被差遣候間、右ノ者共到着  
致シ候ハ、當時在勤ノ支配向召連可有帰參候、且又  
立合御用ノ儀兼勤相成候ニ付、是迄仕来ノ通、瓊末ノ  
儀迄立合候様ニテハ、双方共行届申間敷候間、勤方相  
改格別要領ノ儀而已立合候積相心得、其余瓊末ノ儀ハ  
立合ニ不及、前々御目付在勤無之節ノ振合ニ取計、御  
取締向ハ不相弛様可取計旨、長崎奉行へモ相達候間、  
得其意委細可被申談候、  
右之通相達候間可被得其意候、

三二六 物産繁殖ノ令

二月二十日

伊賀守殿御渡、来ル廿三日触、

大目付へ

蠟・染(係カ)・紙・茶之類、其土地ニ応シ是迄モ作り出シ候  
へトモ、近来世上遣方モ多ク高価(脆カ)ニ相成、且外国ニテ  
モ相望候由ニ候得バ、此後交易之内江御渡ニモ可(係カ)相成候間  
櫛・染・楮・ミツマタ・茶之類、可成丈本畑之妨不相  
成様、手余荒地・原野・空地等不毛之地へ、地味ニ応  
シ候本品ヲ植付多分ニ作り出シ、国々生産相増候様厚  
ク世話可致候、

右之趣、御料ハ御代官、私領ハ領主・地頭・寺社領  
共不洩様可被相触候、

右之通可被相触候、

別紙之通従公義被仰渡候条、不洩様可致通達候、

二月(二十日)

御家老座印

(国史大系(統徳川実紀)にて補訂)

三二七 府内米価高直各藩ニ廻米ヲ令ス

二月二十四日

大和守殿御渡、来ル二十七日触、

大目付へ

此節江戸表米価高直之趣相聞候間、米穀融通ノ為メ追  
テ及沙汰候迄、去年違作ノ場所、或ハ運送不便利ノ土  
地ハ格別、左モ無之分ハ諸家中扶持丈ハ銘々領分知行  
所ヨリ相廻リ、江戸表ニテ買入候儀ハ可成丈勘弁致シ  
取計、尤扶持米余ニ相廻シ、市中へ相払候儀ハ不苦候、  
右之通、万石以上以下共領分知行所有之面々へ、不洩  
様可被相触候、

二月

右之通可被相触候、

右同断、

御家老座印

大目付へ

此節江戸表米価高直ニ相成、末々及難儀候趣ニ相聞、  
米穀融通ノ為メニ候間、於在々米穀所持致シ候者ハ、  
早々江戸表へ相廻シ売捌候様可致候、

右之通、御料・私領・寺社共不洩様可被相触候、

二月

三一八 米国使節再ヒ出府

三月六日

伊賀守殿御渡、即日触、

覺

亞墨利加使節、先達テ下田表へ中帰致候処、猶又觀光丸（蒸氣船初メ咸臨丸ト唱、十二月廿四日改唱ス）御拝借、

昨五日再ヒ出府致シ候、此段為心得向々へ可被達候事、

三月六日

三一九 函館奉行へ達書

三月八日

箱館奉行

竹内下野守

右近々発足ニ付、於御黒書院溜老中列座、奉書証文等大和守相渡候、

三二〇 和蘭甲比丹出府

三月十一日

伊賀守殿御渡、即日触、

大目付へ

阿蘭陀甲比丹為参上昨十日着致シ候、右甲比丹へ領事館之官職モ有之候儀ニ付、旁相当之御取扱有之、前々

ヨリノ御扱振御改相成候儀モ候間、此段為心得相達可然向々へ可被達置候事、

三月十一日

三二一 幕府貸付金口入世話人ノ弊ヲ匡ス

三月二十一日

伊賀守殿御渡、来ル廿四日触、

大目付へ

御貸附金ノ儀ニ付口入世話人扱ト唱、如何之所行ニ及候者有之ニ付、先達テ相触候趣モ有之候処、兎角掛役人へ手寄有之趣ニテ、口入世話可致旨品能申偽謝礼金等貪候族、今以有之哉ノ趣ニ相聞不埒之事ニ候、公儀御貸附ノ儀、口入等ヲ以テ取扱候事一切無之候間、自今右様之者於有之ハ、其者留置、町奉行・御勘定奉行へ可被相届候、若右体之者頼候向相知レ候ニ於テハ、御沙汰ノ次第モ可有之候間、家来ノ者へモ精々可被申付候、

右之趣向々へ可被相触候、

三月

三三二 哲丸公嫡子成ノ達書

松平薩摩守

名代 島津淡路守忠寛

妾服之男子

幼少 同 哲丸

願之通哲丸儀嫡子被仰付候、

右於御白書院縁頼老中列座、大和守申渡之、

公ハ去年安政四年 九月九日鹿兒島城ニ御誕生、生母伊集院氏(須摩子)、

本書ノ如ク御嫡子御届ニ及ハレタリ(三カ) (三月二十七日)

三三三 高島喜兵衛辞職

御書院番

一 柳播磨守組与頭

時服三

高島喜兵衛旧名四郎大夫

名代 内藤甚三郎

右老衰ニ付願之通御役御免、且年寄候迄相勤候ニ付被下旨、於御右筆部屋縁頼老中列座、大和守申渡候、若年寄侍座、

三三四 和蘭甲比丹拜謁式及ヒ献品

四月朔日

領事官 御目見之節口上和解

両国旧来之固ニ先般幸広ク相成候テ、今般於日本和蘭国王殿下目代之者 大君殿下へ拜礼被免候儀、国王承之候ハ、大悦可仕候、双方共御一親厚ク、必ス不弛(絶力)様仕度奉存候、

四月四日

阿蘭陀人献上物

- 一 猩々緋 一端
- 一 黒大羅紗 二端
- 一 白大羅紗 一端
- 一 黄大羅紗 一端
- 一 紫大羅紗 一端
- 一 藍鼠色大羅紗 一端
- 一 霜降大羅紗 一端
- 一 緋フラタ 一端
- 一 黒フラタ 一端
- 一 藍鼠色フラタ 一端

一 花色フラタ 一端

一 緋コロフクリン 一端

一 黒コロフクリン 一端

一 花色コロフクリン 一端

一 新織奥島(島金巾ノ通唱) 廿五端

一 一尺長上更紗 二拾端

一 一弁柄更紗 二拾端

一 更紗 十九端

以上

領事官

イ、ハ、ドンクル、キユルシユス

大通詞

猶林量一郎

小通詞

稻部禎次郎

右献上物長崎奉行支配調役持参ニ付、頼之者請取直ニ

御納戸へ相納、拜領物時服三〔上脱心之カ〕相渡候、

但大通詞へ白銀五枚被下候、

〔大日本古文書 幕末外国關係文書にて校訂〕

三三五 琉球人へ銀貨付与ノ達文

四月六日

大和守殿御渡

土岐丹波守 江

遠山隼人正 江

〔頭注〕琉球要書參看

琉球人へ相贈候銀子之儀ニ付、銀座へ申渡候趣有之候

間、銀子相贈候面々へ相談候様可被達候、

三三六 米国軍艦近日渡来ノ旨布告

四月七日

伊賀守殿御渡、九日触、

大目付

御目付 江

亞墨利加使節用向有之、近々下田港へ自国軍艦渡来可

致由ニ付、其節使節同港迄出張用向可相弁処、未タ此

地御用済ニモ不相成、病後長途往復之船路及難儀候間、

下田港へ軍艦渡来致候ハ、於近海對話致度旨相願候

ニ付、浦賀ヨリ武州本牧辺迄之内へ呼寄碇泊為致、下

田奉行支配向之者等附添右場所へ罷越、夫々用向為相

弁候積、尤用弁次第軍艦へ直ニ出帆致シ、使節ハ猶蕃

書調所旅館へ立戻候筈ニ候、右海岸地先領分知行有之面々相心得居可被申候、右ニ付別段固人数等差出候ニ不及候、右之通可被相触候、

四月

三三七 尾・水二侯及ヒ溜間詰諸侯ヲ登營セシメ

勅答書ヲ示ス

四月二十五日

昨日御達ニ付水戸殿・尾張殿始、溜詰・同格下之休息所之面々・国持・庶流・御譜代大名四五人・外様大名四五人、四時登城、水戸殿・尾張殿御部屋へ掃部頭并老中罷出、於御座間御対顔可被遊旨、紀伊守申上候、

御書院溜

溜 詰

同席

櫻之間

- 〔忠雅、長岡藩主〕 牧野備前守
- 〔兼全、西尾藩主〕 松平和泉守
- 〔慶永、福井藩主〕 松平越前守
- 〔慶倫、津山藩主〕 松平三河守

右今日於御座間 御目見可被 仰付旨、掃部頭老中列座同人申達候、

〔慶應、白石藩主〕 松平兵部大輔

三三八 上文ニ対シ近衛左大臣口達ノ覺

〔頭注〕宸機甲第 丹参看、○近衛家奥表日記参照  
墨夷等調印ノ儀ニ付被惱

叡慮先達テ

勅詔モ被為在候処、調判致候段益被惱

宸襟候、実以テ徳川家ノミナラス天下ノ御一大事ニ有之、是迄水戸・尾張・越前等ニテ精忠被尽候段へ、弥御満足ニ被 思召候、然処違

勅之儀不容易被

思召候ニ付、此度ノ

叡慮之趣屹度相立、徳川家ノ御補助有之度、雖為慎中無御斟酌厚被為尽奉安

宸襟候様可被致旨被仰含候事、

〔水戸藩史料(吉川弘文館)掲載史料にて校訂〕

三二九 水戸中納言勅詔書

安政五年(紀元二千五百十八年) 四月廿三日、井伊掃部頭大老トナリテヨリ幕政ヲ専ラニセラレ、六月二

十二日專断ヲ以テ米國其他ノ条約ニ調印シ、京都へ

ハ宿次奉書ニテ上奏シ、翌廿三日堀田備中守・松平

伊賀守ノ閣老ヲ罷メ、ソノ罪ヲ彼ニ老ニ帰ス、時ニ

將軍ハ重病事ヲ弁セス、同廿五日（徳川慶喜）紀州侯（年甫十三）ヲ世子

トシ直チニ本丸へ遷シ、七月四日ニハ將軍薨去、同（八）

八日発表、同六日將軍ノ命ヲ矯メ、一橋・尾張・水戸

ヲハシメ、越前・土州・肥前・宇和島其他正義ノ諸侯ヲ

謹慎隠居セシメタル等其變一ナラス、深ク

叡慮ヲ惱セラレ、八月八日 勅詔ヲ水戸中納言慶篤

ニ降シ賜ヒタリシニ、當時是ヲ密勅又ハ内勅ト称シ、

世人刮目シテ動靜ノ如何ヲ窺ヒ居タリ、水戸ハ内訌

ノ為ニ之ヲ諸藩ニ廻達スルノ力ナク、幕吏ハ頻リニ

之ヲ防クノ策ヲ運ラシ、九月三日ニ至リ閣老間部下

總守上京シテ、終ニ戊午ノ大獄ヲ興シ、此ヲ以テ奇貨

置クヘシトシ 勅詔奉還ノ事ヲ以テ水戸ニ迫リタリ

先般墨夷仮条約無余儀次第ニテ、於神奈川調印使節へ

被渡候儀、猶又委細間部下總守上京被及言上之趣候へ

トモ、先達テ

勅答諸大名衆議被

聞召度被 仰出候詮モ無之、誠

皇國重大之儀調印之後言上、大樹公

叡慮御伺之御趣意モ不相立、尤

勅答之御次第ニ相背輕卒之取計、大樹公賢明之処有

司心得如何ト御不審被 思召候、右様ノ次第ニテハ蛮

夷ノ儀ハ暫ク差置、方今御国内ノ治乱如何ト更ニ深く

被惱

叡慮候、何卒公武御実情ヲ被尽御合体永久安全之様ニ

ト偏被 思召候、三家或ハ大老上京被 仰出候処、水

戸・尾張兩家慎中之趣被 聞食、且又其余宗室ノ向ニ

モ同様御沙汰之由モ被 聞食及候、右ハ何等ノ罪状候

哉難被計候ヘトモ、柳營羽翼ノ面々、当今外夷追々入

津不容易之時節、既ニ人心ノ帰向ニモ可相拘旁深被惱

宸襟候、兼テ三家以下諸大名衆議被 聞召度被 仰出

候ハ、全永世安全公武御合体ニテ被安

叡慮候様被 思召候儀、外虜計ノ儀ニモ無之、内憂有

之候テハ殊更被惱

宸襟候、彼是國家ノ大事ニ候間大老・閣老、其他三家・

三卿・家門・列藩・外様・譜代共一同群議評言有之、（定カ）

誠忠之心ヲ以テ得ト相正シ、国内治平公武御合体、弥

御長久ノ様 徳川御家ヲ扶助有之、内ヲ整へ外夷ノ侮



ヲ不受様ニト被 思召候、早々可致商議 勅諭之事、

別紙

勅諭之趣被 仰進候、右ハ国家ノ大事ハ勿論、徳川家  
ヲ御扶助ノ思召ニ候間、會議有之御安全ノ様可有勘考  
旨、以出格之 思召被

仰出候間、猶同列之方々、三家・家門之衆以上隠居ニ  
至迄、列藩一同ニモ

御趣意被相心得候様、向々ヘモ伝達可有之被 仰出候、  
已上、

八月八日(安政五年戊午)

尚々、老中ヘノ奉書モ今日被出候事、

水戸中納言殿 廣橋大納言  
萬里小路大納言

御請

謹テ呈一翰候、本月八日之 勅諭並御別紙共無相違相  
達謹テ奉拜見候、被仰出候

御慮之趣深ク恐入奉存候、併シ不当之身右之(再カ)

鳳詔ヲ奉受候儀、誠ニ以テ一家之面目感激之至筆紙難  
尽奉存候、乍不及幾重ニモ尽力仕リ、成否ハ兎モ角モ  
追テ可奉言上候、先御請迄草々申上候間、宜敷御奏達  
可被成下候、恐惶謹言、

水戸中納言慶篤花押

八月十八日

廣橋大納言殿

萬里小路大納言殿

三三〇 中山忠能公墨夷刃分上申

(頭注)〇宸翰甲第 号參看、〇近衛家秘書第 号參照)

中山忠能

就墨夷申立之儀

為商売定則六則

一冊

已十二月二日堀田亭心接

一冊

同四日使節差出書

一冊

近来世界一變戰國七雄之資書取(察カ)

一冊

右去正月廿六日被見下所存可申上由ニ付、恐入候ヘト  
モ先日以一封言上仕候、

已十二月 十一日 十二日 十四日 十六日  
十八日 十九日 廿一日 廿三日 對話合八冊

右今月三日以來追々被為見下、

條約下案十四ヶ條

一冊

御兩役へ堀田邸ニテ演舌書

一冊

「右は、正月十六日追々被見下天、  
右去十六日被為見下、不審ノ廉モ候ハ、無遠慮可申人  
旨被命畏承候、右八冊已下得ト一見仕候処、事ノ軽重  
カ」

ハ有之候ヘトモ、全体ノ夷情表ハ真実ヲ本トシ、実ハ  
國人籠絡ノ応接ニテ、最初嘉永五年書ヲ渡置キ、寅年  
和好ヲ定メ互市ノ場ヲ開キ、次ニ沿海ノ測量ヲ望ミ、  
其上江戸へ押入、大樹公へ対面老中直談等、皆彼日本  
ヲ深謀遠慮ニテ、一時ニ申立候テハ一國必死ヲ究候ヲ  
察シ、輕ヨリ追々重キニ到リ、彼牛皮大ノ説ノ如ク、  
遂ニ大ニ欲スル処ニ及シ、我國ヲ并吞致シ姦計無疑候、  
加之教法ノ一件先日言上候得共、邪教伝染ノ程甚以危  
候、猶十四ヶ條ノ内ニハ依事目前益モ有之、暫ラクハ  
治平モ可取統候ヘトモ、後年必定國家ノ大禍害ニ可相  
成候、征夷家之趣旨、近頃國辱武威之沙汰漸々稀ニ相  
成、依形勢可有大变革処、国内人心不居合旨又ハ諸蛮  
同盟猛勢ニ付不可敵、或ハ理世安民ヲ説キ、當時ノ無  
事靜謐ヲ主トシ、毎條精々被取縮処ノ下案ノ趣ニ候間、  
於關東ハ此上被取扱方無之儀ニ候哉、但被為伺

竊慮備中守已下上京之儀故、國憂ニ可相成候ハ御沙汰  
有之候方、却テ公武無御隔意御合体ノ訳ニテ差支ハ  
有之間敷、何卒

神國ノ稜威ヲ與復シ、蛮夷ノ押侮ヲ洗滌シ、公武万  
々世弥御長久ノ儀專ト奉存候、當時武備政事關東ノ処  
置ニ候ヘトモ、日本ハ

萬王一系之

皇國勿論ニ候間、蛮夷追々驕傲不遜ノ誇辭ヲ以テ脅制  
ニ及、猶此上諸蛮來集シ、相共ニ難題ヲ申立、之ヲ拒  
メハ兵威ヲ以テ令驚赫、不奪不鑿ノ場ニ至リ、遂ニハ  
手ヲ束ネ彼カ管轄ヲ受ケ、座ナカラ外夷ノ屬國トナリ、  
赫々タル

神國膝ヲ犬羊ニ屈シ、國勢次第ニ衰微シ、挽回ノ時無  
之、神州ノ美号永ク廢絶候テハ、実ニ以テ君臣共歎  
ケ數儀ニハ無之哉、甚以恐多御事ニ御座候ヘトモ、  
当御代ニテ右様相成候テハ、

伊勢太神宮奉始  
神武天皇以來

御代々ノ神慮ノ程如何可被為在哉ト深ク恐惶歎入候、  
弘安元寇ノ節至誠ノ

叡念今ニ至リ、万人奉感泣候御事ニ候、方今応接防禦  
専ラ征夷家へ御倚任ノ儀ニ候へトモ、所謂微管仲吾其  
被髮左衽トノ聖語、即幕府ノ処置ニ有之候間、偏ニ無  
国辱様可被頼思召事ト存候、何分此上於關東猶再三諸  
大名ト衆議被尽、

神国浮沈ノ議論無腹藏実意ノ談合有之、土気ヲ興シ衆  
心一ニシテ威武ヲ宣揚シ、倭魂ヲ専トシテ

神国ノ大憂ヲ除キ候様、御沙汰肝要ト奉存候、夫共

於關東ハ何レ改祖宗之良法变革一決ノ事ニ候ハ、此

後夷国ニ付決シテ国家ノ禍害無之御請合申候哉、若生

後患候節ハ其咎ハ誰へ可被任哉ノ儀、急度御尋問可被

為在、且大变革ノ事ニ候ハ、於

朝廷モ品々御改革不被為在候ハデハ、

叡慮不被安御事モ可被為在候由、兼テ可被仰置候カ、

惣体ノ処何レニモ国中真実ニ不被示候ハ、内外禍乱

ト存候、ケ様申上候へトモ井蛙ノ見固陋ノ至、世界ノ

形成ヲモ不弁、甚以公平ノ論ニ背キ、事ヲ破ルノ基ト

可相成、且戦ハ大切ノ儀容易ニ不可論、旁和議專要ニ

付如此愚論ハ可被捨トノ説モ定テ可有之、一通リ尤ニ

有之候へトモ、当時右ノ通りニテハ十ヶ年国辱ヲ忍候

上、挽回ノ期有之儀ニ候ハ、其分可宜候へトモ、際  
限之見込モ無之、苟且因循シ国中ノ衆心安逸利欲ニ誘  
ハレ国辱国讎モ相忘、夷族弥猛威ヲ張候様成行、公  
武ノ命令モ屈兼候時ニ至リ候テハ、実ニ恢復ノ術無之  
ト歎入候、

朝家ノ御為ハ不及申、於徳川家モ 東照宮禍乱平治ノ  
功ニテ今日ノ治世深ク感佩仕候儀、弥無事長久肝要ト

存候間、猥ニ触忌諱候事共申立、城以多罪恐入候へト

モ、危急切迫ノ事情ニ付、一身ヲ不顧内々御両卿 (議

奏) へモ申上候事、

二月二十日

〔大日本古文书(幕末外国關係文书)にて校訂〕

三三一 正親町三條實愛上書

正親町三條 實 愛

墨夷一件愚意言上後、對話書八冊、条約下案・演説書

二冊等追々被見下、不審候ハ可申出旨承存候、去日不

断之拙存申立候後、段々応接ノ趣熟考候処、返々実ニ

国家ノ大患憂惱ノ至候へトモ、既ニ被許候儀ハ逆モ難

相復、何卒此後ノ処不損国体良策、於關東ハ可有之存

候処、条約下実通精々談判ノ由、実以テ及長歎候、開

關以來孤立

天孫神聖之域、結約於夷狄候事、既拘国体候儀、条約  
モ不容易条ニ被損辱候上、不知鑿夷族漸々乗機候事、

年来ノ情態顯然ニ候、加之応接中邪法ノ口氣有之、追

々国民妖教ノ染習恩利ニ相懷候ハ、不待数年可生大

害候、雖鎖国時勢一旦結約、富国強兵時機不可相待説

モ可有之候ヘトモ、偷安ノ人心殊利潤恩惠ニ帰向、追

々忘損害、兵備及廢弛不知々々可陥計略申、其遠因ノ

深可恐ノ至リ、且輕侮ノ甚キ可憎、実ニ断然拒絕今日

ヲ不可過候、乍去唯今無故難被拒絕候ハ、此上ハ

神宮 神慮被伺決〔機脱カ〕

神明宜定〔眞カ〕

勅裁可被為在候、併今一段被尽人事候上ニモ可有之、

先列国諸大名当今建議ノ避忌諱可申上旨厚被 仰下、

新ニ被召献策候ハ、諸藩固忠魂義烈ニ建白可有之候、

其上謀議異同、猶難被決候ハ、弥

神宮ニ被伺、隔絶ノ方

神慮ニ候ハ其旨〔神教天〕

勅定被為在候ハ、天下人心一同奮起、毫髮モ不可損国

体、勇憤ヲ懷応接候ハ驕傲ノ夷情モ終ニ可屈伏候、若

開兵端候共士氣堅確、國中志死守防

神州候ハ、

神風感応モ可無疑、勝機未戰ニ顯然強敵モ不足懼、却

テ太平ノ流弊ヲ一洗シ、

神国ノ威風八表ヲ靡ケ、万国

皇朝ヲ令畏憚ニ至リ、永絶覬覦之患候事可為保国之長

策候、又和許ノ方神教候ハ、条約猶亦取縮、後來堅加

警戒可被看許乎、此俟無左右被許候テハ、国威不相立

人心離散、益被并吞異類要地ヲ侵掠、國中ニ滋蔓終ニ

拱手待敗候事、实ニ残念至極可歎、且

神祇 皇祖ニ奉対テモ深ク恐入候、近来關東連ニ天災、

全ク醜慮汚

神地候儀

神祇憤患〔悲カ〕、天繼猶此上可恐候、旁可被伺

神慮、其上ノ事ハ天命ニ可有之候、且方今國中不知実

ニ傾敗ノ基候、此時人心激厲令一致候モ

神教 勅定ノ外ニ不可出候、实ニ難失大機會、何卒英

略勇断 公武被為有御熟談、

皇国御安全偏ニ奉仰候、決テ如下案被許問敷、最

聖断ハ勿論群賢至論モ可有之、且於關東被尽衆議候由、

旁越樽恐入候へトモ、再考実ニ難忍憂憤又候拙論申上  
候事、  
(祖カ)

二月廿四日

副申

正親町實徳

異国願意之事、条約下案ノ趣ニテハ、於關東精々被取  
縮承諾有之候由、甚以不容易、穢

神国候事數ヶ敷存候、於此度モ諸社御法案モ被為在候  
儀、奉始

皇太神宮、諸社 神慮ノ程、且被惱

叡慮候御事恐懼不慚候間、格別ノ以

叡慮武家一統一致之上、夷族恐

神慮、速退帆候様被命可然奉存候事、

(大日本古文書(養末外國關係文書)にて校訂)

三三二 八條隆祐上書

八條 隆祐

過日以一封申上候後、堀田備中守上京差上候条約書面  
ニテハ、彼方ノ申立成丈不相敗趣意故、不容易事柄而  
已ニ可有之、就中

皇国ノ部内夷人旅行、且於浪華夷人為商売僑居等免許

ノ条ハ、其事重大係国家万世之利害、決シテ可許儀ニ  
ハ有之間敷存候へトモ、既ニ於關東許容案文ニ書載候  
儀ニ可有之、今更是非ノ儀關東へ被 仰遣候儀ニ難被  
遊候事ニモ可有之乎、併来夷使節兼々申立候趣意ハ、  
(御カ) 彼国大統領十分ノ条約取結度志願ニ候処、条約書夷人  
居留於京都開于浪華等候廉候ハ不相見候、是等定テ難  
(港カ) 指許旨往復及弁論使節致承伏、相除候ヶ条ニハ可有之  
候へトモ、此趣ニテハ使節帰候ハ、必定於華盛頓政府  
衆議及評論、絶覬覦之念可係無後患乎、甚以無覺東候、  
貪黷之夷情候へハ又々余人為使節渡来、開港居留等ノ  
事強テ可申募乎、或彼通嘆喇佛、故將戰艦數艘来、令  
(英吉利カ) 嘆喇・佛為申立可遂吾所欲、狡黠ノ計策企候儀モ難計、  
(候脱) 若臨是等之期候ハ弥以可拘 御国体之大患、於關東何  
如処置仕候心得候哉彼為問度存上候、且過日モ申上候  
通、環海之防禦諸藩申合一致、心為 社稷尽死力、  
明詔之趣可申伝、關東へ被 仰遣候様仕度存上候事、  
(大日本維新史料)にて校訂)

三三三 中院通富上書

中院 通富

去十一日堀田備中守旅宿へ御行向ノ節、備中守初申上

候墨夷之願意<sup>〔願意書取條約等二冊〕</sup>、飯條約ノ書二冊、被為見下則熟覽候処、

弥以不容易存候、殊ニ兵庫ハ畿内ノ要津中国往來切所

ニ付、平常トテモ海防ヲ被置嚴然ニ候場ニ開港申願、

加之各方十里遊歩随意ニ旅行等甚不穩、益

御国体ニ相懸候儀ニ奉存、向後御国内人民彼カ囂惑ニ

逢ヒ、終ニハ一大事出来可仕、難息悲憤不過之候、抑

日本ハ開關以來夷賊ノ為ニ御国辱ヲ受候儀無之処、乍

恐於当御代夷賊ノ強情申募、願意被許候テハ、

天祖ヲ奉始

神慮之程如何ト存上候、且又衆心違乱、

宸襟ヲ可被為惱ト不堪恐怖候、前件願意先不被

聞食、猶大小名勵合武備相整候様柳營へ被

仰遣可然欵、此段御両役迄申上候、再<sup>〔試脱力〕</sup>應愚存申上幾重

ニモ恐入存候、御容恕奉願候事、

〔大日本維新史料にて校訂〕

### 三三四 橋本實麗上書

橋本實麗

愚昧實麗再<sup>〔梁々脱力〕</sup>應申上候モ恐入候へトモ、不堪痛歎之至又

々言上候、巫人条約ノ事、国内政務關東へ御委任ノ儀

ニハ候へトモ、此度ノ事件外夷ノ儀ニ候間、件々及言

上有之候哉、其辺不存候へトモ、今度及教港言上ノ儀

不審ニ存候、開一港候モ開教港候モ拘国体候儀ハ<sup>〔同力〕</sup>国事

ニ候、乍併是迄被取縮候儀ニ候へハ、不得止事一二ノ

港ヲ被為容許候トモ、教法可<sup>〔所カ〕</sup>建立ノ義ハ、飯令遠境タ

リトモ相拒マレ候様致シ度存候、夷人国内居留候ハ、

吾人民親睦候事ハ必然ニ存候、其上邪教誑惑候、<sup>〔シカ〕</sup>連染候

折ヲ見極メ、從彼吾邦人ヲシテ災害致サセ候深謀モ難

測、其時ニ望ミ嚴制ヲ加へ候共、地利弁別ノ賊突ニ負

薪防火候ヨリモ危キ儀ニ存候、尤當時ハ往昔ノ如キ奇

怪ノ事ハ無之由、今度使節並ニ蘭人ノ注進、且漂流人

土佐国萬二郎之口符合候間、細子細由ニ承候へトモ、

古采我邦城ニ於テ邪宗禁制法度モ有之候儀ヲ、萬二郎

一言而已ニテ安心ト申訳柄ニテハ有間敷、其上卑賤ノ

者曾テ遠慮有之候義共不存候、一二開港市ノ許否ハ兎

モ角モ、教法所ノ儀ハ堅固相拒度儀ニ存候、若相拒候

テ不聞入從彼發兵端候ハ、戰爭ノ術ハ武門ノ為要所、

報年来治平ノ仁風ノ時ニ候間、専ラ防禦警衛ニ力ヲ<sup>〔足〕</sup>合

セ候儀勿論ニ候間、何卒列国諸將士へ被及諮詢、各所

意見上有之、是非明白、人心一致ノ上御決定候ハ、衆

望ニモ相通可然哉奉存候、左モ無之候ハ、<sup>〔適カ〕</sup>

内外混乱、

宸襟ヲ被為安候期被為在間敷ト、深ク憂苦仕候、早被  
叡断候様備所仰願候事、

〔大日本維新史料にて校訂〕

三三五 野宮定功上書

野宮定功

墨夷一条過日不願恐懼存言上仕候、其後對話書八冊  
以下追々被為見下一々熟見仕候、使節言辭專ラ

皇国ノ為ト称シ候間、条約取結ノ上暫時ノ処左モアル  
ヘク候ヘトモ、不待兩三年忽強情申募リ、凌辱ノ遠慮

深謀必然候乎、唯今心接事情漸々及切齒候次第、全ク  
国体弊衰ノ基哉ト、衆人如臨深淵如履薄氷、実以戰兢

不過之候、往昔以来諸夷覬覦候ヘトモ、国内衆庶竭忠  
節力戰候ニ付テハ、自然神明ノ加護モ有之、輒夷賊降

伏仕、乃如弘安蒙古入寇ノ時ト、雖末代

神徳聊不可有變衰候ヘトモ、人心過半柔弱ニ陥リ、其  
薄情ニヨリ冥助無之事哉、但當時トテモ俊傑ノ士非無

之候ヘトモ、無拳用候テハ珠玉モ瓦礫ニ劣リ甚可惜事  
ニ候、川路左衛門尉・岩瀬肥後守等演舌書ノ趣ニテハ、

最早難拒絶夷賊ノ意ニ順遵候外無他計ト申異趣ニテ相

聞候、元來諸夷ノ風説妄語等ヲ信受候テハ無際限、且

弥夷情驕傲候間、急度及衆議警戒有之度候、開關以來

堅固ノ鎖国、至 当御代夷類ト和親好馴相成候テハ、

皇太神ヲ奉始

神武帝以下 神慮深ク恐入、且ハ先賢名臣之幽魂如何

可有之、弥人心不居合微弱ニ陥リ、如息ノ安穩ヲ專ラ

ニシ、醜利欲夷類要求ニ応シ候ヘハ、後患呉々モ恐怖

仕候、方今不被決英断候テハ挽回ノ期可無之哉、国体

盛衰ノ両際ニ及候処、是非ヲモ不申出候テハ不報国恩

且不忠ノ至ニ候、將又徳川家ニ於テモ永統ノ為ニ無之

候哉、不肖微臣不可敢言候ヘトモ、呉々恐後患候間整

申所存候、偏不拘貴賤尊卑被立衆議、採用勝記所置有

之候様願度、御兩役迄申入候事、

二月廿五日

〔大日本古文書〔幕末外國關係文書〕にて校訂〕

三三六 参考 日下部伊三次伝

故日下部伊三次文化十三年丙、名翼、字鳴鶴、号ハ九泉、伊

三次ハ通称ナリ、父其名ヲ連ト云フ、号ハ訥齋ト称ス、

其妻ハ実母ノ親族ヨリ娶リタルカノ由、始メ諸老賢ノ取調ニ讓

リテ、予ハ同氏天保申辰国事ニ際シ、太田村益習館々守中其思フ処アリ

テ、学事校究ノ為メ暫ク他出ノ届書ヲ処カツ郡役所ヘ差出々脱ノ後推退

去留等ノ廉、聞見セシ丈ケヲ概記シテ、抑同氏事太田村ヲ出脱セ  
諸賢取調ノ參考ニ供セントスルナリ  
シハ天保十五年改元シテ 十月申ノ由、一旦江戸へ出テ、兼  
テ師トシ教示ヲ受タル朝川善庵山本北山人向商 等へ、  
紀州へ赴キ、同藩儒官仁井田撰一郎居老公附ナリト云 へ寄リ

テ、中納言殿即チ烈公ノ冤罪ヲ訴へ、紀侯ノ御援助ヲ以テ、  
速ニ開明アラン事ヲ歎願セントシテ、東海道ヲ旅行

此旅行中或時大井河原ニテ、東北ヨリ出ル月ヲ振返リ見テ、宅ニ残セシ  
老母始メ親族ノ事ヲ思ヒ出シ、無程川ヲ渡リ金谷宿ニ泊リ、旅店ニテ硯  
ヲカリ受ケ、前件川原ニテ月ヲ顧リ、眺シ自分旅装ノ交ヲ画キ、外ニ老  
母等ヲ慰スルニ、忠孝ノ大義難放棄ハ臣子ノ勤ル処、其モノ重キニ當リ

此途ニ思ヒ立ル云々等簡單ニ書シテ、同宿發飛脚屋へ附シ宅へ遣セシ  
越ハ江戸潜伏同居中我等ト寝物語リシテ互ニ袖ヲ濡シ候事有之候ヘキ、此  
一事ヲ以テモ同氏ノ志、扱紀州へ趣ク、尋テ京師ニ立寄り、

紀侯屋敷ノ留守居役長澤右衛門ナルモノヲ尋ネ、同氏ニ  
便リ猶紀州表ノ都合ヲ函ラントテ、長沢ハ仁井田翁ノ門人ナルヨシ 対面其事

ニ及フ、同副役渥美何某等ヲモ会シテ其手続ヲ談シ京都  
ヲ出立、紀州ニ着シ、仁井田老儒ニ因リテ事情ヲ具シ、歎

願書ヲ先ツ西濱老公ヨリ当公齊順逝去ノ後 へ御依頼ニ相成  
候処、御許諾ノ趣ヲ承リ、同地ヲ引取り、帰路伊勢ニ廻

リ両宮へ參詣シテ江戸へ帰府、滞在シテ自他諸有志者ト  
交リ、国事挽回ノ策ニ不怠事數年一日ノ如シ翌年正月ニ至

等ノ京師ニ上リ、右長沢氏ニ因テ紀公へ猶其後ノ情実ヲ陳述セシ等ノ事  
モ、即チ日下部ヨリ添書ヲ以テスルニアテ、同三年三月ニ至リ紀公參

府ニ付、水戸士民大勢東海道路傍駿府以東へ繰出シテ歎願セシハ、該幸消  
息ヲ伝聞セシ故ナリ、右ノ通り紀伊公ニテハ御志諾ノ趣ニテ、家老山中

筑後守・用人山田八右衛門・西村良右衛門等頗ル尽力ノ様子ナルヲ以テ  
水戸士民ヨリハ事情建白嘆願等追出ニ候へ共、如何ニモ遷延ニ付国事ニ  
際シ追々禁囚入牢等ノ輩斃ルモノ往々有之ニ依テ、有志者如何ニモ切迫  
イタシ、為ニ潜匿者ハ素願ルモ、空數引展シ等ニハ不相合々身ヲ犠  
牲ニ供シテ紀侯へ出テ必到哀訴ニ伏シ、

其日限ヲ期シ其準備ヲナシ居リ候処、在水ノ老成吉成、原田等始  
メ最モ心實ク、此時ニ當リ有志潜匿ノ一人金沢吉衛門ヲ担任シテ、招  
キ、其情実ヲ委問ノ上、長倉館主松平公ニテ有志ノ懇願ヲ担任シテ、十  
二月極末日ニ至リ出府ト上紀公へ事情建白書ヲ差出シ歎願ノ上、松平未  
炊頭殿屋敷へ引取り其左右ヲ相得折柄、小石川水戸邸へ被引取諸問ノ未  
ヨリ遂ニ吉成・矢野等老成ノ九傑ヲ再度嚴重ノ禁囚ニ処シ、松平家ハ滅  
祿ノ上分家竜四郎氏ヲ以テ家跡相統、松平公ハ尤モ嚴重ノ憤ミ被仰付、  
其節引連候家来小田野權之助・山崎幾之進兩人揚屋入り相成リ、此  
二関シ紳勇介義モ同斬揚屋へ被遣候ハ不覚候、尔来有志士民ノ動靜ニ氣  
ヲ付ケ其取締方頗ル嚴密、殊ニ江戸潜匿者ノ探索一層嚴重、然レ共紀州  
公ニテモ此儘御見捨ハ相成間敷、且該不穩ヲ以テ暴徒露出タルヨリ、吾  
外一名水戸へ下シ、事情取調ノ内密事モ一有志ノ知ル処トナリテ、夫々  
手配ヲモ江水通合相成候、殊ニ二月下旬ニ至リ紀公ニテハ本年三月ハ御  
眼出テ在国ノ例規ナルモ引續ニ相成候、旁以テマダノノ頼ム処アリ、有  
志者ハ不屈ニ夫々周旋ニ不怠処、水戸政府ニテハ取締方倍々嚴重ニシテ  
国難以來江戸へ出テ深川辺ニ潜匿シテ隠頭出沒、凶事へ尽力ノ老成者ト  
タノニシ金沢吉衛門モ遂ニ四月中被捕獲候、加之凶事ノ累積スル氣運無  
拠モノニシテ、同四月中旬ヨリ紀公御処勞ニ増シ御差重リシ容子ニ承リ  
有志一同ノ苦心措ク処ナス、大樹ニ於テ々々御重遇ノ御弟等ニ付、御医  
師及奥女等ヲ以テ々々ノ容体ナテ被爲問候ヘ、鄭重慶遇ノ御弟等ニ御医  
師共サセラレ候ハ勿論ナレ共天命無拠事歎、五月初旬ニ至リ逝去ノ訃音ヲ  
密聞シテ有志共ノ失意胆言語同断ノ事也、此時ニ當リ水戸有志者ノ機  
貨可至トシテ潜伏探索緻密ニ互リ、殊更ニ日下部伊三次義ハ谷田部藤七  
北郡幸太夫ヲ以テ隠密者ヲ遣ヒ、彼一人ヲ捕縛シテ詰問スルハ庶潜匿ノ  
種ヲ断絶スルノ意ヲ以テ、探索方ニ注意頻リニ問探ヲ放テ探求ノ趣、太  
田村立川貞亮ヨリ密使ヲ以テ報導スル有之旁ニ付、當時潜匿者一同相合セ  
一ト先江戸ヲ避ケテ夫々知ル方へ潜伏シテ、其機會ヲ待ツベシト議決  
タリシカ、其時ニ至リ他処有志村越芳太郎外一兩名ノモノ申ス、一旦  
此銳鋒先ヲ避ルヘ同論ナレ共、然シ是迄テ周旋セシモノノ一人モナク、私候  
不問ハ水戸人情実始メ、マタ幕官ノ模樣ヲ聞テ其機ニ投合スル事、其種  
及江戶邸へ情実等相通シ合、夫ヲ予等始メ他処尽力ノ有志へ入説候へハ  
自然幕有志へ意見等モ相知レ互ニ脈絡貫通シテ居リ候様致度、尤モ日下



部氏ニテハ奸徒ノ目的トシテ探ル処ナレハ遠在ヘ御避ケモ尤モナリ、就  
 テハ幸ヒニ加藤木氏ハ江戸接近西小松川ヘ既ニ潜伏ノ策モ極リ居レバ、  
 時々短剣ヲ帶候トシテ出来リ他処有志者ヲ巡リ、夜ニ至ラハ有志  
 家ハ泊シ事情ヲ通シ合、左様致シ候ヘハ如何ト芳太郎ヨリ加藤木ノ日下  
 部兩人ヘ心付モ有之候ニ付、如何様可然ト相答ヒ未タ在江戸ノモノヘハ  
 其段ヲ通シ、見引拵候モノヘハ追テ可通事ト確定、何レ其内外一人計  
 リモ其任ヲ見立構ヘ可申事ニ付、トモ角三ヶ月間ハ文通而已ニテ面會  
 モ不出来事、右篤クト熱談モ致シ置度ト互ニ存シ、引込前三四日旅ニ出  
 テ緩談スヘキトテ、五月十日方覺ル日柄ヨリ出カテ、芝泉岳寺ニテ待合  
 テ、其夜川崎泊リニテ日下部ト加藤木一室ニテ緩談深更寐ル、翌日江戸ノ島  
 渡辺旅店ニ泊リ間ヒ、其翌日鎌倉ニ至リ八幡宮參詣、大塔宮旧跡土中牟  
 ヲ尋ネ旁徘徊シテ金沢泊リ、又翌日横須賀ヨリ浦賀ニ至リ、日下部ノ伯  
 父何某ナルモノ、兼テ日下部知リ合ニ付被留泊候、大ニ馳走等ニ相成候  
 崎何某ナルモノ、兼テ日下部知リ合ニ付被留泊候、大ニ馳走等ニ相成候  
 翌日金沢迄便船ニ乘リ、神奈川泊リニ際テ大體向ノ意見等モ吐露シテ江  
 戸ニ帰リ、日下部ヘ浅川ノ門人ナリシ駿州岩倉宿大村桂藏ト申ス菓種營  
 業者ノ方ヘ、善書老人ノ添書ヲ携ヘテ出立、加藤木ハ北松川村渡辺律藏  
 ト云フ村夫子ノ家ヘ、掃リ替置ノ巢屈トス、尔来月三度ツ、ハ必ス江戸ヘ  
 出テ他方有志ヘ廻リ尽力ヲ依頼シ、且水戸表ヨリノ書面等モ兼テ通シ置  
 候方ヘ達シ居リ受取リ夫々配達モイタシ、日下部ヘノ運ヒ不怠往復候  
 時ノ往復ハ島屋・京屋両飛脚問屋ヘ、扱日下部紀州ヨリ帰り、江  
 差シ出ス事、諸賢御案内ノ通りナリ、扱日下部紀州ヨリ帰り、江  
 戸ニ於テ潜匿処朝川ヲ本巢トシテ、内神田松下町住佐久  
 間修理、深川油堀多屋又兵衛金沢ノ妻ノ美家ナリ・四谷門前川村權  
 之助・糺町無念流擊劍家杉山藤七郎等ヘ進退出没シ居リ、  
 其変名ハ海江田佐衛門ト云フ、此度弘化三年駿州岩淵ヘ身  
 ヲ遊ルニ及ンテ、猶変名シテ宮崎俊太郎ト云フ名ヲ以テ  
 ス、平野正太郎加藤木ノ変名・宮崎定太郎ノ名ニテ往復スル事  
 トシテ、外々ヘハ先ツ不為知事トナシ置事ナリ、右之通  
 リ潜客共田舎間ヘ身ヲ避ケ候ニ付、自然水戸江戸監察ノ  
 探索方モ追々等閑ニ相成候様子ニ付、宮崎モ八月初旬頃

ニ至リ徐々ト出府シテ、青山ノ千田ケ谷八幡ノ表ナル旗  
 本士戸川助次郎上屋敷ハ糺町二丁目裏ニアリ、其高ニ千石余、無氏  
 念流杉山藤七郎ノ内人ナルヲ以テ杉山ノ世話ナリ  
 ノ下屋敷中一住居ヲ借り受、全ク当用鍋釜等ノ世帯道具  
 ヲ購求、或ハ他所諸有志ヨリ被借与又ハ贈与等ニテ、全  
 ク飯ス々々ノ世帯ヲ持チ居リ候此世帯ヲ携持ノ際、水戸ヘ微行  
 ヲ被頼居候、旁殊ニ予潜居所小松川ヨリハ三里余殆四里程ニ付、大体泊  
 リカケニ出合候様イタシ候、此節ニ至リ段々聞知リテ、無名ハ勿論松平  
 等ノ有志者、爰ニ居ル事翌三年未四月末迄之処、都合ヲ以  
 テ芝愛宕下旗本本多彌八郎高三千石余寄合席ニシテ、其祖氏  
 ノ邸中ニ居リテ、同家子弟ヲ始メ其他近所旗本子弟ヘ講  
 讀ヲ教授スル安食大太郎浪人也方ヘ引移リ、爰ニ同居シ  
 居ル事翌嘉永元年申年夏迄ナリ、扱此頃ニ至リ国事挽廻ノ  
 機モ兎角荏苒タルヲ以テ、各潜居ノモノモ多年ノ失費不  
 容易、且爾後晴天白日ヲ頂キテ身分ヲ自由ニ進退ス期限  
 モ不可予知ニ付、各自頼田ノ遠策ヲ図リ、先ツ生活ノ方  
 ヲ立テ、且ツ国事ニ大奔走スル事ニ相談シテ、中村忠  
 三郎浜田平介ノ変名・旗下稻富家ヘ身ヲ寄せ、郡司五郎大野謙介ノ變名  
 町ナル一旅店ヘ身ヲ寄せ、同家世話ヲ為ス、和田力五郎  
 加藤木ノ一時變名、秋山平三郎方ヘ村越芳太、右之通追々頼田ノ策  
 郎ノ招合ヲ以テ身ヲヨセセ、同家ノ世話ヲナス、  
 ニ出テ耕シ、且ツ戦守ノ遠圖ヲナス事ニ至ルニ、宮崎ハ  
 其方向未定ナルヲ以テ村越ト和田ト図リ、平野正太郎最

前潜匿セシ西小松川、渡邊律藏平野退身後無程死去ニ付、該渡邊ノ營ニ来リテ讀書手習等教授村夫子之跡ヲ引受ケ候事ヲ、平野ユキテ故渡邊氏ノ未亡人及ヒ村方世話人ヘノ談合ノ上熟議シテ同地ヘ往ク事ニナリ、同所ヘ引移ルモ只生活ノ為メノ計ニテハ甚不本意ノ事ナレハ、同家ヲ本巢トシテ、時々府下ヘ出テ不相變奔走尽力モ出来ル事ニ約束シテ、翌年六月初ニ同地ヘ移転スルニ及テ、当變名櫻島復太郎ト称セシナリ、彼是ト月日經過ノ末、翌嘉永二酉年三月十三日ヲ以テ、三連枝讚岐守・大石頭・播摩守等ナリ後見ニテアリシ処、宰相殿追々御成長ニ付後見ヲ被解、加之御父子御親睦云々等之御内沙汰迄有之、有志士民ニ於テモ人心穩安ニ向ヒ来リ候ニ付、潜伏者モ聊カ安堵ノ心地ヲ得、依テ櫻島モ夫迄水戸ヘ差置候粹英之進一人ヲ先ツ窃ニ手元ヘ引取り教育ヲ加ヘ度趣、村越・平野等ヘ内談ニ付可然ト決シ、其為登方取扱ニ無名氏堀井克之助名ニシテシシナリヲ頼ミ連立来リシハ同年五月末ニシテ、四五日平野方ヘ差置、無名氏案内ニテ江戸見物為致、六月朔日小松川住親櫻島之手元ヘ引取り、同年八月初旬頃ニ至リ跡ニ残リシ老母始メ家族悉皆引立来リ此時モ無名氏下リ、尚親戚ノモノモ送り来リ相落、先ツ当分都合ヲ以テ小松川ヘハ不引取ニ、龜井戸天

満宮境内ヘ一戸ヲ借受ケ此世話ハ本莊安芸守用人大島、七兵衛ト申モノ、世話ナリシ、粹英之進共一同爰ヲ本住居トシテ、復太郎義ハ時々小松川ヨリ来リテ取締リヲナシ往復之末、翌三年戌年暮春頃ニ至リ国事挽回何分不埒明ニ付、水戸有志中ヨリ戸田・藤田・吉成等ノ老成者ハ敢テ關敷ノ由萩吉次郎ナルモノヲ出府為致、只管担任周旋之策ニテ登リ来リ、四ツ谷押原横町住難波田幸藏武藤善吉之弟、有故水藩ヲ退レタレトモ、始終国事ニハ關係セシ人ナリ、震災ノ節死ス、哀ムヘシ之住居ニ寓居シテ、専ラ国事挽回ヲ図リ、他所諸有志ヲ奔走周旋スルニ際シ、祐筆様ノモノ無之テハ差支候歟ノ由ニテ、櫻島ニ談シ、付テ是マテ從事セシ村夫子職ヲハ代人ヲ差入レ、一ト先ツ同所ヲ引弘ヒ、家族等ヲモ夫マテ住居セシ龜井戸ヲ引弘、牛込原町裏ナル根来組屋敷内ノ一家屋ヲ借受ケ是ハ幕府小廳三郎ナルモノ、世話方且身分引受人ト云、転居、爰ヲ本巢トシテ前件押原横町迄往復ス、如此萩氏ニ随從、書物等始メ取調向キ尽力不怠居リ候得共、右萩氏等最初見込ミトハ違ヒ、兎角不埒明遷延之模様ナルモ、越年シテモ居リ兼候情実歟ニテ、歳末迄ニハ帰国之事トナリ、右担任ノ周旋方モ中止シテ帰国セシナリ日下部ヲ誘フニ、十月時分迄ニハ必ス挽回青天白日ノ氣本トセシ村夫子モ代人ヲ差入レ引弘ヒタル処、今更小松川村ヘ帰ル事ニ至リ兼、右様ノ進退ニ合至ラハ甚タ懸然ノ事ナリ、サリトテ余計ノ手当モ不差置、萩氏下リシハ些薄情タル仕向ナレトモ日下部ハ從來濃厚ノ人故黙シテ、君子ハ交絶ニモ惡声ヲ不出云々ノコトハ密ニ話サレ候事

有之可慙、日下部ハ該村夫子ヲ營ミテ家族ノ生活モ立チキ居リシ処、中途ニシテ相歇メ、爾來活計ニ苦ム身トナリ、寫本筆耕杯ヲ營ミ活計ノ助トナシ凌キ居リシカ、次第ニ窮迫ノ様子故、櫻任三ト凶リ、平野正太郎ヨリ小松川ヘ書面ヲ遣シ世話人ヲ招キ寄せ、櫻島ヨリ代リニ入レシ村夫子ノ模様ヲ聞クニ、若手ニハアリ人望ヲ失ヘ追々退塾之模様云々ニ付、良機会ト見込、最前ノ櫻島氏ナルモノヲ再帰ノ談判ニ及ヒ候承知ニ相成リ、尤モ代リニ入シモノハ全ク当座雇ノ約定ナルヲ以テ、世話人ヨリ品能ク断リ、櫻島ヲ再迎スル事トナリ稍活計ノ方ヲ得、櫻島始メ家族一同聊カ安堵スル事ヲ得タリ、扱櫻島弥小松川ヘ再帰スルコト、ナリテハ、右日限前倅英之進ノ前髪ヲ取り度候間、就テハ從來懇親ノ廉、且ツ兩親生存者ノ手ニテ髪月代ヲ乞ヒ度兩親生存者ヲ頼ミテ前髪ヲ取ル事旨依頼ニ付、平野ニキテ該体式ヲ執リ心計ヲ祝ス、一同相歡喜盃ヲ揚ル、此時英之進ヲ改テ更ニ裕之進ト称ス、当年十六年ト聞候間、天保七丙申年ノ生レト見ヘタリ、同月廿五日ヲ以テ日下部ハ日頃天満宮ヲ信ス、月々廿五日ハ大体有名ノ神社天満宮ヘ參詣ス、殊ニ二月廿五日正シク縁日ナルヲ以テ、尚日ヲトシテ移ル、貞実ニシテ信ヲ守リ鬼神ヲ尊敬スル事如此ニシテ、古人ノ体裁ノ不矢君子ナリ、此一事實ヲ以テモ國難ニ殉死スル誠心ヲ知ル、古シ、當時ノ有志家ハ尊敬スル事杯本日ノ人ノ比ニアラス、桜仁蔵杯平生ノ事録ヲ綴々落々卓犖不規ニシテ、此事ニ關係セス有為ノ念ニ富シ人物ナリケレ共

鬼神杯ノ事ハ敢テ信教スルニハアラネド、他ノ尊敬スル杯ハ尤モ贊成スル事毎々ナリキ、其人ノ誠心厚キヲ賞シテナリ、本日ノ人々ニ比論ノ限ラニア、家族一同引立小松川ヘ再帰シ幼童ヲ教授ス、然レ共一旦中絶セシ故生徒ハ余程減シ候由ナレトモ是ヲ以テ生計ノ基トナシ、同六丑年迄同所ニアリ、同年夏ニ至リ當時天下有名ノ聞ヘアル川路左衛門尉名聖謨、官名ノ前ハ通稱三千石、其役勘定奉行勝手掛ナリナリ方ヘ、或ルモノ、招会ニテ身ヲ寄ル事トナリ、小石川船河原町役屋敷ヘ引移リ、動在中最初亜米利加船浦賀ヘ渡來一旦引取ル、無程魯西亞船長崎ニ渡來シテ建白書ヲ出ス、此時ニ當リ天下多事イフ計リナシ、右長崎ヘ渡航セシ使節「フーチャチン」ヘ応接ノ為メ、川路左衛門尉司農本務海防掛兼務、足高共五千石・筒井紀伊守本丸留守居海防掛兼務、足高共五千石兩人特命ヲ以テ長崎行之節モ、主人ヘ随從シテ長崎港ニ至リ、翌安政元寅年春随行シテ帰府、続テ勤仕之処、昨丑年夏亜船渡來ニ付、廟堂之混雜其処置方定義スル処不知共云フヘキ形勢ニヨリ、吾

烈公ヲシテ幕議ニ参与之義被仰出ニ際シ、特別之書付ヲ以テ、御家政向始メ家中ノ黜陟等御父子御相談ノ上、思召ヲ以テ御取計可然云々、大御優慰之命令ニ付、此時始メテ多年之蒙雪相開ケ、開天白日ヲ仰ク良機ヲ得、因テ戸田・藤等始田脱カメ無慮慮騰用ノ秋至リタルヲ以テ、多年國

事ノ為メ亡名潜匿等ノモノ追々召還ノ沙汰ニ及ヒ候得共  
右日下部ト加藤木両輩ハ、多年他所有志ニ交際シテ周旋  
セシニ、自然残務取調様ノ姿モアリ、將タ旗下ニ身ヲ寄  
セ居候故、斯ル多年多端ノ時ニ際シ代リ合ニ可充人ヲ得  
スシテハ義務不相濟景況故、度々催促ヲ受ケシモ疾速ニ  
引取兼、遷延之末嘉永二卯年ニ至リ加藤木ハ四月末、日  
下部ハ五月末漸引取帰国届ノ上特殊之

恩命ヲ蒙リ、是ニテ亡名潜匿人悉皆帰參、各自特命ヲ辱  
フセシナリ、兼テ江戸ニテ下リ前申合セ置候ニ付、日下  
部モ郷里ノ私宅迄被尋一泊緩談、実ニ馬琴作之小説里見  
八犬伝ヲ今爰ヘ真写セシ等ノ戲言ヲ吐キテ、終夜愉快ニ  
談セシ事、殆ント四十年ノ星霜ヲ經過スルモ今ニ忘ル、  
事不能候、扱同氏事七月初メ江戸ヘ帰り、水戸ニテ差出  
候辞表書ノ左右ヲ相待チ居リ候折柄、同年十月二日夜震  
災ノ為メ住居之長屋倒潰シテ、家族共敷紛レタレ共辛フ  
シテ出脱ノ中老母一人ハ被圧死テ私宅ニ不居由ナリ、日下部  
一同ノ愁傷慙察ニ不堪事ナリ、此外モ同邸内ニ兩三輩死  
傷者モ有之歟ノ由品喪ノ際直話ニ聞ケリ、扱右母ノ屍ハ  
水戸ヘ送り埋葬ノ由ハ聞キシカ、其場所及ヒ葬儀ノ景況  
等ハ諸賢ノ取調ニ讓リテ別段不記載、川路邸ニテモ冲家

隠居等ノモノハ、差向キ小屋掛ケ等ニ當リ為凌置候様子  
之処、日下部義ハ既ニ水戸家ヘ被召還、尚辞表モ差出其  
左右ヲ待受居リ候身分ノモノ故、小屋掛ケ等ヘ差置モ氣  
ノ毒ノ事ト思ヒ候哉、同氏親戚小日向江戸川端内藤幸三  
郎當時日光奉行支配与力頭ノ由、高役料共三百石位カ、川路左衛門尉  
ノ末弟ナルヨシ右井上新右衛門ノ弟ナルヘシ、何レモ夫々要路ニ進  
ミ居リ、氏ノ内長屋ニ借住シテ居レリ、其内志願之義モ水  
戸老公ヨリ薩公ヘ御内々照会ニ相成リ、都合好ク表向ハ  
新規召抱ノ振ヲ以テ薩藩ノ家来トナリ居リ、追テ志願ノ  
海江田ヘ復セシ歟ノ由ニ聞ケリ、此等ノ点ニ至リテハ詳  
細不相知候、此内藤ノ屋敷ニモ久敷居リ、其後同四五年  
頃ニ至リ、麻布市兵衛町御先手組屋敷中井數馬御先手組  
与力ナリ  
ノ抱家屋ニ借住林龜梁ノ世話ヲ以テ借受ケ候由、中井數馬ハ林伊太  
郎妻ノ兄ニシ、當時茨城県會議員中井數之介ノ叔父  
ナリ、何レモ  
有志ノ士ナリ中、安政末度彦根大老等暴政中大獄ノ災ニカ  
、リ幽囚中病死、悴祐之進ハ遠嶋ノ処刑定リ、預ケ中是  
亦病死ト聞及候本文江戸川端内藤ノ屋敷ヲ転シテ麻布ヘ引移リ候  
後ハ、磯川ヨリハ余程距リ居リ、且當時比ハ内外  
多事紛紜ノ世態故、往復モシバ、不致候間、川路・内藤ニ居リシ頃ノ  
様ニハ不相識候、当海江田武二氏ノ妻若狛ニ因テ取調候ハ、過半相分リ  
可申事カト考  
ラレ候ナリ

附リ

本文日下部伊三次太田ヘ残シ置候家族共ハ、弘化三年  
午春頃迄ハ同処ニ居リ候処、谷田部藤七等ノ目注ク処

トナリ、外ノモノ出入等ニモ嫌疑ヲ恐レ候ヨリ旁不都合ニ付、夫々有志ノ手続ヲ以テ水戸馬口勞町片町へ引移レル事ト覚ヘタリ、同処ニ居ル事出入四ケ年ニシテ江戸へ引取り、爾後数度転居ノ末麻布住居中、父子彈獄死亡後妻子等進退ノコトニ至リテハ、予等モ同年冬国事ニ際シ蟄居ニ相成、下国数年謹慎中ニ付寤ト不承候得共、追テ聞クニ薩州屋敷へ引取賄ハレ経営中、日下部未亡人モ病死、長女一人トナリ同縁合ノモノカ何カ附添薩州へ旅行ノ節、靜岡旅宿ヨリ長女ノ手紙同処仙元神社ノ神主築地三郎四郎へ遣シ候ニ付、同人出テ対面ノ上、始テ未亡人モ死亡ノ事ヲ承知、共ニ落涙ニ咽ヒ候由、追テ右築地ヨリ伝承セシサへ感涙袖ヲ絞リ候、日下部長女名ハ何ト申候カ忘レタリ、年齢ハ本年四十七八九歳位ナルヘシ、故祐之進ハ存生ニ候ヘハ五十六歳ナルヘシ、同人ヨリハ六七歳モ下ト思ヒ候ヘキ、右日下部伊三次父子等国難ニ関係隠頭出没ノ顛末ハ、我等義尤モ親密ノ交宜ヲナシ居リ候故、粗覚居リ廉々當時ノ雜記等へ照ラシ記載候得共、書余同人ト時事直話、或ハ偶々詩歌等聞テ記載置候分モ聊カ有之候得共、右等迄詳記スルニハ猶又雜記等ノ中ヨリ抄録、隱語等ニ至リテ

ハ暗記文ケハ翻訳ヲ加ヘ可申モ、年来之事殊ニ老衰逸忘シテ案シツカザル件モ往々有之、中々至急纏メ付ケ難ク候間、前件進退等之顛末ヲ概記シ供賢覽候也、

因ニ云ク、実ハ本文日下部身分等隠頭出没ヲ概記ノ通りニ習ヒ、痴老カ天保甲辰来国雜ニ従事隠頭進退セシ廉々、年度ヲ追テ取調候得ハ、自他邦尽力ノ有志姓名モ自然相顯レ、其時事之形勢モ粗相知レ、諸賢御参考之一端ニモ可相成カトモ相勘ヘ、例之通り不文ニシテ章調ヲ不為候ヘ共、隙ニ明シ追々書綴リ可申歎トモ存候得共、乍去何ヲ申候テモ老衰第一記憶羸損、押張テ勉勵難相成ハ殆ト遺憾之次第ニ奉存候、宜敷御垂憐可被下置候、恐惶頓首、

本書ハ今一度精写シテ御廻シ申度候得共、何分不行届此假差出申候也、

明治二十四年三月五日

加藤木峻叟拜書

日下部千駄ヶ谷八幡前潜匿中他行スルニ付、予等留守居ヲ被頼ユキテ暫ク別レヲ告ル時、折柄二月中ニ有之

梅ノ花ヲ瓶ニ差シタル枝へ

加藤木正如

うちつけにさこそまつらめ梅の花

色香消ぬうちにかへりませ君

同かへし

日下部 翼

ゆきかへる程に色香な移しそと

梅に添へてよ君か言の葉

同所潜匿中岩淵ノ大村桂藏方ヨリ、富士ノ川ノリ  
ヲ贈ラレテ嘗味ノヲリ詠ル、

日下部 翼

ふじの雪解けてぞかゝるしら糸の

滝の川のりつともかくはし

是ハ富士ノ麓ナル精進川ニ白糸ノ滝トイフ其ホト  
リノ瀨ニツキシノリナリトイフ事ヨリ、此ノシラ  
ベヲナシタル由話セリ、

高橋善衛門弟手綱藩馬廻リ兼勘定役、日下部末  
弘化四年二十七日歿ナリト

加志村準次郎水戸郡方手代、同年三十一歳  
ナリト日下部ノ直話ニ聞ケリ

○伊三次父日下部連ナルモノハ元ト薩州ノ藩士ニシテ、

〔領地〕幸橋内領今萬嶋館ノ地一  
江戸勤仕ノ節幸橋門内ノ中屋敷俗ニ謂フル東屋

住居留守

居役中、門限ヲ犯シ候者ヲ見逃シ濟シタル罪ニヨリ、

其処刑ヲ避ケテ亡名セシ事ニシテ、自分ト犯セシ罪ニ

ハ無之ヲ以水戸辺ニ徘徊スルヲ薄々知りテハアレ共、

不構見逃シ置候由薩藩士葛原〔禊原ノ誤〕吉左衛門・青山喜藤  
太・和田何某等ト懇意ニナリテ、一日或ル茶

屋ニテ宴会セシ時ノ話ニ聞ケリ、同藩ニテハ亡名杯、  
尤モ嚴敷搜索シテ召捕リ嚴刑ニ処スル家風ナルヨシ、  
同氏事最初

ハ奥州岩城平及ヒ四郡ノ内岩前・岩城・  
橋本・標葉ニ徘徊シ、村夫

子ヲ以テ生活ヲ為シ居リ候後、我常陸奥多賀郡ニアリ

テ、矢張村夫子ヲ營ミ居リシ由是ハ多賀郡下孫村長、  
山次郎助ノ直話ナリ、連氏

事平藩儒臣鍋田舍人杯トハ頗ル懇意ナル由、舍人ハ地

理学ヲ好ミ岩城四郡地誌ヲ著シ候由北藩故近藤彦八郎ノ妻  
ハ右舍人ノ女子ナル由

日下部ノ話ニテ先、  
年聞キナリ、マタ岩前郡カ植田村中根與左衛門ハ、

連氏ノ門人ナル由長山次郎介ノ、  
話ニテ聞ケリ、

扱連義ハ自ラ犯セシ罪ニハアラザルモ、脱藩有罪ノ悴

ナレハ容易ニ帰參ハ不相成筈之処、水戸家ヨリノ招会

ナルヲ以テ特旨ノ抱ニ相成候事ナルベシ、旁以テ水戸

家ノ恩恵ハ厚ク徹底シ居リシ事知ルベシ、

觀暮有感

〔蓋〕  
訥齋

对局高才矇若愚 傍觀庸劣眼還寔

請看世態似乎否 愛子慈親尤黯黩

右訥齊翁<sup>(奇)</sup>ノ詩ハ千駄ヶ谷潛居ノ節、夜話ニ道歌ニア  
ル

人の親のこゝろは闇にはあらねとも

子を思ふ道に迷ひぬるかな

ト云フ事ヲ話シタルヨリ、此詩ヲ書テ為見ラレタル  
ヲ留置シナリ、

日下部ハ其学派朱喜ヲ主宗シテ四書六経ヲ収張シ、先ッ  
経学ヲ本トシテ歴史ヲ次トスル学风ナリキ、四書中彼是  
ノ取捨差別ハ不謂トモ、殊ニ孟子ヲ嗜好シ平常能ク被話  
度、該書ノ義ハ仁義ヲ基トシテ王道復興ヲ期スル処ナレ  
トモ、然シ当時分裂割拠侯伯専ラ利ヲ争フ世ニ処シテ、  
能ク古例ヲ採リ、譬諭ヲ設テ其間ヘニ応シ臨機応変ノ答  
ヲナスニ、其好ム処ニ從テ仁義ノ境域ニ誘引シ善政ヲ行  
ハシメントスル、其志ノ天下国家ニ厚キヨリ出テタルニ  
テ、故ニ庶民ヲシテ農業ヲ勸メ百工ヲ来シ、商賈ニ於ル  
機利竜斷ヲ抑ヘ誡メ、其実国家経済要用事件ナレハ、天  
下衆庶ヲシテ感覺ヲ興起セシムルノ其功績大ナリ、然ル  
処動モスルトカノ齊宣王ノ問ヘニ答ヒシ、一夫ノ誅ヲ誅  
スルヲ聞ク、未タ君ヲ弑スルヲ不聞云々ノ語ヲ挙ケテ、  
乱臣賊子ヲ援助スルノ説ナリト唱ヘ、孟子ヲ誹ルハ予カ

不採処ナリ、如何ニモ古賢先哲ヲ強ルノ甚敷事ナリトテ、  
毎度誹孟軻論ヲハ攻撃セリ、既ニ義公ニ於テモ御壯年知  
命ノ頃迄ハ、名義ヲ正シ名分ヲ明カニスルノ処ヨリ、彼  
ノ書ハアマリ御採用無之テアリシカ、晩年西山ヘ御隱栖  
ノ後ハ、農人共杯ヘ対シテハ却テ孟子ノ説カ入り易キ迎  
テ、儒臣ニ仰セテ講議セシメラレシ事ハ、西山隨筆等ニ  
有之云々承リ候事両三度相覚居候、右様ノ意見故孟子ノ  
話ハ時々出テタレ共、其要句摘章等暗誦シ不能候得共、  
毎度能ク推恩時ハ四海ヲ保スルニ足ル、恩ヲ不推時ハ妻  
子ヲ保スルニ足ラス、或ハ明君ハ民ノ産ヲ制ス、仰テ以  
テ事ニ父母ニ俯シテ以テ妻子ヲ齊フ、天ノ時ハ地ノ利ニ不  
如、地ノ利ハ人ノ和ニ不如、仁政ハ必経界自ラス、又ハ  
鉄斧時ヲ以テ山林ニ入ル、五畝ノ宅植之ニ桑ヲ以テス云  
々等ノ話多ク候得共、矢張亡夫連氏モ孟子ヲ好テ講議杯  
セラレタリト話有之候ナリ、

右ハ予等日下部ト多年親ク交リ、且ツ寢食ヲ共ニセシ事  
モ不尠故、其常談平話ニ聞シ廉ヲ挙ケテ逸事ノ一旦ヲ補  
ヒ、諸賢御参考ノ万一二具フル也、

先年天保甲辰ノ国難ニ際シ(烈公譴責ヲ云)、太田及ヒ接

属ノ鄉村ヨリ有志者輩出セシハ、当時士林有志者ヨリ夫々間接ノ誘引等ニ係ル処モ不尠処ナレ共、日下部当地ニアリテ鼓動セシ其功績関リテ尠シトセス、同氏ノ至誠遂ニ人ヲ感動セシムルニ至ル、是マタ愚ナリト云トモ、予等兼テヨリ爰ヘ目的ヲ置候ナリ、不中モ不遠ベシ、

西濱老公ト奉称候ハ、当主大納言齊順公ノ御養父ニ当リ、御退隱後国栖居ヲ願ヒ、西濱ト申ス地ニ隱居被成、長寿九十歳ニ垂々トシテ、見龍院殿〔徳川齊順〕ヨリ三四年後レテ逝去セラレタリ、同老公ヨリ厚ク御依頼モアリ、且ツ見龍院殿ニハ従来水戸烈公トハ御親敷シテ、既ニ日光御臨參中杯モ最モ御親敷アリシ御間柄、旁ヲ以テ水戸事件ハ御担任位ニテ翌弘化二春参府、爾来不措御注意アリタレトモ時機能ク不熟欵、遷引ノ末同三丙午春帰国ヲ引留ニ相成候ニ付、水戸有志者ハ夫レヲ命トシテ頼ミ居リシ処、四月中ヨリ処勞危篤ニ至リ、終ニ五月上旬遠行セラレタルハ独リ水戸ノ不幸而已カ、紀州家ニ於テモ當時意ヲ不得シテ居リシ水野土州等ノ党派勃興シテ、反対派タリシ山中築州始メ、体折退殘忍極リキ泛黜ニ遭遇セシヲ以テ知ルベシ、惟フニ紀公ニ於テ専ラ御尽力アリシモ、門閥々家

ニ窃ニ異議ヲ抱ク土州ノ徒アリ、尾ノ成瀬等ヘ内々喋合シテ幕府奥始メ要路ニ、俗ニ云フ水ヲサスモノ多キヲ以テ遷引シタレトモ、水戸ノ要路ニシテ正徒ニ対スルニ殘酷甚敷処置追々執行セシ故、幕府有志者阿部勢州閣老〔正弘、福山藩主〕ヲ始メ要路者モ、不臣ノ所行トナル点ヘ氣力付キ、同年十二月戸田〔忠愍〕・藤田〔彪〕・今井〔惟典〕ノ三氏、從公辺蟄被逸候事杯ハ、水戸政府ニテモ意外ニ出テ、手切リニテ猶慎ヲ嚴重、其他士民禁囚繫獄等ハ倍々敲勵ノ取締リアリシナリ、

一説ニ紀公ニテハ西濱老公ヨリノ御添辞モアリ、且ツ水戸烈公トハ茲前御親敷モアリシ、旁御義理合モアルガ故ニ、表向ハ只管御尽力ノ姿アレトモ内実ハ夫程ニハ杯、當時種々様々ノ浮説流言モ随分被行タル事ナリシガ、決シテ然ラザル事ハ、此事ニ就テ真ニ尽力周旋セル村越芳太郎・喜多野省吾・遠藤勝介・鈴木春山等ノ傑出家、幕ノ要路紀邸ノ真情ヲ探究セシ人ノ談ニシテ不可疑事ナリト、真ノ有志者ハ頼ミ居リシ処、不幸ニモ前件見龍院殿ノ遠行ニハ一旦愕然シタレトモ、又追々ニ頼ム処出来テ遂ニ君冤国恥ヲ洗雪セシハ、実ニ烈公年来ノ御德誼〔徳力〕ヨリ愛ニ出シナリ、決シテ各自ノ周旋尽力ヨリ此成績ヲ為シタリト云フハ間違ナリト、兼々日下部等ノ誠実家ハ掛念



ノアリシ処ナリ、本文日下部ノ江戸ニ在リテ、多年国事ニ随ヒ周旋尽力セシ顛末ヲ取調ルニ至リ、当時関係セシ實際ヲ挙テ頭書ニ附ス、

(碩力)

日下部カ懇意ニセシ池田 一郎ト申ス儒者ハ、山名家ノ召抱ニテ、同家本所四丁目屋敷内ニ居リ候、同人阿部勢州家来石川和介ハ懇意ノ故ヲ以テ、勢州模様等聞合ノ為メ交際イタシ居リ、時々真情ノ説洩レ聞候事モ有之居リ候処、嘉永二年ノ頃何故カ山名ノ在所但州へ被遣候後出府無之、此事ハ日下部旧交ヲ思ヒ出テシ時ニ話シアリ、日下部駿州岩淵へ身ヲ避シ節ハ、日下部ヨリ我等ヲ招会シテ面会、留守中両三度尋ネ候得キ、至テ徳実ノ人物ト見請ケ申候也、

駿州岩淵

○大村桂藏方へ日下部江戸ヲ避ケ潜居、同家ニ居ルコト四ヶ月出入間ノ処、先方ニテモ同氏ノ着実謹慎家ナルヲ以テ敬服シタルガ故ニ、安政三年辰十二月黒雲兄弟追捕ノ際杯ハ、速ニ援助シテ人数手配り等ノ指図ヲイタシ呉レ候、爾来水戸家館入ニモ相成時々面会、且ツ予等靜岡御雇人中ニ付面会モイタシ、其話中ニモ日下部ノ方正着実ナル事ヲ讚美賞誉セラレキ、

(顯姓) (家名)

○宮崎ト一旦変姓セシモ、薩領封内ノ地名故何カ由緒アリテ假姓ニ附シタルコトナルヘシ、○櫻島ト変姓ノ義ハ小松川ニユクニ就テ設ケタル事ナレドモ、該島ノ事ハ毎々話アリ、其地境界色等ノ事ハ亡夫連氏ヨリ親聞ケルナリトテ、度々話中ニ同島ノ大湾海ハ頗ル大ナル入海ニシテ、縦横共殆ト江戸内海ニ等シク、海陸接続ノ様子迄能ク江戸内海ニ似テ居リ候得共、右内海ニハサシタル島山等無之候処、櫻島ノ義ハ巨大ナル山アルノミナラズ火山モ有之、如何ニモ其後景等亡父カ画シタル略図ヲ見テ愛慕スル処ナリ、予モ此国事挽回ノ後辛ニシテ亡夫ノ故國ニユク事ヲ得ハ、冀クハ此島ニ移住シ度杯話シアリシヲ以テ見レハ、只ニ景色佳絶ナルノミニモアラス、何か由緒アル地名ニモ候半ン欵ト、後來ニ至リ勘奪イタシ候、扱前件該島ハ江戸湾ニ能ク似タリ云々、話ヲ聞ク節ハサマデトモ不存居リ候処、近年発行ノ地学雜誌ヲ閱セシニ該櫻島ノコトヲ明記セル其雜誌中ニモ、江戸湾ニ彷彿タリト其海陸接続ノ景況ヲ挙ケテ論セリ、同書中ニモ一巨山アリ、噴火ノ事ヨリ村落数ケ有之、其風土民情等迄論究シタルヲ以テ、日下部亡父連氏ノ其地理上ニマデニ志ヲ被尺候事ハ、初メテ知ルコトヲ得タリ、目今ノ世ト違

ヒ、昔年ニシテ地理上ノ事杯へ注意セラレシハ、感服ニ不堪事、其志操等誠実ニシテ虚飾無之性質ヲ知ルニ足ルナリ、

○林鋤樂ト日下尤モ懇意ニナリシハ、同人甲州紀典館府甲

勤番士ノ学校守トナリ同地へユク前、淺草新堀組屋敷抹カ借

住村越芳太郎へイトマゴヒニ来ニシヨリ、村越ノ招会ニ

テ予等ト日下部兩人懇意ニナリ、酒ヲ酌ミナカラ暫ク話

中遂ニ備田老東湖先生ノ事ニ及ヒ、滴居中敵重ノ取締向云々ノ

事ニ至リ、四人互ニ落涙シテ話シワカレ、間モナク林氏

ハ甲州へユキシ処、其翌年五月ニ至リ日下部モ駿州へユ

クニ付キ、行路ヲ甲州ニ取リタルガ故、林氏ヲ尋ネ泊シ

テ終夜談話セシ由、其後林氏モ婦ニ付新番組へ出テ勤仕

タリ、日下部従は一層交リ深クナリテ出入セシナリ、夫

レガ縁トナリテ麻布市兵衛町組屋敷住中井數馬ノ抱屋敷

ヲ借り受ケ住居セシナリ、我等モ同断懇意ニナリシ故時

々出入イタシ居リ候、村氏抹カ新番士ニ被召出候ハ初テ以上

ノ旗下ニ相成ル故、正月ニナリテハ支関番ヲ要シ候ニ付、

予等小村潛匿中ノ処被頼玄間番ヲ致シ候事アリ、同氏モ

従来同心附候ヨリ文学上ヲ以テ、段々引立ニ相成候人物

故、旗下士以上以下諸侯藩中夫々有志ノ交際広クシテ、

何レモ交ル処庸俗人ニハアラス、扱日下部一人ノ顛末取調テスラ、如此枝へ条カサシ来リ候、況ンヤ旧名村越芳太郎事後櫻任三杯ノ事ヲ取調ルニ至リ候ハ、実ニ多端ニ涉リテ、我等一己ニテ見聞セシ事計リニテモ、紙數十葉へ概記スルニ至ルベシ、

○本文記載之予等郷里ノ宅へ日下部モ尋来リ、一夕談話中里見八犬伝云々ノ事アリシハ、同人川路聖謨氏邸ニ居リシ時、主人ヨリ日下部ニ命シ八犬伝ノ上摺本ヲ合冊ニシテ三十冊ニ綴チ、夫ヲ川路氏ノ蔵本トシテ奥方等へ常ニ為読候ニ付、爾来借り受ケテ同人妻子等へモ為読候ニ付、自然自分モ熟読イタシ候趣ニテ、大体覚居リ話候処、該八犬伝ハ能ク人情ヲ穿チタルモノニシテ、此国事ニ関シタル身分ニシテハ、其正奸曲直ノ意思ヨリ留離顛沛隠顯出沒、正論有志者ニ至リテハ流言浮説ヨリ冤罪ヲ受ケ、罪無キ身ヲ以テ亡名潛匿、其実邸家君公へ忠孝ヲ尽スニ不出等ノ始末、一層感覺ヲ興ス事ノ談ニ及ヒシナリ、日下部モ従来漢学者故、右様不説物小カ杯ハ最初ハ齒牙ニ不懸シテアリシ由ナリシカ、身国難ニ従事シ辛万苦ノ末ニ至リ、該本ヲ見聞シテ人情世態ヲ穿チ出シタル話ヲナシタルナリ、

亦或ル人ノ実話ニ聞ク、先年ノ名有司根岸肥前守・中川〔衛門〕飛彈守等何レモ芙蓉間勤ニテ、学問誠見ニ富シ人オナルニ、當時有名著作ニ係ル小説読物始メ、京傳・馬琴等ノ草双紙時花歌等迄買上ケテ被閱候由、是程當時人情ノ趣ク処ヲ尽シテ書クモノ故、鴻湖ノ情実ヲ知ルニ足ルヲ以テナリト、

先年江戸住居中或本屋ノ実話ヲ聞シ事アリ、御素人ハ御自分方ニテ嗜好スル書物ヲ開板スルノ御見込ニテ、我々へ御勧誘有之候得共、夫レハ其物好ミ需用ニ供スル位ニシテ、世間売先キ狭シ、本屋ハ時世ニ向クヤ否ナヲ察シテ、是ハ必ス売口広キモノト思フ時ハ、御勧誘処デハナク懇求シテ開板スル事故、表向不濟モノサヘ窃ニ出板シテ、遂ニ官裁罰ヲ受ル事毎々アリ云々、爰等ハ実地ノ話ナリ、前件川路氏杯モ該八大伝而已ニ不限、世ニ広ク流布スル小説物等ハ、定テ閲覽セシ事明カナルベシ、段々枝ヘ条ヲ出シ、ケ様ノ話迄ニ及ヒシナリ、宜敷御推察可申候也、

日下部伊三次国事周旋セシ節、他所人ニシテ同議者交際セシ人々ノ姓名、予等覺居候モノヲ左ニ挙ク、幕人ニテ尾藤鷹藏・御牧又一郎・林伊太郎・神谷麗三郎・高松

彦三郎・安藤傳藏・中西忠藏・松平又十郎、諸侯藩士松代ノ家来佐久間象山・山寺源太夫・澁谷秀軒、安中藩添川寛平・海深順藏、田原藩鈴木春山・松岡次郎・小林何某、津山藩箕作元甫、紀藩遠藤謙介・長澤清衛門・井上徳三郎・渡邊渥美・何某魯補、尾藩山崎元蕃、土浦藩大久保要人・藤田央本、元藝州家来大島長兵衛、其他旗下士及家来等ニテハ勝野豊作・安食大太郎・杉山藤七郎・戸ヶ崎熊太郎・長谷川總衛門・中井數馬、町人ニハ榎屋新六・伊勢屋新右衛門・川村權之介・多田屋又兵衛・池田碩一郎・蒲市正、此他予等不知分モアマタルベシ、川路氏隨身被成、且ツ薩藩召後之交際等ハ予等ノ不知処ナリ、前書ノ外モ猶遺洩アルベシ、

先頃士族酒泉氏へ懇望ニ付、日下部ノ遺書ヲ送リシ、其末書ニ彼ノ川村ニ至リテ、例ノ集義ノ盃ヲ酌ミ乍ラ緩々御相談可申云々等ノ語アリ、右ヲ始メ酒泉氏不解ケ処四五句有之ニ付注解ヲ附シテ云々請求ニ付、右等ノ廉々別記シテ遣シ候、川村權之介ハ四谷門外ニアル茶屋ニテ、兼業ニ尾州ノ飛脚宿ナル処、此主人義使者ニ付、鈴木春山ノ門人尾州ノ官医山崎元蕃水ノ事件ニ周旋中、川村談シテ二階ヲ借受ケテ、爰ニ集会会宿泊迄イタシ候、潜伏者

ノ為メニハ頗ル恵ヲ受候家ナルヲ以テ、追々国事モ恢復ニ至リ探索等ノ患モ無之、時々際々夫々謝礼スルニ金員ヲ以テセシ処、当主人ノ曰ク、是ハ実ニ難有、併シ乍ラ冀クハ外ニ何カ跡ヘ残リテ、有志家ヨリ御贈惠品ナリト子孫迄伝フルモノヲ欲シキ由ニ付、日下部ト兩人ニテ相談シテ、集義ト金泥ニテ焼付シ三組陶器盃ヲ贈リシ事アリ、我等日下部ト当家ヘ相談杯ニ会スル時ハ、必ス其盃ヲ出シテ酒ヲ酌ミシ事アリシナリ、此集義ノ熟語モ迄ニ孟子ヨリ出タル様ニ被話候得キ、

### 三三七 参考 訥齋日下部先生墓碑面

○この文書の前半は、「鹿児島県史料 斉彬公史料」第二巻の第三九五号文書（訥齋日下部先生墓碑面・日下部婦人加志村氏墓・日下部父子其他就獄）と同文重複により略す。

### 履歴概略

#### 鹿志村準藏事

#### 重 信

文化十四年丁丑四月五日生

一天保十一年庚子二月鹿志村家ノ養子トナル、実ハ日下

部伊三次ノ次弟ナリ、

一全十二年中南郡ノ吏トナル、全十三年西郡ヘ廻ル、其後留附列ニ被召出タル年月、及ヒ格式御文庫ノ役列、西郡勤並ニ町与力・御番与力等ニ転役セシ、年月日不詳、

一明治元年戊辰八月十一日第十等物産署主事被申付、  
一全年十一月十二日民政局勤御藏地出張元取被申付、

但シ等級如元、

一全四年辛未六月十四日開墾掛リ被申付、水戸藩庁ヨリ、  
一全五年壬申六月十三日茨城県等外四等出仕被申付、

但シ租税心得、

一全年十一月二十四日等外三等出仕被申付、

一全六年九月十日等外四等出仕被申付、

一全七年五月二十五日等外三等出仕被申付、

一全年十一月三十日出仕被免、

一全年十二月二十日、満二年以上奉職勉励ニ付金八円下

賜、

一全八年五月十四日常盤村戸長被申付、

一全九年六月十日学事兼務被申付、

一全十一年中願之上戸長被免、月日不分、

一全年十一月二十一日死亡、享年六十年八ヶ月、常盤村

神崎寺域内ニ葬ル、

以上、

調ケ条之内

一 伊三次妻ハ何方誰ノ娘ニ候ヤ未タ分リ兼候、

一 同人ヨリ出生之子何人男、亡男裕之進ト海江田信義ノ

妻トナリシ女子ノミナリ女（海江田妻故アリテ離縁セリト云

一 此未亡人ハ今以存生カ、当十四五年前薩州ニテ死亡ス、

年月日不詳、

一 海江田議官ノ妻ヨリ出生ハ、男子一人ニ女子四人ナリ、

但長女ハ東郷平八郎ノ妻トナリ、次女ハ苗字税所篤

文ノ妻タリ、其余ノ三四女ハ未タ嫁セス、○長男

孝吉義ハ、当明治二十四年二年甫僅ニ二十一才ノ由、

一 故鹿志村準藏事重信ノ家ニハ、実兄日下部伊三次ノ書

翰類見ヘス、僅ニ左ノ遺墨存スルノミ、

去留本誓一其婦休怪尋常双鯉稀感慨志雖存紹繼夢現

時繞故山飛

旧作 九泉陳人

丁未七月十九日慨然而歌云

君能為父之為又世乃為仁都久寿心耶天地之為

翼

丁未十月十四日

出窓静座憶奇容感慨当年行事蹤丹衷常言羞素餐白雲

祇合伴青松且期紹繼修余業豈料隱憂勞縫弥綵為遺靈

垂保祐再生庶幾仰時雍

くれ竹のマアせおきふしうき世にも

今日も心の手向をそする

翼

おもへたゝ君がみためとなりもせば

命にもまた名にかへむと

右何レモ色紙へ書セシナリ、今表装シテ軸物トナス、

此外ニ左ノ一書アリ、御扇面ノ画ハ何ノ花ナルヤ不明、

但シ落閑ハ信親□□トアリ、左信ノ字々体不分明ナリ、

嘉永五壬子歲閏二月七日

三條大納言實萬卿賜画扇十柄之一送寄以分恩惠云

全月既望 □ □

又外ニ左ノ詩歌等ヲ寄セ、石槽トナシタルヲ掛物ニ

表装シテ所藏セリ、

但唐紙半折ナリ、

心たに誠の道にかなひなば

祈らすとも神は守らむ

忠臣孝子不為明々信節不為冥々情行仁人義子不以盛衰改節不以存亡而心

〔齋〕  
納齋□□

一書致呈上候、秋曙之御弥御清健ニ可被成御起居珍重之御事ニ奉存候、老兄之尊名久々御慕申居候間、得拜眉度存候所、久々北遊等モ不致、無其儀ニ御南行モ被成候ハ、御犯願希ニ先日之御答旁勿々如此御座候、時下秋熱折角御自玉被成候様可有御座候、恐惶謹言、

七月十七日

吉成又衛門

信貞〔花押影〕

日下部連様

人々御中

天保庚子十月十四日

納齋日下部君逸詩

西風一夜破芳蘭聽此愴然傷肺肝故国半生勞夢想大邦

幾歲棠盤桓不嫌逐客流離苦且喜孤臣節操完自有君家  
鳴鶴在雲間行見伍鶴鸞

豐田亮草

故郷繪不問西国復南州逸足冀中北斷蓬方外秋志如金石堅道有詩書留四海皆兄弟莫愁孤遠遊

酬

〔部脱カ〕  
日下崇義兄見寄

去年之作不録呈在篋裏久矣頂者得之不堪恐駭漫  
写拜贈無罪於意緩則幸甚

文化戊辰正月 天下野愚鈍子虛木村謙次郎錄

安政三年丙辰十月九舉堂藏

鹿志村重信君之墓表案

君諱ハ重信、字ハ白龜、始メ準藏ト称ス、父ハ海江田氏、  
日下部訥齋先生ノ二男ニシテ、母ハ加志村氏、文化十三  
年四月五日生ル、歳二十四ニシテ、鹿志村忠兵衛君ノ第  
三女伊豫ニ配シテ贅養子トナル、二男五女ヲ生、長女・  
二男・三四ノ女皆幼ニシテ亡ス、五男重政二十四歳ニシ  
テ病ニ罹リ、茲年一月先テ卒ス、六女大津氏ニ嫁ス、七

女ヲ以爲相続ト、君爲人実直剛毅從事孜々トシテ倦ムコトナシ、旧藩中郡務方ヲ勤テ諸事ニ関ス、

御一新後茨城県庁等外三等出仕租税掛リト爲リ、改政後常盤村戸長拜命、十年冬ヨリ罹病、依願免セラレ、病痼終ニ明治十一年十一月二十一日歿ス、享年六十有二、世系訥齋先生ノ墓表ニ具ナリト云爾、

時干明治十三年十一月二十一日

養子

鹿志村留之介建之

祖父連ハ明和六年己丑二月九日鹿兒島府内之丸ニ生レ、清水馬場ニ住居ス、寛政九年丁巳正月江戸ニ至ル、同十年六月御留守居役(留守居系凶ニ見ルコトナシ、考フルニ留守居方附役ト唱ル職アリ、留守居役属役ナリ、蓋此職ニ居リシナラム乎)ヲ務ム、時ニ久シク世治ル、上下酒色ニ耽ル、独リ連ハ堅ク節ヲ守ル、故ニ屢々讒謗ニ逢ヒ、遂ニ仕籍ヲ去テ水戸ニ赴キ、川尻ノ某寺ニ潜ミ、住寺ノ世話ニテ門人ヲ集メ、学問指南ニ世ヲ送リツ、アリシ其頃日下部ヲ名ル、或ル人ノ世話ニテ、二階堂伊賀守ノ子孫ニテ櫻村ニ階堂姓ニ復ス某ノ娘ヲ向ヘ、長男伊三次・二男準藏・三男渡出生

シタリ、伊三次十九歳ニシテ、水戸多賀郡ノ手綱村士族醫師山形某ノ養女靜子ヲ娶ル、其前後中納言公太田村ニ学館ヲ立テラレ、連ヲ以テ館長ニ揚ケラレンコトヲ御近侍役ヲ以テ申付ラレケルニ、連申上ルニハ忠臣ハ二君ニ仕ヘストノ古諺ニ随ヒ、自分ハ御受仕リ難ク候得共、俾伊三次ヲ御使ヒ下サレ度ト願ヒシニ、御聞濟ニ相成リタリ、則チ御役仰付ラレ、當時ノ門人凡三百人位アリシト云フ、祖父(連)ハ月三回位講義ノミニ出館ナシタリ、時ニ伊三次二十一歳ナリ、二男準藏ハ水戸藩士鹿志村家ヘ養子トナリ、三男渡ハ多賀郡松岡藩士族高橋家ヘ同断、伊三次二十一歳ノ時、乃チ天保七年二月十三日長男裕之進出生、天保九年長女「クメノ」生ル、同十一年八月三歳ニシテ夭死ス、祖父連モ同年十月十四日享年七十三ニテ死去、天保十三年五月二十四日二女「マツ」生ル、弘化元辰年前中納言公寺院ヲ毀タシメケレハ、姦人等ノ讒訴スル所トナリ、公義ヨリ閑居仰セ付ラレ御謹ミアラセラル、是ニ依リ家老戸田・用人藤田・吉成、其他十七人モ揚屋入りニナリタリ、其義ニ付キ伊三次ハ、中納言公御初メ、戸田・藤田ノ免罪セラレンコトヲ、紀伊大納言公ヘ直訴ナサンカ爲メ、太田学館ヲ出奔ナシ、願書ヲ奉呈

セシニ御請ニハナリタル由、サレト水戸藩ヨリハ、我カ主君ノコトヲ他家へ申出シハ不都合ナリトテ、館長ノ役ヲ召上ケラレ、且ツ日下部ヲ召捕ントテ画姿廻リ、江戸住居モナリ難ク、府中淺間ノ神主元水戸ヨリ養子ニナリシ築地三郎四郎ト云フ人ノ家ニ潛ミ居タリ、伊三次・母・妻・裕之進ノ四人ハ、乍チ生計ノ道ヲ失ヒケリ、故ニ伊三次ノ同輩勸メテ言ヘル様、伊三次帰宅ハ幾時ナルヤ期シ難ケレハ、老母ハ裕之進ヲ引連レ鹿志村家へ到ル方宜シカルヘシ、又靜ハ其時二十八歳ナレハ、「マツ」子同道ニテ一先ツ里方山形ニ帰リナハ宜シカラスヤト、靜子曰、先祖ノ位牌誰レカ祭ルヘキヤ、又親子兄弟分レクニナリテハ先祖ヘ対シ相濟マス、只タ此上ハ皆様ノ御厄介掛ケマジク、力ノ及ブ限リハ自分一身ニテ働クヘント申シケレハ、其決心ナラハ素ヨリ御随意然ルヘント、同輩ノ諸士謂ハレタリ、

此時幸ヒ鹿志村家ヨリ水戸城下へ出ツヘキ様申越サレ、家ハ伊三次同僚小松崎平八郎ト云フ人、此度田舎へ引越ニ付、其跡ヲ貸シクセラレントノコトニテ、親子四人出テ、住居ス弘化元年辰三月、日詳ナラス準藏謂ハル、ニハ、我レ養子ノ身ニシテ、且ツ両親モアリ、家事モ心ニ任セス、然レト

モ母上丈ケヘハトテ、毎月自米若干ヲ送り越サレタリ、靜・裕之進・「マツ」三人ノ食料ハ、靜子昼夜機織リ仕立物等ヲナシ、漸々子供ノ養育ヲナシ居タリ、斯クシテ六年ヲ過セシカ、嘉永元年申年四月裕之進ハ、筑波山下ニ住スル小林寒林ト云ヘル人ノ許へ、学文修業ノ為ニ頼ミ越シタリ、嘉永二年四月江戸伊三次方ヨリ書状到来、龜井戸天満宮ノ神主某ノ保護ニテ当地へ罷出テ、目下同家ノ裏門乃チ屋敷ニ、社守ノ名義ニテ住居致シ居リ、當時ハ世ノ中モ少シク穩カナル故、家内一同出京致スヘキ様申越シタレハ、之レニ応シ直ニ一同打揃ヒ立越シス、翌年十二月小松川今ノ南葛飾郡ナリ渡邊某依頼ニ由リ、学問指南ノ為メ同所へ引越シタリ、門人七八十人、時ニ裕之進モ出府同居ス、嘉永五年二月頃、徳川家御勘定奉行川路左衛門尉ノ依頼ニ依リ、伊三次ハ御小納戸役（事実誤レリ、代々御小姓組ニ御召抱トナリ職務ナシ、御抱書ノ如シ）ヲ客分ニテ勤ム、裕之進ハ中小姓ヲ同シク勤ム、翌嘉永六年亞米利加軍艦七艘浦賀ニ来ル、其時伊三次親子モ川路殿ノ御供ニテ御本丸へ登上ス、水戸公ヨリ大砲七十五門ヲ公義へ献セラル、長崎へ川路殿談判ノ為メ出張、伊三次モ随行ス、安政元年十二月川路殿小石川水戸家近所ニ引移ラル、安



政二卯年五月項中納言公、戸田・藤田ノ両氏モ世ニ出ラ  
〔頭注〕權山實之日記ニ詳ナリ  
 ル、日下部へ帰參致スヘキ旨、水戸ヨリ御沙汰アリタル  
〔自九〕  
 ニ由リ直ニ出立ス、其時願書出セシニハ、亡父連遺言ニ  
 ハ身分モ老体ナレハ帰魔モ出来兼ニ残念ナリ、伊三次ハ  
 是非トモ薩摩へ下リ、島津家へ帰參ノ上父ノ汚名ヲ雪キ、  
 且ツハ忠勤致シ呉レル様申置ニ付キ御暇願中ニ、同年十  
 月二日ノ大地震ニテ祖母庄死シ但伊三次留守中タリ、直ニ裕之進  
 靜ヨリ、戸田・藤田両家へ相談ノ使ヲ走ラセシニ、是又  
 両氏共天変ニテ即死ノ旨ヲ復報ス、更ニ驚キ致方ナク伊  
 三次へハ飛脚立タルニ、四日朝伊三次・準藏・渡三人ニ  
 テ上京、兼テ祖母ヨリノ遺言ニハ、死去ノ後ハ江戸ノ土  
 ニ成ルヲ好マス、是非ニ水戸ニ葬リ呉レトノコト故、遺  
 骸ハ水戸へ持帰り、弟鹿志村家ヨリ常業神崎寺へ埋葬ス、  
 二三日後レテ川路殿へ暇致シ、家内中水戸へ行ク、同十  
 二月再度御暇願上ケシニ無拠御聞濟相成、御書付ニハ、  
 伊三次事今日迄水戸家へ対シ忠勤致シ候モノ故、此上ト  
 テモ召使ハル、筈ノ処、亡父ノ遺言ヲ守リ薩州へ帰り度  
 旨上進、無拠思召サレ御聞届ケ相成御暇下サル、トノ文  
 言ナリ、右ニ付キ金子二百円下賜サレタルニ、御暇致ス  
 身ノ斯ル金子頂戴致ス筈ナシ、御書付中亡父ノ遺言ヲ守

リ帰魔スル段、無拠御聞濟相成趣キノ御文面ハ、金子如  
 何程頂戴スルヨリモ有リ難シト申出、再三辭退ニ及ヒケ  
 レハ、然ラハ旅費トシテ金三十円下サル、トノコトニテ、  
 右拝受ノ上帰京ス、時ハ十二月末ナリ、此度ノ住居ハ川  
 路殿弟内藤三郎殿長家借用、暫時住ス、其翌安政三年六  
〔頭注〕權山實之日記ニ詳ナリ  
 月初項、薩州公ヨリ水戸家へ御掛合ノ御状ニ、伊三次親  
 海江田ナルモノ、其御地へ參リ御扼介ニ成リ居リシトノ  
〔頭注〕治左衛門ハ次左衛門ノ願ナリ  
 コト、此度御側役中山治左衛門ヲ以テ申出タリ、同連ハ  
 当家上向キニ於テハ何事モ落手ナシ、故ニ其子ヲ呼ヒ帰  
 スモ差支ナシトノ事ナリ、水戸家ヨリハ、此方ニテ日下  
 部ト申ス者ハ当家へハ一方ナラサル忠勤ノ士ナリ、故ニ  
 追々篤ク用ヒ行キシ処、亡父ノ遺言ヲ守リ帰魔ノ願ユエ、  
 余儀ナク御帰シ申候ト、両公ヨリ御文通有之タリ、御兩  
 公ノ御手紙ハ日下部ノ宝物トシテ、中山殿ヨリ御取付ニ  
 テ下サレタリ、其年六月十四日頃多年望相叶ヒ御呼帰シ  
〔頭注〕糾合方トハ藩邸内ニ在ル學校ノ仮名ナリ  
 ニ相成、糾合方仰付ラレタリ、此時家内ノ喜ヒ譬へン方  
 ナシ、裕之進モ中小姓ヲ仰付ラレ親子毎勤ス、翌安政四  
〔頭注〕補  
 年六月頃麻布我善坊谷へ家作買入レ、其年無事、安政五  
田ハ鎌田ノ誤、三浦江在呼ノ因老、僧月照ノ頼介ニテ近衛公ヲ以テ密勅ヲ奉シタ  
年六月薩州公ヨリ蒲田出雲守ヲ以テ、御内用ヲ蒙リ西京  
リ、安政五戊午七月十五日夜死ス  
 へ御使、三條・近衛公願云々、薩州公六月初メ御帰魔、

同七月十六七日頃御死去、伊三次ハ八月二十六日方帰宅、九月二十八日朝町奉行ヨリ召シ取りニ成ル、即日ヨリ揚屋入、十月五日裕之進モ町奉行へ呼出ニナリ、芝西向屋敷へ御預ケニナル、家内一同西向へ引越シ、屋敷ハ公辺へ取揚ラル、宅番川路某外二人付、同年十二月十四日頃伊三次病氣ニ付キ、奥州湯長谷ノ城守内藤某殿へ預ケララレタル始末後日聞ヘタリ、毒殺トモ云フ、安政六年十月二十六日裕之進評定所ヨリ呼ヒ出シアリ、其前夜中母靜ヲ起シ、明日ノ落着ハ多分帰宅ノ義覚東ナシ、軽ケレハ遠島、重ケレハ死罪ト考ヘ候、右ニ付養子ノ義ハ有村家ヨリ貰ヒ、妹まつへ相続成サレタシト遺言シタリ、果シテ親ノ罪ヲ以テ遠島仰付ラレ、其場ヨリ揚リ屋入りニナリタリ、此時宅番引払フ、申歳閏三月三日裕之進牢中ニテ死去ス、(頭注)兼殺セラレタリト云

安政七申歳一月二十九日水戸藩佐野竹之助、二月二日黒澤三郎、有村兄弟雄助・次左衛門、田中直之進、伊地知壯之丞等ヨリ潜マイ呉レル様、靜へ頼ミニナリタリ、依リテ御留守居役西築右衛門へ届ケ、水戸ヨリ弟並ニ甥兩人此度伊三次親子大難ニ罹リ、遠方掛ケテ心配ノ余リ上京ナンタリ、留メ置キテ宜シキヤト尋ネタルニ、御親類ノ上京ニ付テハ少シモ御氣遣ヒ無之、御留置ニテ宜敷ト

ノコトナレハ、佐野・黒澤兩人二階へ潜マイス、同二月末方又々兩人帰国ノ旨西氏へ届ケタリ、其実三月二日夕方御門ヲ出テ愛宕山ヲ心指シ出立ス、三月三日云々、右事件ニテ靜子度々調べニ逢フ、文久元年九月二十一日江戸出立、鹿兒島へ行ク、同十一月二十日奈良原喜左衛門(頭注)樺山資之護シテ下獄、全氏日記ニ詳ナリ今ノ奈良原宅へ着ス、吉井幸助氏(今ノ宮内次官)ノ屋敷ヲ取り入レ、有村家ヨリ養子ス(今ノ海江田信義)、十二月十五日ヲ以テ吉井・奈良原・本田夫婦媒人ニテ婚姻済ム、翌年文久二年一月旧姓海江田ニ復リ度段願ヒシニ聞キ届ケラレタリ、同年九月二十八日長女鐵子出生、慶應元年丑九月二十三日二女榮子出生、明治六年一月二日三女春子生ル、明治七年八月十九日靜子死去ス、信義在京中不在ニ付遺言アリタリ、

明治九年六月奈良原氏同行ニテ上京、飯田町三町目十二番地元海江田屋敷へ安着ス、翌十年七月廿七日長男信磨出生、同九月十八日死去、翌十一年九月九日四女秋子生ル、明治十三年七月廿七日二男幸吉出生、其後事件アリ、(頭注)聞ク如ニ依レ、八間門ノ爲藤ニリ離別シ、信義ノ末弟有村義氏ノ籍ニ入ルト云フ今牛込区市ケ谷々町百廿二番地へ住ス、信義ハ現今東京府下南豊島郡中澁谷村ニ住居ス、長女鐵ハ海軍大佐東郷平八郎へ縁付、二女榮ハ陸軍大尉税所篤文へ嫁ス、三女

春ハ海軍少尉東郷吉太郎へ婚姻ノ約整へ居レリ、

一日下部連多賀郡伊師本郷(今櫛形村大  
字伊師本郷)ニ寓居中、文化十

二年乙亥伊三次(翼)生ル、全十四年丁丑四月五日準

藏(重信)生ル、又同郡山部村(今ノ黒前村  
大字山部)ニ寓居中、

文政二年己卯十一月十三日渡(種英)生ル、

一伊三次ノ室靜子

松岡藩土山形玄的ノ養女、実ハ大塚村柴田六左衛

門ノ次女、

一伊三次ノ長男裕之進

天保七年二月十三日生ル、萬延元年閏三月三日獄

中ニ没ス、

長女クメノ

天保九年某月日生、全十一年八月天死ス、

次女マツ

天保十三年五月二十四日生ル、即チ子爵海江田信

義ノ室(前卷ニ記シタルカ如シ)

一伊三次江戸潜居中、則チ弘化元年辰三月(日不詳)家族

一同水戸ニ移ル、

一伊三次ノ家族江戸へ移居シタルハ嘉永二年四月ナリ、

母英子ノ死去シタルハ安政二年卯十月二日、東京ニ於  
テ死亡セシニテ(彼ノ大地  
震ノ年)未タ薩へ帰藩前ナリ、

一伊三次死去後薩藩有村氏ヲ養子トセシハ、即チ今ノ海

江田信義子爵ナリ(有村雄助・全次左衛門ノ  
兄ナリ、大久保日記參看)

一高橋渡ノ松岡へ養子トナリシハ、天保元年庚寅(月日不  
詳ナリ)

一日下部連碑文中ニアル墓誌、及伊三次母ノ碑文中ニア

ル擴記ハ別紙写ノ通りナリ、

一烈公御手許ヨリ下賜セラレン左ノ御歌色紙、并ニ慶喜

公御手許ヨリ下賜セラレン分共、現ニ海江田家ニ於テ

所藏致居候、其他詳ナラス、

景山公御歌

武士の名を後の世につたへ南

命もかきりなりとおもへば

慶喜公御歌

後スベつゝに海となるべき山水も

しばし木の葉の下くぐる也(此歌ハ取敢へス記)

シ玉ヒシモノナルベシ、香川景樹カ歌ナリ、桂園一

枝ニモ載セタリ)

一伊三次潜居之前後国事ニ関シタル書類・手簡等ハ、同

一伊三次潜居之前後国事ニ関シタル書類・手簡等ハ、同

人捕ハレニ付カントスルニ当リ燒棄シタルヤニテ、今  
海江田家ニ存スルモノ無之ヨシ、拙宅ニ現存スル手簡  
〔頭注〕標山資之カ家所藏アリ、此末ニ記スヘシ  
等ハ有之候得共、格別ノ要書モ無之、其内ノ五六全ク  
御参考迄ニ別紙ニ写取リ御廻申上候、

一伊三次ノ墓碑ハ、東京品川海曇寺内ニ建設致候得共（  
三田瑞祥寺）、別紙碑文無之候、  
ヨリ改葬）

（墓誌）

先考諱崇義、字景仁、称連、号訥齋、其先日下部子麻呂、  
天平中、以山背守討惠美押勝有功、事見国史、裔孫有日  
向、食海江田勝岡二邑、因称海江田氏、應永甲辰為薩人  
所逼、遂去城、三世孫九郎左衛門君諱某、始來薩州、賜  
小山田里、孫君某、始入為庶士、食二百石、八世為字体  
父小左衛門君諱信有、為硫黃島檢者、考伊三治君諱信明、  
職至世子伝、傳カ聚野元氏、生先考、以扈從隊為造士館句詭  
師、後為江戶櫻田邸副留守、數年去邸、蓋避讓世、乃來  
寓常輿之間、平侯・泉侯並辟、皆不就、天保丁酉、水戸  
建益習館於太田、聘為館監、辭不起、字体既不明吾在水戸封  
内者三十年矣、飯欲潔己、奈国恩何、雖然吾老矣、有子  
孫由之、或以報有道之恩、則吾願也、遂就職、今茲庚子

疾、自夏陟秋、越十月十四日終於館舍、享年七十二、葬  
馬場新賜地、先考為人有儀容、天資忠実、温厚有法、少  
好學、奉程朱之說、著書數十篇、武技最長干槍、文政中  
夷船來在於海上、久而不去、字体海諸侯各出衆戒嚴、先  
考時在泉侯封内、自至其營、請竭膂力之用、先考既違邦  
教授以自給、窮約不經心、教導子弟、字体不倦、其忠字体  
之心、數十年蓋如一日、字体鶴等諱叙其所由、哀哉、子  
鳴鶴謹誌、

（壙記）

先妣諱英、初名花、其先二階堂伊賀守義賢、住久慈郡富  
岡、十四世加志村久行始移多賀郡山部、廿世為諱昔行君、  
娶下山田氏、先妣其長女也、嫁先考訥齋日下部先生、生  
三男、長翼、承家、仲重信、為鹿志村重則嗣、季種英、  
為松岡高橋近義嗣、安政二年乙卯十月二日先妣病没、年  
六十五、越十三日、葬神崎寺、先妣貞順、能勝苦辛、甲  
辰之厄、寒夜徒跣、詣神禱雪大冤、勸婦教育二孫六年、  
翼之出外報国、其賜也、初天保庚子十月十四日先考終太  
田学館、葬馬場、今日初七日翼等請官、改葬于此、以安  
尊靈云、

乙卯仲冬

昨年春夏以來良久打絶御文通モ不致、御床敷奉存候、無<sup>無</sup>御案<sup>わ</sup>シ被下候半、元來困難ノ儀、昨暮ヨリ昨早春迄ハ頗ル順ニ相向ヘ候処、豈料意外ニ内外之变故出来苦悶難尽筆紙候、国元ノ儀ハ多分事柄見本之通り先ツ申サハ、正氣モ是キリカト存候位、此時ニ至リ正奸判然ト相分リ、柔弱ノ者ハ旗色ヲ見テ奸ニ属シ候モノ笑止千万ナリ、去三月ハ拙事最早ナキモノト覚悟致シ候処、却テ不可死之事ニ相成候、依テ別ニ得ト思慮ヲ廻ラシ、持久ノ計ニ相定申候、始終周旋候事モ行届不申哉ニ被存候、益々奮発、八月頃ヨリハ少數見直シ候模様モ有之、漸々一陽來復ノ氣候ヲ覚申候、去臘朔日国君御任官、同二十九日兩殿ノ蟄居モ幕府ヨリ御免ニ相成申候、奸人ハ却テ是ヲ憂念可致哉、尚更油断ハ不相成候、拙之意中御察シ可被下候、時々御文通モ申度候得共、於大事却テ危候間大体ノ事ハ相略申候、

(中略) 拙艱難中著述教篇出来候、其中素鷲寓筆一部追テ淨書御廻シ可申候(以下略ス)

正月三日(弘化四年)

三白、讚州ノ儒臣赤井源藏ト申仁、君候ニ上書イタシ、御家之事ニ骨折申候、実ニ可感事ニ候、其ノ文ハ追テ為御見可申候、随分御同志中御咄シ伝ヘニ致度候、新禧御同慶ニ存申候、御一同御安全御重歳目出度申納候、旧冬一書慥ニ相届候哉、若シ御出ニモ相成哉ト心得イタシ居候得共、定テ御繁勤不得止義ト御察申候、兩國事未平候ニ付痛心止ミ不申候、此度モ内々事情相探申度南発致候、乍然容易ノ事ニハ不參候間、随分念入周旋可致ト存候、扱各其君ニ忠ヲ尽ハ貴賤ノ差別無之候処、此節御主人様御立場ハ、於邦家御大切ノ時節ト存候、一国ノ人望ヲ得モ失モ此時ニ候間、其臣トシテハ宜敷御補佐シ、上々卿ノ御任ニ応シサセラレ候様仕度奉存候、是ハ聊カ私意ヲ挾論シ候テハ不相成、公明正大ノ議論ニ無之候テハ不得其当候間、能々御思慮随分御忠節御立可被成存候、非常ノ事ハ世之小人ニハ相分リ不申モノニテ、天下後世具眼ノ君子ノ定論ノ目当ト致スモノニ御座候、必々君子三人ト相成候様御心懸專一ニ存候、委細ハ目出度会面之節御咄可申候、不悉、

正月四日(年号不詳)(弘化二年敷)

追書略ス、

一書致啓上候、寒威相募候処萱堂御始皆々様御揃御安健被為成御座珍重奉存候、拙事モ無恙罷在候間必々御案シ被下間敷候、唯国窳未洗雪日夜寝食ヲ不安尺微中罷在候条、御察可被下候、去月モ余程好消息相聞候へハ、今明日ト奉欣望候御儀モ有之候処、奸徒ハ窮鼠之勢、二礼モトウシ相破ラレ候由、今少之処ニ至リ残念之事ニ御座候、然シ是ハ如何ニテモ先ヨロシク、唯我君之不軌ヲ御企ナド、趾形モナキ讒説ヲ構ヒ、此国難ニ至リ候儀ハ汚名ヲ雪メ不申候テハ決シテ相濟不申候間、近来之嚴酷ニモ聊カ懼レ候事ハ無之、一息モ存シ候内ハ御開明ヲ相謀候事ニ候得共、幸此儀ハ御懸念ニ不及候、乍去泰佃ニテ(田ノ意)、母君如何計御案シ被下候半、且妻兒等夫々心配候儀ハ察居候得共、兼テヨリ御承知ノ了簡ニ候得ハ、是亦於拙アキラメ居候、臨機応変未練之沙汰不受様、御序御勵シ置可被下候、

一先月十八日微邸へ

幕府御成、十九日御礼御登城、至極之好キ御模様奉伺

候事、

右ハ至極秘密、如何様之親友ニモ御他言決テ致スマジキ事、

(中略)

霜月二十七日

一筆致啓達候、暖氣之節愈御揃御安健珍重奉存候、拙事御存知之志願ニテ、正月四日水陽へ年礼ニ罷出候ヨリ打続キ南出イタシ候、大略、正月九日江府ニ着、用向滞リ二十三日江ヲ発シ、二月八日紀州若山ニ着、二三日旅宿ニ苦シミ(國法ニテ士人ノ獨行止宿ヲ許サス)、玉津島神社ノ社前ニテ願書清書致シ、同十二日御用人仁井田模一郎ト申仁ヨリ写本二冊ヲ呈シ、執政山中筑後守殿へ推參願書差出候処、筑州登城ノ留守ニ付、用人山口兵馬ト申スモノ早速城内へ願書相届、夫ヨリ町奉行へ御達シ旅宿被仰付(十一日)、十一日マデ御陪被下、同十五日御用人宅へ被招内論有之候御手厚キコトナリ、同十五日御用人宅へ被招内論有之候ハ、願之趣早速君公一位公(是ハ君公ノ父君西)ノ御聴ニ達シ、御含ミモ可被遊トノ御事ニ付、何レ近日表向御達可有之候間、其節ハ引取可然トノ御事難有存候旨答へ旅宿ニ帰ル、同二十日山中氏ハ君公御発駕前(二十二日)、御発駕三(御発駕三)月九日御參)繁多ニ付、仁井田宅ニ於テ表向御達ニナル、

依テ二十一日城下ヲ薙シ、京師へ廻リ伊勢へ参詣、当月十日江府迄罷下、尚又要用有之今以潜居致居候、扱愈々用事片付候へハ、潔ヨク国法ヲ受候積リ、左様相成候上ハ存亡ハ天ニ候間、万一之事モ有之候節ハ、家事仲兄ニ御謀リ宜敷御頼申候、何分母上様御心ヲ御慰メ申候事專一ニ候へ共、拙此度之一挙モ不得已忠義ノ為メ、元ヨリ忠孝兩全ト申事ハ中々成シ難キ事ニ候間、宜敷御推察万々御世話御頼申候、近日又々良便可有之候間、可申述様不悉、

三月廿七日(弘化二年)

(前略) 扱紀陽之首尾ハ殊之外宜敷候如ハ、大略御存知之通ニ候処、何レ隙モ取レ候故果決之一挙可致ト、彼御文通ニモ及申候得共、能々了簡イタシ候得共、大事之儀故、中々我カ思フ様ニ計リ神速ニモ参リ申間敷、一旦紀陽へ御願御受ノヨロシキ所、余リ迫リ候様ニテハ恐入候筋ニモ相当リ候間、先々熟慮之上、全ク成功相成候様可致ト是ニ一決イタシ候、然ル処近々紀邸へモ通行、遠藤勝介ト申儒官豪傑ノ士ニ交リ、御左右伺居候内、本月十九日太守様、奥御登城首尾能被為濟、朝ヨリ黄昏迄之御對話

被遊候由、就テハ頗ル吉兆奉伺候間、先ツ安心之方ニ相違無之候、依テ夢中ニ右之御事ニ付帰国致シ、又速ニ帰府致シ候儀ヲ覚申候、委細ハ後信可申述候得共、何分御懸念無之様御頼申候、然シ勝テ兜ノ緒ヲ締ルト申診モ有之候へハ、ヨロシキ程尚々勉勵可致ト存候、準臧ヨリ承リ候処、御辺モ何カ良策モ有之候ヨシ、感悦ノ事ニ御座候、兎角古之忠臣孝子義人善良之跡ヲ御慕被成候儀、勿論之事ニ御座候、世之奸物ト云フモノモ、少ツ、ハ理屈ラシキコトヲ説申候者ニ候得ハ、或ハ被惑候事モ有之候、何分ニモ御心ヲ被付、正奸ノ差別ヲ御見分ケ專一ニ御座候、善良ハ大義節ヲ根本トシテ事ヲ計リ、奸曲懸味之徒ハ義之根本立不申候故、ワツカノ事ニ心ヲ動シ、人ノアゲアシ抔取候風之モノニ候得ハ、是等之境能々御見分ケ御尤ニ存候、古之明君賢者モ当代ニハ災難ニ逢、寃罪明ラカニ相成候、世人之眼ニハハツキリト善否不分候得共、後世ニ相成候テハ神ニモ祭ラレ千万人異論無之事歴々ト世之所知、一々証ヲ拳ルニ不及、何ヨリ忠孝之大節ニ相当候様御心懸相望申候、何レ来月中旬追々又々御文通吉左右可申候、草々不悉、

四月廿八日(年号不詳)

此書面ハ次項ニ記載シタル書面ノ添書ナリ、

(前略ス) 幕紀之模様ハ本文之通、密雲不雨ト申姿ニテヨキ様子ハ有之候得共兎角遷延、其内紀之御不幸モ出来、甚タ痛心ノ事ニ御座候、此通ニテ何共形付不申候テハ、我等帰国モイツモ申当モ無之、万事天命ニ任セ罷在候、(中略ス) 然ル処二三日前準ヨリ書状ニハ、此八日ニカ

(前略ス) 扱南紀之御尺力ニテ、幕府之御模様モ宜敷相成候処、残念之事ニハ 紀之君夫人先日御逝去被遊奉恐傷候、右ニ就テハ当分何之段ニモ無之相扣罷在候、乍去夫々不拘御慶事可有之ト、心当リモ御座候間、尚又御懸念被下間敷候、我等帰郷之義モ多分来月二十八日頃迄ト存候、御承知可被下候(以下略ス)

八月十七日

極秘説

候故、万々一我等行方不知ト申候ハ、準ヲ嚴重ニ糺シ等モ有之間敷哉ト甚以氣遣敷、是ニハ寒心致シ居候、我等モ潔ヨク国法ヲ受候ハ最初ヨリ之覚悟ナカラ、是迄心力ヲ尽シ、南紀之御配慮モ不浅、今ハ少シノ場合ニ相成手ヲ放候ハ、残念至極、是非何ト恥ヲ受候共、此所ヲ凌キトヲシ、尽力効驗相立候上ハ如何様ニモ可相成ト存候、紀藩之遠藤氏モ始終不変力ヲ添ヘ世話致シ呉候故、誠ニ頼母敷罷在候事ニ御座候、此外ニ眞田侯之儒官モ義士ニテ、厚ク心ヲ掛ケ被呉候、此方之事ハ何モ御案ニ不及候(以下略ス)

八月十七日(弘化三)  
年款

当十六日着義書ニ云フ、昨夜 美濃部・石河・栗原等、某之大夫へ出候処大夫曰、揺動之義両大夫ニテ引受ケ候ハ、相静リ可申哉トノ事問ニ付、左様ニ相成候へハ早速相静リ申候旨答へ候へ、左候ハ、弥々此度中納言様御晴レ之義ハ引受ニ相成候間、御同志中へ早々御申通有之様、何レ右之所ハ広ク達ニ出候哉モ知レ不申候得共、先ツ何ニ致セ御同志中へ伝置候様云々、○実ニ御主君様右之 思召ニ被為在候ハ、太平之功業ニハ無之上御大任恐悦之至奉存候、右ニ付拙モ秘説ヒソカニ御



咄シ可申候、南徽公御尽力ニテ上ノ御心解サセラレ御後悔有之、則チ執権衆へ議ヲ下シ候処、一同心配、尚又徽公阿世侯へ御直ニ論シ有之先月、何モ如才ナク御受之様子、然カシワカ見テコナヒニ致シ候ハ勿論イヤノ事ニ相見得、兎角三「レン」方御行届ニカコツケ申度腹之由、近日ハ興津クラ出府、カンヲメクラシ三「レン」

ニ必死ト取入レ候気味、「サンシウ」侯ヨリ阿へ莫大ノ賭ヲ贈リ候処、夫レヨリハ多ク返礼參リ迷惑之ヨシ、阿ノ臣槌ニ説、アラ／＼カクノ釣合内へ

御主君様ニテウント激発ニ鎗御入被遊候ハ、タヤスク大功ヲ収メ候時節不可空、如何ニモ御勉勵被遊候様願ハ敷御儀ニ奉存候、是レハ極々秘、如何ナル親友ニテモ忠義確乎タル人ニ非サレハ、決シテ洩シ申間敷存居候処、若シ其

君ヲ將順シ、国家ノ御用ニ御立チ被成候御手筋モ有之候哉ト極密得御意候、十分ニ可被行御模様ニ候ハ、御献策ヨロシ、実ニ大事ノ儀ニ候事(以下略ス)

(月日ナシ)

(前略)拙事モ先ツ無事、例之通り周旋イタシ居候間、御

安意可被下候、先頃来書之御答差出候処、定メテ無浮沈相違候事ト存候、其節申述候通り沈実之策略相回ラシ、元ヨリ人ヲ見合セ候心底柄ハ毛頭無之、千騎カ一騎ニナル迄確乎トシテ不屈、可動時ハ動キ、可静時ハ静ニイタシ、機変ニ応シ処置致シ候間、必々御氣遣無之様致度候、扱

御主君様水府へ御下向ニ付テハ、士民一同ヨリ歎願ニ被出候事、毎日之様ニ有之由、嘸々御心配被遊候義ト奉恐察候、何分明君之冤罪御身ニ引請サセラレ、公辺へ御申立、此度水際ニ立候御取扱被遊候ハ、水国千歳之美事、御家之御忠名天下後世ニ轟キ、上下安堵静謐ヲ楽ミ可申事勿論ナリ(以下略ス)

六月十七日午時

墨水洋洋潮上時薰風満面送涼吹欲看大岳千秋雪一抹浮雲猶未披

手簡ノ端ニ記シアリ、

舟遊刀称川甲辰

孤舟直遡大江流柳岸蘆洲総似浮忽見芙蓉天畔雪玉顔応

慰客顔愁

閑庭月

世の中のあつさを夏のよひにして  
ものしつかなる庭の月影

夏鶯

花の香ははや夏山に鶯の  
なくもうとむな時しらすとて

霞晴見富士

春霞晴てそ見ゆる富士のねの  
雪ぞ神代のまゝの色かな

〔表紙〕

# 齊彬公史料

市來四郎編

安政五年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数七四枚）」の記載あり〕

## 目録

市來廣貫琉球渡海奉命日記鈔

琉球大島及ヒ山川港へ外国貿易場御開キ并大坂兵庫ノ両

所開港猶予ノ策略中山王へ御密諭（石室秘稿鈔）

中山王へ密命英佛米ノ三国ニ書生ヲ出サムトノ御趣意（

石室秘稿鈔）前同日

琉球渡唐商人共へ御内示清国へ古製ノ大小砲銃等売込マ

シムへキ旨御内命付琉球商人ニ名ヲ籍リ渡唐スヘシトノ御

内命前全日（石室秘稿鈔）

齊彬公中山王へ臺灣島ノ内ニ渡唐船碇泊場開カシムヘシトノ密諭前全日（石室秘稿鈔）

清国福建琉球館取弘メ及渡唐船ヲ増シ商法一層盛大ナラシムヘシトノ御内諭前同日

市來廣貫密命ヲ奉シ琉球ニ於テ汽船購求談判心得ノ密書御下附

中山王へ御密命佛朗西国ヨリ蒸氣船及ヒ小銃製造器械等御購求ノ御趣意（石室秘稿鈔）

攝政三司官へ御密用示達或ハ在留ノ佛人へ談判ノ始末具申及佛人贈品

三司官座喜味親方退役ノ顛末

和蘭船長崎ヨリ来琉御附人在番奉行へノ書状持参ノ事実及ヒ戊午ノ春井上庄太郎其他守衛人員數十名大島へ差渡

サレタル顛末

英人清国廣東攻撃ノ顛末

〔脱之〕〔江田平太郎参府御供命セラル〕

金価高騰布令

造士館学風矯正御訓示

柴山愛次郎実兄良助へ贈ル書翰

柴山愛次郎兄良助ニ海防急務対策建言ノ事情報告

蒸氣船雛形製造及ヒ大砲鑄造意見建言（市來）  
非藏人日記抄

三三八 市來廣貫琉球渡海奉命日記鈔

御広鋪番頭格

御庭奉行勤

御徒目附兼務

集成館掛是迄之通

市來正右衛門旧名四郎

右ハ、琉球へ御内用之儀有之被差越候条、当秋早便ヨ

リ致渡海候様被仰付候、

右之通可申渡候、

七月三  
駿河新納久仰

御広鋪番頭格

御庭奉行勤

御徒目付兼務

御内用掛

市來正右衛門上

右ハ、琉球へ御内用ニ付渡海被仰付候ニ付、総髮成被

仰付候、

右之通可申渡候、

七月五  
駿河全

右ノ如ク奉命至急渡海可致旨、御側役名越彦太夫ヲ以テ被達、而シテ御用取扱向之儀、出帆前迄ニ追々可被仰達旨口達承知ス云々、先日御小納戸山田壯右衛門ヲ以テ、御内達拜承致候云々日記鈔、

三三九 琉球大島及ヒ山川港へ外国貿易場御開キ

并大坂兵庫ノ兩所開港猶予ノ策略中山王

へ御密論（石室秘稿鈔）

安政四年丁巳八月十九日夕七ツ時分ヨリ、二ノ丸御茶屋へ被為入、当日ハ（例ニ異リテ女中数名被召列）山田壯右衛門・豎山八郎・江夏十郎其外御供（人名略ス）初メ、御花園製煉所へ御立寄り被為在、其時山田ヨリ御茶屋ノ様、高橋縫殿及ヒ私ニモ罷出旨申聞候ニ付罷出候処、女中其外御供ノ者ハ、御池ノ中島ニ參レトノ御沙汰ニテ、皆其所ニ參リ（機密ノコトナルカ故如此池ノ中島ニ行ケトノ御言ナリシナラム）、御茶屋ニハ山田・豎山父子・江夏・高橋及ヒ私ニテ、御沙汰之趣ニ、渡海ノ上ハ是ヨリ先キ七月三日琉案ニ變シ渡海可致

旨<sup>押承</sup> 在琉佛朗西人共へ相親ミ、情態相探リ候儀ハ勿論、  
 蒸氣船一・二艘近年中買入レノ事、并琉球・大島又ハ追々  
 山川へ引寄せ、貿易開ノ儀共取扱ヒノ為ナリ、既ニ江  
 戸ニ於テハ亜米利加等渡来致シ、通信允シニ相成ル模様  
 ニモ有之、就テ深キ見込ノ趣アレハ、其内ニ此方ノ一手  
 ヲ以テ、琉球・大島等ニ於テ通信・貿易ヲ開クノ趣意ナ  
 リ、因テ渡海ノ上ハ、攝政三司官等へ厚ク申論シ、中山  
 王手限りノ名ヲ以テ相開候条約ニ致シ、此方ヨリ内論等  
 ノ儀ニテハ宜シカラス、琉人ノ癖、此ノ事ヲ聞カハ様々  
 苦情申立ルハ必定ナレトモ、此度ノ儀ハ通例ノ訳ニ無之、  
 幾回モ手厚ク申論シ、承服致サセシテハ相済マス、日  
 本ノ安危ニモ係ル重キ子細アリテノ事ナレハ、苦情ハ取  
 揚ケサルコトニ心得ヘシ、浦賀ニ於テ夷人申立ノ趣ニ、  
 江戸・大坂・兵庫・長崎ニ馬頭ヲ開ント申立、江戸・長  
 崎等ハ兎角開キニナルヘシ、大坂・兵庫ノ両所ハ日本ノ  
 中央、京都ヨリ一日路ノコトナレハ、万一ノ時ハ京都ノ  
 処誠ニ懸念ナリ、其上夷人御嫌ニテ、大ニ  
 宸襟ヲ悩サル、由ナレハ、如何ニモシテ 御安慮ニ相成  
 様致度心配ニ存候、後々開ヒテモ差聞サル時宜モアラン、  
 差向キノ処開ヒテハ、日本ノ乱トナルハ必定ナリ、仍テ

琉球・大島又ハ山川等ヲ引替ニ開キ、彼是トシテ年月ヲ  
 延ハシ、其内ニ日本ノ形勢モ分リ、又ハ此方軍備モ調ヒ  
 (按スルニ此方トハ日本全国ヲ指シテノ御言)、夷人ノ暴威モ  
 押ヘル様ニナルヘシ、其間ハ此方(我藩ヲ指テノ御言)ノ  
 手ヲ以テ、万事穩ニ取計フノ趣意ナリ、能々其辺ヲ含ミ、  
 中山王ノ名ヲ以テ、手初メニ琉球・大島ノ二ヶ所ニ相開  
 キ、其後山川へモ開クヘシ、琉球ハ武器モナク、全クノ  
 文国ニテ、商法ヲ以テ立チタル国ナレハ、外国人カ暴威  
 ヲ凌クニモ易カルヘシ、先年ヨリ外夷ノ難題モ毎度相凌  
 キ、柔克ク剛ヲ制シタリ、又琉球ニ於テ外夷取扱向ノ儀  
 ハ、調所笑左衛門ヨリ阿部伊勢守へ問答シ問答記ハ旧邦秘録  
弘化三丙午ノ部ニ  
詳記阿部ヨリ笑左衛門へ申聞タル趣ニモ、中山王手限リ  
 ニ取計ヒ様モアルヘントノ趣意モアリ、琉球ニテ交易ヲ  
 開クモ、船ヲ買フモ公義へノ申取り様ハ幾千モアリ、笑  
 左衛門カ問答書、又ハ御渡書付モ下ケ遣スヘシ、之ヲ克  
 ク弁へ、琉役共へ申論シ、此方ニテハ京都ノ御都合ト日  
 本往々ノ処甚タ心配ナリ、仍テ来春ハ安政五年ノ春ヲ云フ先ツ和蘭  
 人ヲ琉球・大島へ遣シ、港ノ見計ヒ致サセ、佛朗西モ同  
 様ニ見立ニ參ルヘキ旨ヲ、在琉ノ佛人ヨリ本国ニ申越サ  
 セ候都合ニ談判スヘシ、此方ヨリハ、速ク役々差出ス様

ニ申付ヘシ、此ノ事ハ交易ヲ主トスルニアラス、日本ノ  
安危ニ係ル大事ノ訳ニテ、中山王カ引受ケ日本ノ難題ヲ  
取扱フト心得、琉官共苦情申立テサル様相論シ、決テ断  
リノ使者(從來使者上国百万謝絶スル習慣アリタルヲ云フ)ナ  
ト差立テザル様取計フヘシ、何分早ク渡海シテ骨折スヘ  
シ、爰許ニテハ秘密ニ致スヘシトノ趣共拜承仕候、而シ  
テ山田・江夏へ御沙汰ノ趣ニ、江戸・長崎等ハ必ス開キ  
ニナルヘシ、今ノ形勢テハ謝絶ノ道ハアルマシ、此様日  
本中武威衰へ、公義ヲ初メ諸大名モ武備整ヒタルハナシ、  
夫故外国ヨリ侮ラレ、種々ノ難題ヲ申掛ル訳ナリ、大坂  
トテモ同様ニ申立ル由ナレハ、先ツ此方ニテ手数ノ限り  
ハ心配シ猶予セハ、彼是トスル内ニ、日本ノ政事モ一変  
シ、武備モ整ヒ暴威ヲ押ヘル場ニ至ルヘシ、兎角武備整  
ヒ夷人ト戦フテモ、必勝ノ備整ヒタル上ハ、何国ノ港ニ  
開イテモ差閤ナシ、軍備ハ入費先立タサレハ何モ調ハサ  
ル故、琉球ニテ貿易シ、軍艦・大砲等速ク買入ノ見込ナ  
リ、日本モ今ノ形ニテハ、近年中ニ内外何レヨリカ事ノ  
破アルヘシ、心配ナル世トナレリ、又御沙汰ニ外国ノ取  
扱向ハ、日本ニ於テ手後レノ事多シ、先年和蘭使節船渡  
来ノ時分弘化元年甲辰七月、使節船長崎ニ来リ(旧邦秘録天保十五甲辰ノ部ニ詳記ス)、歐洲各国ト通信セサレハ、遂ニ兵端ヲ開

ニ至ラシ云々、公役へ申聞ケタルコトアリタリ、先ンスレハ  
ヲ忠告セリ  
人ヲ制シ、後レハ人ニ制セラルト云フコトモアレハ、和  
蘭人ニ取計セ此方ヨリ押シ掛テ開キ、又ハ人ヲ遣シ情態  
ヲ探ラスヘシト荐リニ勸メタルコトアリシカトモ、尤ナ  
リト謂テ頓着セス、此方ヨリ進ンテ出掛ケノ道ヲ開クト  
キハ、日本モ今頃ハ相応ニ開ケ、武備モ調ヒ、今ノ様彼  
ヨリ押シ付ラル、コトハアラサルヘシ、然レトモ手後レ  
タルコトナカラ、早く人ヲ出シテ情態ヲ探リ、又ハ此方  
ヨリ申掛テ開クヲ肝要ナリトノ御沙汰被為在候、江夏言  
上ニ寔ニ御尤ノ御事ト奉存候、清国即今ノ形況ヲ承ルニ、  
因循固滞手後レノ事ノミニテ、遂ニ危急存亡ノ迫リニ相  
成リ、其上内乱起リ、此末如何相成ルヘク哉、日本ハ人  
氣別段ニテ清国同様ニハ無之トモ、御沙汰ノ通り手後レ  
ノコト多ク、然レトモ 思召通、琉球ニ於テハ必ス行ハ  
レ可申ト言上候処、御沙汰ニ、存ノ通り政事ハ人氣一致  
ヲ肝要トス、國中末々ノ者共困究窮セス、豊ナルヲ本トス、  
豊カナレハ人氣自ラ一致シ命令行ハレ、何ヨリ堅固ノ城  
郭ナリ、否ラサレハ必ス亡フニ至ル、武備整ハサレハ他  
国ニ侮ヲ受ケ、遂ニハ奪ハル、ニ至ル、又手後レノ事多  
シ、今府マ日本ノ処肝要ナル此ノ三ツ欠タリ、故ニケ様ノ

世トナレリ、因テ手後レノコトナカラ、此方ヨリ手初ヲシテ、公義ヘモ知ラセント思フ、以来ハ内外ノ政事振り切りタル取計ヒセサレハ、時勢ニ追ヒ付カス、万事次第・順序ヲ立テ取計ヒ度事ナカラ、今ノ時勢ハ内ヲ整ヘントスレハ外ヨリ迫リ、外ヲ治ントスレハ内乱ル故ニ、内外一緒振り切りタル事ヲ為スノ見込ナリトノ御沙汰被為在候、山田・江夏等一同感拝仕候当日ハ右御沙汰限リニテ夜入前御常殿被遊候

三四〇 中山王へ密命、英・佛・米ノ三国ニ書生ヲ

出サシムトノ御趣意(石室秘稿鈔) 前同日

英吉利・佛朗西・亞米利加ノ三国へ、書生ヲ出サシムトノ御内慮被為在、琉球へ渡海前二ノ丸御茶屋ニ於テ拝承仕安政四年丁巳八月十九日、疏着ノ上撰政三司官等へ御趣意ノ厚厚ク申諭シ、人柄ヲモ取調御届申上候様ニトノ御言ニ、年齢十七・八歳位ニテ、オアリテ正実ナル者三・四人ヲ撰ヒ、一国ニ一人又ハ二人ツ、差遣ハサレ、語学ハ勿論物産・医術・舎密学等修行サスヘシ、鹿兒島ヨリ五・六人程琉人ノ名ヲ以テ一絡ニ遣ハシ、砲術又ハ造船・航海術等ヲ学ハセ、或ハ各国ノ形勢ヲモ探ラスヘシ、因テ撰政・三司官等へ厚ク申諭シ、御手当等ハ一切御渡可相成心配

ニ及ハス、留学五・六年程ノ見込ニテ申諭スヘシ、此方(鹿兒島)ノ人撰ハ追テ見計フヘシ、渡海ハ一絡ノ都合宜シカルヘシ、渡海ノ手順ハ在琉ノ佛人へ頼談シ、渠等引受世話致ス様、手厚ク相談致スヘシトノ趣、且ツ此儀ハ内密ノ取計ニセサレハ、差向キ種々故障付ク訳アル故、此方ノ者ハ守衛方、又ハ内用ノ名ヲ以テ差渡スヘシ、追々外国ヨリ通信願ヒ立ルニ於テハ、兎角通弁開ケスシテハ、彼レノ情実相分ラス、取扱ニ付キ差支ノ儀鈔カラス、旁此末必要ナレハ、速ク差渡ス都合ニ取計フヘシトノ御言ニテ、着琉則撰政三司官へ内諭仕候処、琉人共大ニ恐怖致シ、種々苦情申立承服致兼候得共、反復説諭仕、御受為仕人品取調御届申上候、其人名ハ安村里之子親雲上・津嘉山親雲上(近年支那へ脱走、龜川親方ノ一列ニシテ脱走シタリト云)・牧司里之子親雲上ノ三名ニテ、在琉佛人共へモ頼談ニ及ヒ候処大ニ喜ヒ、琉球國モ如此ク開ケタルハ洵ニ琉國幸福ノ基ナリ、我々ニ於テモ喜ハシキコトナリ、如何ニモ世話可致、遠カラス本国船渡来ノ上、其船ニ乗込ミ直ニ佛朗西へ渡リ、其上英・米國へ渡航ノ都合宜シカルヘシ、尤佛國政府ニ於テ世話スル様、我々ヨリ願ヒ越スヘシトテ、渡海ノ入費且ツ留学中ノ費用差統方等ノ

一切モ談定致シ御届申上候、右通琉球人三・四名、鹿兒島ヨリ五・六名被遣御趣意ニテ、己未（安政六年）ノ春差渡サル、御手筈ノ処御逝去、此事ヲ初メ蒸氣軍艦御買入、或ハ琉球・大島等ニ於テ貿易御開、或ハ此レニ属シテ種々ノ御事柄モ悉ク水泡ニ相成候、鹿兒島ヨリ遣ハサル、書生ハ大思召ノ御旨ノミ拝承仕候、其時分迄ハ人柄等ノ御撰ハ未無之乎、誰某トノ儀モ承知不仕候

### 三四一 琉球渡唐商人共へ御内示、清国へ古製ノ

大小砲銃等売込マシムヘキ旨御内命付琉商人ニ名ヲ籍リ渡唐スヘシトノ御内命前全日（石室秘稿鈔）

渡琉前種々御沙汰ノ中ニ、清国モ内外ノ難題ニ苦ミタルニヨリ、近年兵備モ手ヲ付ケ候様子ニ聞ヘタリ、然レトモ清人ハ頑固ニシテ、未タ西洋ノ兵式ヲ用ヒサル由、依テ此方ニアル古制ノ大小砲無用ノモノハ、売渡ス都合ヲ琉人へ内諭シ、私ニモ琉商人ノ名ヲ以テ渡唐シ、売込ミハ素ヨリ、天津・北京・上海・廣東辺ノ諸所ニ至リ、外夷ノ形況ヲモ見聞シ、古制ノ大小砲、或ハ燧石銃・火繩銃、或ハ古法ノ砲ハ総テ売払ヒ、新式ヲ製スル方ニスヘシ、之ヲ地金ニ禿シテモ益ナシトノ御言ナリキ、依テ渡

琉ノ上先ツ三司官共へ内諭ニ及ヒ候処、種々苦情申立候ヘトモ、百方説諭仕リ承服為仕候、渡唐役者又ハ渡唐商人共へモ内諭ニ及ヒ候処、官吏ト違ヒ相喜ヒ、必ス売込ノ道可有之旨申立候、夫等ノ趣御届申上候処、御取調ノ上琉船帰帆便ヲ以テ、御下ケ渡シ可相成段、御達承知仕候、安政五年戊午ノ秋早船ヨリ御下ケ渡シ相成リ、同年十月渡唐船ヨリ差渡ス都合ニ取計置候。私ニハ開港御用多端ニ付、渡唐猶予仕リ、被召付候蒸氣船職工長木佐貫源助琉商人ニ交リ差渡シ度旨、在番奉行高橋縫殿ヨリ御届申上候云々、

### 三四二 齊彬公中山王へ臺灣島ノ内ニ渡唐船碇泊

場開カシムヘシトノ密諭前全日（石室秘稿鈔）

臺灣ノ内ニ渡唐船碇泊場御取設ノ御趣意被為在候御旨、拝承仕候、其御言ニ琉球ノ内先島ノ内與那國島・入り表島等ヨリハ、天氣好キ時ハ山影モ見ヘルト云フ、地図ヲ考フルニ、天度モ僅ノ間ナレハ、果シテ其通ナラム、島津登琉球在番ノ節、先島ノ漂流人ヲ殺シタル趣、届出タルコトアリタリ、近地ニ其様暴悪ナル所アリテハ甚タ妨ナリ、兎角人道ヲ教へ、其害ヲ除クノ法ヲ設クヘシ、就



テハ先ツ初メニ、渡唐船ノ汐掛リ場ヲ定メ往来毎ニ汐掛リシ、後々ハ家ヲモ拵ヘ、絶ヘス<sub>ニ</sub>在番人ヲ置キ、土人ヲ懐ケ人道ヲ教ルノ手順ニスヘシ、西洋人カ牛皮一枚ノ地ヲ買ヒ、漸次一大国ト押シ弘メタル例モアリ、夫レニ働ヒ、碇泊場ノ近地ニ上陸、休息場ノ家ヲ拵ヘ、追々取リ弘ルコトハ、遂ニハ手広ノ地ヲ得ルニ至ルベシ、然ルトキハ先島人共ナト、後々難ニ遭ノ憂モナク、中山王ハ土地モ弘マリ且ツ産物多ク、殊ニ砂糖ノ名産アレハ、琉球ノ益少々ナラサルヘシ、今通ニテハ清国ヨリ全島ノ支配ハ、迎モ手ノ及フ丈ニアラス、遂ニハ外国人ノ領地トナリ、琉球又ハ日本ノ妨トナルヘシ、速ク此方ヨリ手ヲ付、外国人ヨリ取占メラレサル様ニスルヲ肝要トス、着琉ノ上ハ、琉人ヘ諭スニハ、漂流人暴害ニ遭ハサル取締ノ為メ、渡唐船碇泊場ヲ設ケ、休息所等ヲ取立ヨトノ一事ヲ以テ内諭シ、清国政府ヘモ其旨ヲ届出ル手順ニ取計フヘシ、初メヨリ手弘ノ見込アル趣申聞ナハ、琉人ノ癡驚ヒテ苦情申立ルハ相違ナシ、其辺ノ心得肝要ナリ、臺灣ハ熱國ニテ、西南方ハ清国ヨリ役人モ出張リ開ケタル由、多クハ明末ノ人ナリト聞ク、東北ノ二方ハ未タ開ケス、暴悪ノ野人ノミナリト島津登能ク存シタリ、碇泊場ハ港

ノ良悪次第ナレトモ、成ヘク先島ニ対スル地ヲ見合セ、第一ナリトノ御沙汰被為在候、是ヨリ先キ嘉永ノ初メ、島津登琉球在番ノ砌、八重山島ノ者臺灣ニ漂流シ、薪・水・食料ヲ求メント、土人居住ノ地ニ至リ、野蕃人ノ為メ暴殺セラレ、僅三人辛フシテ遁レ帰リタルコトアリシ由、其者共ノ話ニ、蕃人居所ニ至リシニ、琉人ノ簪数本壁ニ插シアルヲ見タリト、果シテ其前漂流シ、殺サレタルナラムトノ趣、所謂清国政府所轄外生蕃地ナラムト存セラレ候、右御内命之旨、着琉ノ上撰政・三司官ヘ申論候処、異議ナク御受任、来年(安政六己未年)冬渡唐船ヨリ福州頭臺ヘ内意申立、其上便利ノ一港ヲ相定メ候都合ニ取計度趣共申出候ニ付、其段御届申上、尚亦御指揮拜承仕度奉窺候処、何分ノ御達モ無之内ニ御凶報到来、其尽ニ相成候御聞ニ相成候由、山田社右衛門ヨリ後日承候云々

三四三 清国福建琉球館取弘メ及渡唐船ヲ増シ商  
法一層盛大ナラシムヘシトノ御内諭前同  
日

渡唐商法一層盛ニ開レムトノ御内慮拜承セリ(八月十七日)、就テハ福建ニ在ル琉球館ヲモ取弘メ、而シテ年々一

三艘ノ渡唐船ニテハ、琉球ノ潤沢薄キカ故四・五艘ニ増シ、毎年渡唐ノ法方開クヘシ、而シテ鹿兒島商人モ差向、琉人ノ姿ニ変シ琉商人ノ名ヲ籍リ、渡唐ノ道モ開クヘシ、然ル時ハ館舎取弘メサレハ、第一倉庫モ不足ナルヘシ、清国モ即今英・佛人ノ為メ困厄ノ様子ナレハ、長崎ヘ唐商船モ来ラス（英佛侵撃、夫カ為メ渡航セサリシナリ）、唐物弘底、殊ニ藥品差問ノ由、此ノ機会ニ此方ヨリ清国ヘ出掛ケ、商法ノ道ヲ開キタラハ、追年長崎ヘハ渡商滅スルニ到ラン、其辺ノコトモ琉官々ヘ説論セシニ、渡唐琉商人等ハ大ニ喜ヒ、持渡リ或ハ買求メ物品、或ハ渡唐船造建ノ費用等取調差出タルヲ、山田壯右衛門・豎山八郎ヲ以テ上申セリ、然ルニ此上申ハ御逝去後兩人カ許ニ達シ、夫形リ水泡ニ帰シタリ、

### 三四四 市來廣貫密命ヲ奉シ琉球ニ於テ汽船購求

談判心得ノ密書御下附

写

松平大隅守

琉球国ヘ異国船渡來之處、彼地之儀ハ素ヨリ其方一手之進退委任之事故、此度ハ存慮一杯ニ取計、尤国体ヲ

不失寬猛之処置勘弁ノ上、何レモ後患無之様及熟慮、取計向ハ機變ニ応シ可申トノ趣、被為蒙上意候事、

七月弘化三丙午

此御書付、安政四年八月廿二日山田壯右衛門ヲ以、御下ケ相成候ニ付写置候、其節山田ノ話、二ヶ条ノ趣且交易御開キ不苦トノ趣ハ、初ヨリ阿部様・筒井様ナト、御熟議ニ出候訳ニテ候トノ趣ニ候事（弘化三年丙午六月調所笑左衛門ヲ以、聞老阿部伊勢守及ヒ筒井肥前守ヘ演述手扣書参照スヘシ）

安政四丁巳九月十九日御下ケ書ニ依テ写ス（別卷御親命ノ条参照スヘシ）

### 三四五 中山王ヘ御密命佛朗西国ヨリ蒸氣船及ヒ

小銃製造器械等御購求ノ御趣意（石室秘

稿鈔）

<sup>三四五の</sup>安政四年丁巳八月廿三日夕七ツ時分ヨリ、御花園製煉所

（二ノ丸内ニアリ、前卷ニ記ス）、又ハ浩然亭（動植館ノ奥ニアリ）ヘ被為入、其節豎山八郎ヨリ御前ヘ罷出ツヘク旨、申聞ケ罷出候処、御沙汰之趣ニ先日申聞ケタル事件之内、蒸氣船ハ速ク手ニ入り候様取計フヘシ、交易取弘メニ就

テハ、運論又ハ取締等、其外水軍モ速ク取立ルニ付テ其大本ナリ、大小砲并航海ノ用具一式備付テノ詔文致スベシ、此事ハ琉人共差シテ苦情モ申スマシク、先年佛・英人ヨリ買入ルヘク勸メタルコトモアリシガ、其時ハ琉人ヨリ断リタリ、因テ此節モ夷人ヨリ中山王ヘ勸メテ、押しノ買入レサセタル処ニ相談ヲ遂ケ、公辺ヘノ届モ其処ニスヘシ、假令公辺ヨリ差咎ルトモ、答ノ道ハ如何様ニモアレトモ、此方ヨリ内命ノ事ハ穩密ニシ、中山王手前ノ取計ナレハ、少シモ差問ナシ、又小銃製造ノ器械ハ、軍備肝要ノコトナレハ、一年ニ五千挺カ六・七千挺程モ製造スル器械ヲ取寄スヘシ、国用製造ノ後ハ、大小名ノ入用、公義ノ詔モ製造シ、売出スノ見込ナリ、是ヨリ日本中ニテモ、数十万挺ノ入用アルハ疑ナシ、然ルトキハ其余潤ヲ以テ、三ヶ国ノ備ハ心配ナク整フヘシ、成ルヘク速ク蒸氣船ト此機械ハ、一緒ニ持渡ル様ニ談判スヘシ、先日モ申聞ケタル通り重大ノ事柄ニテ、日本初メテケ様ノ事ヲ取計フ訳ナレハ、<sup>(他)</sup>多聞ニ及ハサル様ニシ、蒸氣船ナト届キタル上ハ、何ノ憚ルコトナシ、此ノ世振リニテハ、何事モ振り切りタル取計セサレハ、追ヒ付ク世ニアラス、其心得ニテ振り切タル談判スヘシ、ケ様ノ

大事ハ永延フトキハ纏ヲ起ス者ナレハ、速ク成就スルヲ良トス、着琉ノ上早速ニ琉官ヘ申論シ、佛人共ヘ談判シ、其届申越スヘシ、日本モ内外ノ事ニ就テ、穩ニハ濟マサル世トナリタリ、何事カ起ルハ、近年ノ内ニアリト思フ、就テハ第一軍備整ハサレハ、外国ニ侮ラル、故、心急キノ世振リナリ、蒸氣船ノ長サ旁ハ、出帆前迄ニ尚ホ考テ申聞クヘシ、トノ御沙汰拜承仕候、右通り万事御心急キノ御様子ニ被窺候云々、

<sup>三四五の二</sup>

○安政四年九月廿九日渡琉差掛リ候ニ付、追々承知仕候御用向ノ外、蒸氣船ノ長短等拜承仕度旨、山田壯右衛門ヲ以テ奉伺候処、御休息所御庭口ノ様可罷出承知仕罷出候処、蒸氣船二艘、一艘ハ軍艦、一艘ハ商売船ニテ、二ツナカラ長二十八九間、三十間許ニシテ、大砲十七、八挺程新式ノ者ヲ備へ、彈藥類モ少々見本ヲ乗セ付ケ、其外船ノ綱具等ニタ通ツ、用心ノ為メ乗セ付、小銃モ二百挺程或ハ測量道具・航海ノ器物一切、又ハ実戦ニ臨ミ必要ノ品物残サス相揃へ、委細佛人ヘ問ヒ合セ、其形行届ケ申越スヘシ、其上尚ホ下知遣スヘシ、二艘一揃ニハ手ニ及ヒ兼候向キニ於テハ、軍艦ヲ速ク詔文スヘシ、代金

払ヒ方ハ、成丈ケ三・四年五・六年ニ割リ払ヒノ相談  
肝要ナリ、万事入用多キ砌ナレハ、能ク其辺ヲ勘弁シ、  
中山王入用ノ名目ナレハ、貧少ノ国柄ナル趣ヲ、夷人へ  
分ケテ申聞、割払ヒノ相談專一ナリ、小銃製造器械モ先  
日申聞ケタル通ニテ、速ク届キ候様可取計、着琉ノ上ハ  
速ニ談判ニ取掛リ、其形行飛舟ヲ以テ可申越トノ趣共、  
詳細御沙汰拝承仕候云々、

○又同時ノ御沙汰ニ、三司官座喜味親方カ、政事向ヲ自  
尽ニ取扱ヒ、人氣モ離レ私欲ヲ専ラニスル聞得アリ、其  
段委シク聞キ合セ可申越、駿河へモ申聞ケ置タリ、多分  
退役可願出、跡役入レ札（投票ノ通唱）等ニ付悪弊モアル  
由ナレハ、此度ハ公平ナル入札致候様（従来一種ノ悪弊アリ）、  
撰政・三司官へ内諭致シ、在番奉行へモ此旨申聞  
クヘシ、同人事ハ多年ノ三司官ニテ、近頃我意ニ募リ、  
外国人取扱等ニモ、種々取繕ノ届等有之ニ依リ、事情不  
分明ノ事多シ、因テ園田<sup>初ニ右衛門実名  
実徳後ニ清吉</sup>ナト、夷人談判ノ席  
ニ列ラシメ、実情ノ届ケヲ聞モ十分届兼タリ、園田事ハ  
早々上国致シ候様申聞ケ、其時座喜味カ退役願モ承リ帰  
ル様ニ取計フヘシ、又交易開キノ一条ハ、長崎ニ於テ和  
蘭人へ申合メ、来年（安政五年戊午）夏初メニハ、琉球・

大島へ遣ス都合ニ取計フゾトノ趣共拝承仕候、而シテ十  
月二日琉船帰帆便ニ乗込ミ、同三日ノ濱開帆、同月十  
日琉球那覇港へ着岸仕候、同船ニ琉官物奉行恩河親方モ  
乗船、此者磯御茶屋へ召シ出サレ、交易御開キ又ハ座喜味  
親方カ一条等御沙汰被為 在候由、当日地雷・水雷ノ拜  
見モ被允候<sup>初卷地雷・水  
雷ノ条ニ記ス</sup>

三四六 撰政・三司官へ御密用示達或ハ在留ノ佛  
人へ談判ノ始末具申及佛人贈品

安政四年丁巳十月十日着琉、同十一月三日撰政伊江王子  
豊見城按子・三司官池城親方・譜久山親方、物奉行小録  
親方・恩河親方、通弁掛牧志親雲上等ノ数名ヲ、廣貫カ  
旅宿へ招キ、御密用ノ趣懇諭セリ、其要領ハ、第一琉球・  
大島及ヒ漸次山川港ニ於テ、和蘭国或ハ佛朗西国ト貿易  
開レムノ御内慮、追々各外国ヨリ請申、日本ニ於テモ各  
国頻リニ願請、時勢已ムヲ得サルニ立到リ、江戸ニ於テ  
モ既ニ允許セラレ、尋テ大坂・兵庫ニモ開市請願シ云々、  
第二蒸氣船御買入云々、第三英・米・佛ノ三国へ書生派  
遣、第四臺灣島ノ内便利ノ地ニ渡唐船碇泊場設置、清国  
政府ニ請求、第五福州ニ在ル琉球館取弘メ商法拡張、第

六渡唐商人共へ内諭、清国政府ニ大小砲売込マシムヘシ云々、第七三司官座喜味親方辭職云々詳ニ示達、異議ナク御受、国王請書提出アルヘキ旨申達セシニ、一同驚愕甚タ困却ノ様子ニテ低頭黙然、稍暫ニシテ池城曰ク、御内達ノ趣一々容易ナラサル事件、御即答ニ及ヒ難シ、国王ヘ申聞ケ、何分奉願廉モアルヘシ、宜シク聞キ置キ云々ナリシ故、尚ホ宇内ノ形勢、清国ノ事情ヲ説解、時勢已ムヲ得サルノ場合ニ立到レリ、故ニ御深慮ニ出タル事実、尋常ノ事柄ニアラス、琉球ハ勿論、日本国ノ安危ニ関スル一大事ノ場合ナルカ、先ンスレハ人ヲ制シ、後ルレハ人ニ制セラル、ハ此時ニアリ、故ニ非常ノ御英断ナルヲ懇諭シ、無遅延御請書出スヘキ旨ヲ達シ、而シテ恩河・牧志ノ兩人ヲ居残ラセ、尚ホ懇諭セシニ、恩河ハ先般鹿兒島ニ於テ、山田壯右衛門ヨリ御趣意ノ概略ヲ含タル故、時勢相当ノ御措置ト敬服異論ナク、牧志ニハ元来夷情ニ通タルモノナレハ、従前ノ措置ニテハ遂ニ一大難ヲ惹キ起シ、果ハ渠ノ正朔ヲ奉スルニ立到ルヤ必セリ、清ノ大国モ、上海・廣東等ノ地割与シタル覆轍モアリ、況ンヤ寸鉄モナキ一小国、渠ノ猖獗ヲ凌クニ道ナシ、兎角御国ノ御威光ヲ以テ、国ヲ全フスルヨリ外ニ策ナシ、

加之日本ノ御安危ニ罹レル場合ナルニ於テハ、御趣意ニ違ハサルヲ良策トス云々、摂政・三司官等へ建議スヘキ旨申述セリ、而シテ兩人ハ摂政・三司官ニ対シ、意見建議シタリト、而シテ同六日、三司官池城及ヒ小録親方廣貫カ宅ニ来リ申出スルニ、内達ノ趣評議ニ及ヒ国王ヘモ申聞カセシニ、時勢已ムヲ得ラレサル尊慮、寔ニ以テ恐人奉レリ、就テ御ケ条ノ内蒸氣船買入ノ儀ハ、先年モ英・佛人ヨリ沖中孤立ノ島国、船舶ノ製拙ク大切ナル人命ニ罹ル趣トモヲ以テ、買入ルヘク旨勸メタルコトモ有之候間、御趣意通琉球入用ノ名ヲ以テ、買レ<sup>(入船カ)</sup>御取計アラセラレ、代金払ヒ渡方ノ儀、御都合奉願トノ旨申出タリ、次ニ渡唐商法盛ニスヘシトノ儀ハ、琉球ニ於テ誠ニ有難キ思食ニナレハ、趣法向渡唐役者共へ取調サセ、屹ト奉願候様可仕、臺灣潮掛リ場取設ケノ儀モ、渡唐船ノ便利ニ相成コト故御請可仕、福州館舍取私メノ儀モ、難有御趣意ニテ御受可仕、其内大和商人(鹿兒島商人ノ通唱)琉商人ノ名ヲ籍リ、渡唐ノ儀丈ケハ御有捨相願度、其訳ハ清朝へ対シ不相濟廉ハ、日本ト交通ハ勿論、御国ノ御制度ヲ奉シ候儀ハ深ク相秘シ、副封使渡来ノ節ハ在番奉行ヲ初メ、外御役々衆モ都テ山原<sup>ヤンバル</sup>(首里城以北ノ

地ヲ云方へ御迦シ相成候程ノ仕来リ、夫故外国人へモ、大和人（鹿児島人ノ通稱）ヲ度佳喇島人ト申取り置キタル次第ニテ、夫等ノ故障モ有之候ニ付、大和商人渡唐致シ候テハ、自然言語・容貌等琉人ニ異ナルヲ怪ミ、旧来ノ申取り取締ヒノ事顯レ、難題ト相成ル詎故、此廉ハ御斷申上度、次ニハ琉人亦ハ御國ヨリ書生被差出トノ御事、是二条ハ寔ニ一同心配仕リ、是迄外国人へ申取りニ、日本通信ノ実事ハ秘密ニ致シ、度佳喇島（琉人カ外国人へ対シテ云フ処如此）ニ商法往来スル旨、申聞ケ置タル詎ナル故、渠等へ頼談ノ上差渡サル儀、内実露顯シテハ大ニ不都合ヲ生シ、種々難題ノ基ナルノミナラス、清朝へ相響キ容易ナラサル次第ニ成リ立ツヘシ、次ニ大島・琉球ニ於テ交易御開キノ儀、誠ニ恐入次第ニ候ヘトモ、是迄英・米・佛等ヨリ毎度開商申聞ケ候ヘトモ、其申渡キ実ニ容易ナラス、沖中孤立ノ小國、産物ハ砂糖・唐芋等ノ數品ニ止リ、西洋ノ大國ト對商スルコト調ヒ難キ趣ヲ以テ相斷リ、食料・薪・水船中欠乏ノ品売リ渡シ、或ハ石炭田場等求メニ応シタルノミノ儀ニ候、然ルヲ引違ヘテ此方ヨリ開商ノ儀申掛候テハ、以前ノ申取りハ悉ク詐ト相成リ、容易ナラサル次第ニ成リ立ルハ差見得候ニ付、此三

ケ条ハ御宥捨奉願度トノ趣、次ニ座喜味親方カ儀、被聞召通趣有之、國王ニモ被恐入、多年在職自假ノ儀モ寡カラス、人氣モ相離候モノニ候間、退役ノ願為申出候様、相違候トノ旨申立候ニ付、尚ホ宇内ノ形勢勞懇ニ申論シ、到底 御聞濟ハ在セラルマシ旨反復説論セシニ、恩河ニハ嚮キニ山田ヨリ承知ノ詎モ有之、牧志事ハ夷情ニ通シ、清國近年ノ形勢ヲ弁知シ、茲ニ於テハ 御趣意遵奉ノ定論ニテ、尚ホ撰政・三司官其他要路ノ官々へ會議スヘシト奮然罷在、當日ハ退散シ、同十二日小録・恩河・牧志ノ三名ヨリ申立ルニ、過日王子按子及ヒ重官殘ラス城中へ召集メ、國王面前ニ於テ評議ニ及ヒシニ、各論交易ト書生ノ二ケ条ハ、此涯御宥免アラムコトニ議定シタリト、廣貫曰ク各条何レモ甲乙ナキモ、這ノ二ケ条ハ樞要ノ事柄ニテ、琉球ノミナラス、日本ノ動靜安危ニ関シ、深キ 尊旨ノコトナレハ、琉球一國ノ故障ヲ以テ、日本ノ動靜安危ヲ顧ミスト云ニ似タリ、尤モ交易ハ商利トセラレタルニ非ラス、存シノ通り外国人ハ通信貿易ト双シテ唱へ、通信スレハ必ス貿易シ、有餘不足ヲ交換スルハ交際ノ要点タリ、然ルニ琉球ハ既ニ英・米・佛ト通信ヲ約定シ、船中欠乏ノ売買ヲ允シタルハ、多寡ノ別アルノ

ミ、清国ニ於テモ其旨承達シ、異儀ナキニアラスヤ云々、  
或ハ厚キ尊旨アラセラル、訳ナレハ、重テ評議ニ及ヒ速  
ニ御受書可差出旨、叮嚀反復説諭セシニ、又両日ヲ経テ、  
豊見城按子・池城親方・小録親方・恩河親方・牧志親雲  
上・豊見城親雲上ノ数名来リテ曰ク、先日来数日厚ク評  
議ニ及ヒ、国王ヘモ申聞ケ候処、琉球一国ノ故障ヲ以テ、  
日本ノ御安危ヲ顧ミサルヤノ御諭言実ニ恐入レリ、其他  
御懇諭ノ趣モ恐入レリ、過日来御内話ノ趣ハ惣テ聞捨テ、  
何事モ御趣意遵奉スルニ議定セリト国王申付候間、御  
受書ハ明日差出スヘク旨申出タリ、仍テ在留佛人ヘ談判  
ノ手順トモ懇談セリ、

三四七 三司官座喜味親方退役ノ顛末

○この文書は、「鹿児島県史料」第二巻の第四九四  
号文書と同文重複により略す。

三四八 和蘭船長崎ヨリ来琉御附人在番奉行ヘノ

書状持参ノ事実及ヒ戊午ノ春井上庄太郎  
其他守衛人員数十名大島ヘ差渡サレタル  
顛末

○この文書は、「鹿児島県史料」第二巻の第四九三  
号文書と同文重複により略す。

三四九 英人清国廣東攻撃ノ顛末

○この文書は、「鹿児島県史料」第二巻の第四八〇  
号文書と同文重複により略す。

三五〇 江田平太郎参府御供命セララル

御勘定方小頭

江田平太郎

右ハ当秋就 御参勤、新番之場ニテ御供被仰付候、左  
候テ出府之上モ右之場ニテ相詰候様被仰付、勤内ハ六  
人賄料被下置候条可申渡候、

三月

島津下總

右安政五年午三月六日、御側役勤町田主馬殿御取次ヲ  
以被仰付置候処、齊彬公被遊御逝去候ニ付、同年八月  
廿五日御用ニテ罷出候処、

太守様 (齊彬公) 御参勤御供被仰付置候面々、此節

又次郎殿 (茂久公旧名) 御参府被為在候ハ、可被召附

旨左衛門殿<sup>下総殿</sup>改名ヨリ被仰渡段、町田主馬殿御取次御達

ヲ以テ、於梅之間致承知候事、

三五一 金価高騰布令

金考兩 代錢八貫文

右ハ是迄七貫五百文替ニテ、致通融候様申付置候得共、大坂表金相場高料ニ付、御定直成右通今日ヨリ被相替候条、手形引付等早速取直、於御藏々入払等致取扱候様申付候、此旨支配中へ申渡、奥掛表方へ相達、諸郷私領へモ可申渡候、

午十二月 駿河<sup>新納</sup>久仰

### 三五二 造士館学風矯正御訓示

○この文書は、「鹿児島県史料」第二卷の第五四七号文書と同文重複により略す。

### 三五三 柴山愛次郎実兄良助へ贈ル書翰

○この文書は、「鹿児島県史料」第二卷の第五六二号文書と同文重複により略す。

### 三五四 柴山愛次郎兄良助ニ海防急務対策建言ノ

事情報告

○この文書は、「鹿児島県史料」第二卷の第五六三号文書と同文重複により略す。

### 三五五 蒸気船雛形製造及ヒ大砲鑄造意見建言ノ

市來

○この文書は、「鹿児島県史料」第二卷の第五六四号文書と同文重複により略す。

### 三五六 参考 非蔵人日記抄

○この文書は、「鹿児島県史料」第二卷の第五七三号文書と同文重複により略す。